



IEHE TOHOKU Report 76
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第28回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [15] 報告書

「主体性」とは何だろうか

—大学入試における評価とその限界への挑戦—

平成30（2018）年10月

東北大学高度教養教育・学生支援機構

第 28 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [15]）

「主体性」とは何だろうか
—— 大学入試における評価とその限界への挑戦 ——

- ◇ 日 時 : 平成 30 年 5 月 21 日（月）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

- | | | |
|------------|--|----------------|
| 司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 樫田 豪利 |
| 開会の辞 | 東北大学総長 | 大野 英男 |
| 基調講演 | 「主体性評価」にどのように向き合うか ―地方国立大学の立場から―
佐賀大学アドミッションセンター教授 | 西郡 大 氏 |
| 現状報告 1 | 目に見える「積極性」は主体性なのか？ ―地方に生きる高校生の現実―
青森県立田名部高等学校教諭
(休憩) | 千葉 栄美 氏 |
| 現状報告 2 | 四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える
香川県立観音寺第一高等学校教諭 | 石井 裕基 氏 |
| 現状報告 3 | 開成における生徒の主体性
開成中学・高等学校教諭 | 有山 智雄 氏 |
| 現状報告 4 | 東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授
(休憩) | 宮本 友弘 氏 |
| 討 議
司 会 | 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授 | 倉元 直樹
秦野 進一 |
| 閉会の辞 | 東北大学理事 | 滝澤 博胤 |

第 28 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [15]）

「主体性」とは何だろうか

—— 大学入試における評価とその限界への挑戦 ——

目 次

第 28 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第 I 部 基調講演	
基調講演者紹介	5
基調講演 : 「主体性評価」にどのように向き合うか ——地方国立大学の立場から—— 佐賀大学アドミッションセンター教授 西郡 大 氏	6
資料	16
第 II 部 現状報告	
現状報告者紹介	23
現状報告 1 : 目に見える「積極性」は主体性なのか？ ——地方に生きる高校生の現実—— 青森県立田名部高等学校教諭 千葉 栄美 氏	27
資料	32
現状報告 2 : 四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える 香川県立観音寺第一高等学校教諭 石井 裕基 氏	40
資料	45
現状報告 3 : 開成における生徒の主体性 開成中学・高等学校教諭 有山 智雄 氏	54
資料	59

現状報告 4 : 東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授

宮本 友弘 氏 65

資料 71

第Ⅲ部 討 議 ―パネルディスカッション― 74

閉会の辞 89

講 評

講評 1 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
青森県立弘前高等学校 葛西 史生 教諭 90

講評 2 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
岩手県立水沢高等学校 蜂須賀 誠 教諭 93

講評 3 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
宮城県仙台第一高等学校 永原 啓嗣 教諭 97

講評 4 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
秋田県立平成高等学校 三浦 史聖 教諭 100

講評 5 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
山形県立山形北高等学校 井上 文 教諭 104

講評 6 : 第 28 回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して
福島県立会津高等学校 田母神 賢一 教頭 109

アンケート・参加者統計

アンケート集計結果 113

アンケート自由記述 114

参加者統計 136

第 28 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



平成 19 年の学校教育法改正によっていわゆる「学力の三要素」が法制化された。今般の大学入試改革ではこの三要素を「多面的・総合的」に評価する多様な取組が大学に求められている。三要素とは「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」及び「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を指す。

中でも多くの大学を最も悩ませているのが、第三の「主体性」に対する評価だろう。この「主体性」とは何を指すのか、何を評価指標とすべきなのか、入学者選抜でその評価が可能なのか、可能だとして「主体性」を評価することは教育的に何をもたらすのか…。

一昨年 3 月に公表された高大接続システム改革会議の最終報告書では、具体的な評価方法として、いわゆるペーパーテストに加えて、調査書、活動報告書、各種記録等、推薦書等、エッセイ、志望理由書、面接、集団討論といった例示がなされた。いずれも長年の大学入

試における選抜方法の多様化・評価尺度の多元化改革の中で活用を推奨されながらも、様々な事情から、一部の推薦入試や AO 入試を除いて十分に活用できていない。しかし、平成 32 年度の大学入学共通テストを機に入学者選抜において「主体性」評価のためこうした資料や方法の活用が改めて要請され、各大学においてもその具体的な在り方の模索が始まっている。

本フォーラムではこの「主体性」をテーマとした。基調講演は地方国立大学の立場から「佐賀大学版 CBT」「特色加点制度」「継続・育成型高大連携カリキュラム」といった目に見える改革の中心を担う佐賀大学アドミッションセンター西郡大教授をお招きし、入試改革について「主体性」の評価を中心としたお話しいただく。さらに、高等学校では「主体性」の評価がどう捉えられているのか、3 名の高校関係者からそれぞれの立場からの現状

報告をお願いする。それを受けて、AO 入試
拡大方針を中心とした東北大学の入試改革の
展望の中で「主体性」の評価をどのように考
えるべきか、東北大学高度教養教育・学生支
援機構宮本友弘准教授が報告する。以上の講
演と報告を受け、フロアからの意見を交えて
討論を行い、そこから高校と大学に突き付け
られた課題と今後の展望を描くことを試みる。

高等学校および大学の先生方、関係する
方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期
待している。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正
を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラ
ムに参加し、フロアの立場からフォーラムに
対してお寄せいただいた講評、およびアンケ
ート・参加者統計から成る。招待参加者は、
東北地方 6 県の高等学校進路指導研究会進学
指導部会等を通じ、各県 1 名ずつ選ばれた
方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿
に対し、フロアからの発言を除き、発言者が
校正を加え、最終的に編集責任者が表現・体
裁の統一・修正を加えたものである。招待参
加者の原稿の編集についても、体裁統一と誤
字脱字の修正のみにとどめ、極力臨場感のあ
る会場の雰囲気やそこに参加された方々が感
じられたこと重視することにした。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、
全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大
変多くの方にご協力をいただいた。心より御
礼を申し上げたい。

（編集担当：

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 石井 光夫・教授 倉元 直樹・
准教授 宮本 友弘・助教 泉 毅）

開 会 の 辞

東北大学総長

大野 英男

樫田豪利特任教授(司会)：

皆さんこんにちは。本日はお忙しい中多数の皆様のご出席をいただき、誠にありがとうございます。予定の時刻となりましたので、第28回東北大学高等教育フォーラム『「主体性」とは何だろうかー大学入試における評価とその限界への挑戦ー』を開始いたします。私は、本日の全体進行を担当いたします東北大学入試センターの樫田と申します。よろしくお願いいたします。初めに、主催者を代表し、東北大学総長大野英男より、ごあいさつを申し上げます。

大野英男総長：

東北大学で総長をしております大野です。本日のフォーラムにご出席いただきまして、誠にありがとうございます。主催者を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。本フォーラムは、今回で28回目です。年2回、春と秋に開催しております。近年は、高校と大学との関係を取り上げ、高大連携、高大接続について議論して参りました。3年前の第22回のフォーラムでは、『大学入試改革にどう向き合うかー中教審高大接続答申を受けてー』と題して、本格的に始まった入試改革を話題として取り上げました。その後一昨年は共通試験、昨年は個別大学における入試改革を取り上げて皆様に活発にご議論をいただきました。高大接続改革シリーズ第4弾とでも言うべき今回は、ここにごきますように『「主体性」とは何だろうか』というテーマを取り上げました。大学入試において、各大学が求める学生像を提示する際に、主体性をどのように位置付け、どのように評価を行うかということは、各大学における教育の考え方と方向性を示す、極めて大切な意味合いがあると考えております。



新しく大学入学共通テストを受験する最初の学年が、この4月に高校に入学いたしました。しかしこの共通テストに関してはまだ不確定な要素が多く、各大学が平成33年度入試について正式に発表できる具体的な中身は限られているというのが現状でございます。東北大学においても、今、多方面にわたる事項について鋭意検討を進めている段階でございます。さて、東北大学は昨年6月に指定国立大学法人の最初の3大学に東京大学、京都大学と共に選定されました。本学は、創造と変革を先導する大学ということを掲げております。とりわけその中でも重要な点は、門戸開放の理念のもとで、志のある学生を広く内外から受け入れ、その挑戦する心、学生諸君の挑戦する心に火をつける教育を実践することであります。入り口に当たる大学入試は、その基盤として極めて重要であると考えています。本学のみならず、各大学がそれぞれの立場できちんとした人的基盤を築いていくために、本フォーラムにおける議論というものがお役に立つとすると、大変うれしく思います。本地基調講演としてご登壇いただく佐賀大学アドミッションセンター長の西郡大教授は、地方大学の立場から主体性の評価に関して先導的な研究、実践を積み重ねてこられました。この分野の第一人者であります。創意にあふれた先見的な取り組みの中から得られる知

見をご披露いただけるものと期待しております。ちなみに西郡先生は本学で学位を取得されました、本学のOBでございます。続いて4名の先生方に現状報告をお願い申し上げております。まず高等学校の立場からは、青森県立田名部高等学校千葉栄美先生、香川県立観音寺第一高等学校石井裕基先生、そして東京の私立開成中学・高等学校の有山智雄先生のお三方にご登壇いただきます。公立と私立、あるいは東日本と西日本、都会と地方、という多様な軸で眺めた場合、異なる立場からのお話をいただくことにより、現在の高大接続改革の全体像が立体的に浮き彫りになることを期待しております。また、本学高度教養教育・学生支援機構入試センターの宮本友弘准教授から、私どもが進めておりますAO入試の拡大方針を中心にいたしました、本学の入試改革、その中で主体性の評価がどのように位置付けられているのかについて、ご報告申し上げます。最後に、本日は大変長時間にわたりますが、活発なご議論をお願いいたします。そして、実りある会合となることを願って、私の開会のごあいさつとさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

(拍手)

樫田豪利特任教授(司会)：

ここで、私から2点お知らせをいたします。まず本日の予定についてです。初めに基調講演として佐賀大学アドミッションセンター教授西郡大先生から40分ほどお話をいただきます。その後、基調講演の後に高等学校及び東北大学入試センターの4名の先生方よりお一人20分程度で現状報告をいただきます。現状報告の後、5名の先生方にご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえてご討議をいただきます。なお、基調講演、現状報告でお話いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、受付で配布いたしました資料集に同封しております



ので、ご覧いただければと思います。また間に2回休憩をはさみます。1回目は現状報告の一人目の後に10分程度、2回目は現状報告終了後に20分程度の2回を予定しております。次をお願いします。本日の配布資料には、質問票とアンケート用紙が同封されています。基調講演、現状報告についてのご質問やご意見は、質問用紙にご記入の上、2回目の休憩時間に場内の係の者にお渡しください。討議において反映させていただきます。

また、アンケート用紙については、受付に回収箱を設置しておりますので、お帰りの際ご提出いただければ幸いです。なお、今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を後ほどご出席の皆様にお送りすることとしております。皆様のご協力をいただき、本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

基調講演者紹介

基調講演者

西郡 大（にしごおり だい）氏

1975 年大分県生まれ

〔教員歴〕

佐賀大学アドミッションセンター 准教授（8 年間）

佐賀大学アドミッションセンター 教授（2 年間）

〔主な研究歴〕

専門は教育情報学（大学入試に関する研究）

〔主な著書，研究業績〕

1. 西郡大.「個別大学における高大接続改革モデルー地方国立大学の挑戦ー」『個別大学の入試改革』（東北大学高度教養教育・学生支援機構 [編]）,pp.87-111 東北大学出版会 2018 年 3 月.
2. 西郡大・山口明德・松高和秀・長田聡史・坂口幸一・福井寿雄・高森裕美子・園田泰正・兒玉浩明.「デジタル技術を活用したタブレット入試の開発 ～多面的・総合的評価に向けた技術的検討～」『大学入試研究ジャーナル（No27）』,pp.63-69,2017 年 3 月.
3. 西郡大.「進化する『AO 型入試』 高大接続答申における『多面的・総合的な評価』の特徴」『カレッジマネジメント』197 号,pp.6-11,2016 年.
4. 西郡大.「どのような学生が「主体性」を伴う学習行動をしてきたか」『高等教育の質とその評価 日本と世界』（山田礼子 [編]）, 東信堂,pp.213-228,2016 年 9 月.
5. 西郡大.「受験生心理からみる大学入試」『大学入試と高校現場・進学指導の教育的意義-』（東北大学高等教育開発推進センター[編]）,pp.27-66, 東北大学出版会 2013 年 3 月.
6. 西郡大.「大学入学者選抜における公平性・公正性の再考」『日本の教育を問いなおす 1 拡大する社会格差に挑む教育』（西村和雄・大森不二雄・倉元直樹・木村拓也 [編]）, 東信堂,pp.153-174,2010 年 10 月.

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会，日本高等教育学会など

基調講演：「主体性評価」にどのように向き合うか —地方国立大学の立場から—

佐賀大学アドミッションセンター教授

西郡 大 氏

〔講師紹介〕

梶田豪利特任教授(司会)：

それではこれより、基調講演となります。題目は『「主体性評価」にどのように向き合うか～地方国立大学の立場から～』です。佐賀大学アドミッションセンター教授西郡大先生、よろしくお願いいたします。

(拍手)

西郡大教授：

佐賀大学の西郡と申します。今日は主体性ということで、全国の関係者が非常に敏感になっている難しいテーマを取り扱うわけですが、私の話としては、主体性の評価を考えていく上で、いろんな観点であるとか、考え方というものをお話させていただきたいと思います。

大きく分けて4つのテーマで話しますが、メインはこの2と3のところになります。時間があれば地方国立大学、佐賀大学の話になりますが、その事例について少しお話できればと考えております。ではまず個人認識としての主体性ということになりますが、少し会場の皆様にご協力をいただきたいと思います。こちらをご覧ください。手元の資料でも構いませんけれども、今から3つの記述が出ますので、それぞれを読んでいただいて、高校生を対象にイメージしていただきたいんですけど、これは主体性を持っているかどうかを判断してほしいと思います。

個人認識としての主体性

まず一つ目です。「自ら進んで積極的に物事に



取り組み、自分の意見をはっきりと述べることができる」と共に、自分に自信を持っている」。二つ目です。「目に見える顕著な行動として、確認することはできなが、自分自身で物事をしっかりと考えているような様子が見られる」。いかがでしょうか。主体的だなというふうに捉えられますでしょうか。3つ目です。「一見、不器用で成功にたどり着くことはなかなかできないが、その失敗を反省し、地道に課題を乗り越えていく姿勢が見られる」。こういった様子がみられる3名の生徒が前に立ったとして、皆様はどういうふうに判断されるでしょうか。

さらに、これに対して主体性があると評価する順に並べ替えていただきたいと思います。少し考えていただけますでしょうか。何番、何番、何番というふうに考えていただきたいと思います。時間もありますので、もうインスピレーションで構いません。組み合わせとして、6つともうひとつは全部イコールというふうになると思います。1, 2, 3だったという方は、どのぐらいいますでしょうか。はい。1, 3, 2。はい。2, 1, 3。あまり多くないですね。2, 3, 1。少し上がります。3, 2, 1。ちょっと上がりました。3, 1, 2。はい。全部1, 2, 3イコールかという方。

はい。これだけ、7つのパターンがありますが、多い少ないはありましたけれども、それぞれのところでばらばらに手が上がりました。皆さんが同じところで手を挙げられると困ったんですけれども、結果的にばらついて良かったです。何が言いたいかと言いますと、評価する人であるとか評価する分野、あるいはその背景、そういったものの違いによって、主体的っていうもの、主体性の捉え方っていうものは当然異なると考えられます。さらにその捉えることが難しい主体性なんですけれども、それについてさらに程度を比較する、このことはもっと難しいと。ですが、その中で、学力の三要素として言われている主体性を持ってうんぬんというものを評価することが求められているわけです。この非常に難しいこの主体性という山に対して、我々はどのように向き合うべきなのかと。そういったことを少し考えてみたいと思います。

「主体性とは何か」。今日のテーマになりますが、インターネットとかで文献などを調べてみますと、主体性とは何かと。哲学者のサルトルが議論しているというのがありますし、後ほど宮本先生からも触れられるかもしれませんが、心理学の分野ではエリクソンという人が主体、アイデンティティという観点から議論しています。最近の文献では、これは医学教育の分野で書かれたものなんですけれども、主体性は教えられるかといったものがあります。いろんな形で主体性というものは議論されているわけなんですけれども、やはり非常に難しい。どう捉えればいいのか、なかなかこれだというものはないのかもしれませんが。ちなみにこれは、参考資料として学習指導要領の中では主体的な学びとかっていうキーワードと関連して、主体的に学習に取り組む態度であるとか、学びに向かう力であるとか、そういった言葉で整理されています。

では、実際に教育に関わる人たちはどう捉えているのかということなんですけれども、関西学院大学さんが文部科学省の委託授業の中で主体性について調査をされています。その情報を少し

引用させてもらっているんですが、高校の先生方が考える、「探究活動において主体的だと考えられる行動の例」というのは、整理するとこんなものだそうです。授業外の自主的な活動であるとか、他者と積極的に意見交換をするとか、発表の場に参加する。こういったことが探究活動における主体的だと考えられる行動の例ということになっています。一方で大学の教員が考える、こちらはちょっと対象が違うんですけれども、正課教育、これにおいて主体的だと考えられる行動の例というのは何なのかと言いますと、学生が課題に対して、他の学生と進んで議論をしているとか、指示していない課題に取り組んだ時とか、授業中に板書の内容に疑問が生じて質問をするなどです。これらのことは佐賀大学にも調査が来たんですけれども、同じような回答が多かったと記憶しています。一方でこれは参考情報ですけれども、企業の人事担当者が新入社員に対して主体的だと考えられる行動の例ということで、こういったことが挙げられています。

いろんな捉え方があるとは思いますが、これを大学入試という場面で、ざっくりと捉えようとすると、こういったことじゃないのかなと私個人としては解釈しています。「自らの学びを深めようとする姿勢や行動」に関するものかなと。こういったことをイメージして、本日、主体性ということについて、話していきたいと思います。また、いろんな主体的な活動とか、主体性というものに関して議論する際には、やはりいろんな人たちがいるわけですね。どこの学力層を私が想定しているかということ、あくまで地方国立大学の立場ということで今日はお話しますので、偏差値帯としては50から60弱ぐらい。ここら辺に該当する集団をイメージして、今日はお話させていただきます。

主体性評価へのアプローチ

主体性の評価。いろんな考え方、捉え方があると思いますので、少しいろんな立場から考えて

みたいと思います。まず行動主義的立場ということで、行動とかそういったものに注目しようという考え方です。これは何なのかというと、主体性を持っている子たちは、主体性があるがためにそれが行動に移ると、その行動を通して、生徒会であるとか、いろんな実績等を作って、それが成果や実績に結びついていると。だからこの成果とか実績とかっていう客観的な情報を見れば、それは主体性というものを間接的に見ることができるだろう。成果や実績、この行動を通して見えるものに注目して評価しようという考え方です。ですが、本当に主体的と言えるかどうかは疑問です。当然のことながら例えばリーダーを決める際に、自ら手を挙げてリーダーになった人もいるかもしれませんが、じゃんけんで決めたり、輪番制で決めたりすることも考えられます。そのため、これだけの情報で、この子は主体的だなと判断するのは恐らく難しいということもありますし、いろんな課題があるかと思えます。

一方でこういったことも重要だということが言われています。「プロセス」ですね。プロセスを重視する立場ということで、学びであるとか活動、そのプロセス自体を重視しようという考え方です。どのように学んだかとか、あるいは何か困難に直面した際にどう乗り越えたとか、そういったところになります。そして、それを評価する材料として注目されているのが、例えばポートフォリオと呼ばれるようなものです。学びの過程をいろんな形で情報として蓄積していつて、その場での先生方とのやり取りであるとか、エビデンスであるとかっていうものを蓄えていくものです。ですがこれも、なかなか一筋縄ではない課題があります。というのも、それぞれの教育活動を行う個人によって、その文脈であるとか背景というのがかなり異なるということも考えられますし、これをあえて評価しようとした時には評価基準というものを作りにくい。さらに膨大な情報量がここにはありますので、その評価に要する時間というものが相当かかる

ということで、コストとしては高くなるということがあります。

これらの点を整理しますと、さっきのひとつ目に出てきた行動主義的な立場からの評価ということを考えますと、例えば書類審査とか面接試験において、結果とか成果をメインに見ると、そうすればその客観的情報だけを見ればいいので、評価コストは最低限になります。当然、評価対象者も増えていって、多くの受験生を対象に評価することもできると考えられるんですが、やはり難しいのは異なる分野の活動実績です。サッカーの競技人口とマイナーな競技人口の活動を比べるっていうのは、基本的に難しい上に、本人がどれぐらい関与したのかっていうその真偽性というのなかなか確認することができないという課題があります。一方でプロセス重視の立場から考えますと、この書類審査や面接試験に加えてパフォーマンステストとか、いろんな形が考えられますが、そのたくさんの情報を対象に評価しますので、評価コストというのは高くなります。ですので、丁寧に見るために限られた受験者を想定しなければならないころがあります。そういった意味では評価にかかる時間であるとか、適切なループバックの作成が必要になるわけです。これに関しましては、AO入試とか推薦入試などの特別入試で取り扱うことは可能かもしれませんが、一般入試とかも含めて検討する際には色々考えなければいけないということになります。ここで言いたいことは、どちらか一方がよいということではありません。

ではそういったことを踏まえて、じゃあ評価を実際に行おうというふうに考えた際に、こういった作業が考えられるのでしょうか。いろんな作業の考え方があるかもしれませんが、仮に主体性とか協調性という概念があったとして、じゃあこれを評価するために、複数の評価者で評価しようとなった時には、自分が抱えているイメージだけでは評価できません。ある程度他者と共有できるものを持たなければいけない。そうした時に、主体性を持っている人たちはど

ういった行動を起こすのかなということを考えながら、目に見える行動に落としながら評価基準というものを考えていく必要があります。主体性や協調性がある人は、どういった行動とか姿勢につながるんだろうかということ考えていくわけです。ですので、言い換えればこういった資質があるんだとすれば、どんな行動を取るんだろうかということを考えながらやっていくことになります。何々の場合、〇〇をしている。そういったふうに、具体的な行動とか様子を洗い出して行って、それをもとに評価基準の作成をしていく。こういったアプローチが考えられます。

このように作った評価基準を用いた評価というのは、構造化した評価と言われます。例えば、主体性というのを、「自ら明確な意志を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」と捉えるのであれば、5点満点で採点する場合、一番高い「5」は、「明確な意志を持ち、当事者意識を高く行動をしている」というようなものであったり。逆に低い基準である「1」あったら、「周囲に依存しており、物事に対する当事者意識が希薄である」といったイメージになります。この基準をどのぐらい具体的にするかっていうのは、それぞれの評価の考え方によるかもしれませんが、このように少なくともこの間隔性は担保できなくても、順序性というところぐらいまでは、ある程度想定しながらこのルール化をしていくということになるわけです。これをやるためにはやはりその前にお示ししました、具体的な行動、そういったものをもとに基準を作成していかなければいけないということになります。

ですが、じゃあルールを作ればいい評価はできるのかというと、必ずしもそうではないと思われれます。これは面接試験の例なんですけれども、ある大学のAO入試において、面接者が複数いて、その評価の一致率をみたものです。例えば工学部だったら、工学部の先生たちがその工学部に関する専門的な関心とか、そういったことについて質問したことに対しての評価の一致率は、50%から80%程度でした。一方で、何と

なく漠然とした志望意欲であるとか、態度であるとか、その専門分野とはちょっと違うところの文脈で評価するものに対しては、これはものすごく低いんですけれども、10%に届いていないということが報告されています。じゃあこういったことに対してどうすればいいのかというと、当然のことながらルーブリックなどをもっとルール化して、構造化して、強化すればいいじゃないかという話になるんですが、本当にこれでいいのかという疑問があります。一致率は当然高くなるかもしれませんが、何のために面接試験とかをやっているかというと、やはり面接者と受験生との対話的な相互作用で生じるいろんな展開の中で評価をしようというのが1つの狙いです。そうすると、過度にルール化してしまいますと、そういった視点を一定の枠組みに押し込めてしまうというふうな、せっかく面接試験でやる意味が薄れてしまうと。あまりに一致率にこだわってしまえば、質問紙で聞いた方がよっぽど効率的だし、その方が一致率の高い試験ができるということになるわけです。

そういったルール化する方法というものを踏まえて、もうひとつ、こういった枠組みも提示させていただきたいと思います。分析的評価と総合的評価、呼び方は色々あると思いますが、こんな考え方ができると思います。まず、分析的評価ですが、色々評価のルールを作って構造化して、分析的に評価しようというものです。例えば主体性と言っても、いろんな観点があるでしょうということで、ここでは3つの観点を決めてそれぞれに配点を振ります。この観点3は30点与えますというような形で、それぞれの観点到応じて点数を付けていって、その合計点を見るようなものです。こうすると、非常に採点する方はやりやすいんですが、この観点をどのように設定するかとか、どのようにウェイトを置くのかという難しさがありますし、さらにこの部分点の総和が全体の印象と一致しないということも多々あります。佐賀大学でも芸術系の分野がありますけれども、芸術分野の先生方は、こうい

った部分点の総和ではなくて、全体的な観点から見る方がいい評価ができるというふうに言われます。またこれって、かなりルールが多いので、時間もかかるという課題点があります。

一方で総合的評価っていうのは、自由度がこちらよりもやや高いものです。観点はひとつ。全体的な視点で総合的に評価しようというもので、一観点を設けてそれを評価するというものになります。ただ欠点として考えられることは、当然のことながらルールがやや漠然としますので、評価する人たちが共通のルールに基づいて、うまく共有化できないというところがありますし、先ほど信頼性という話がありましたが、少し疑問符が付くかもしれません。どちらがいいのかというところは、それぞれどういった募集区分で評価するのかというところにもよりますけれども、どう使い分けるかということも、評価の観点からみると、とても必要なものではなからうかと思います。

その中で、しっかりと主体性というものを評価して、その評価に応じて識別していこうとした場合に、やはり点数差としてはばらついた方がいいわけですが、これには非常に難しいところがあります。例えば活動や実績、そういったものを中心に評価しようとした場合、こういうのは簡単なんです。例えば3人の評価者がいて、3人ともみんな高く評価するものですね。例えば、数学オリンピックとかの受賞者が来たら、みんなこれを高く評価します。全員が一致して、誰もが高い評価を与える。この評価は比較的簡単です。逆に、その3人の評価者がみんな低く評価する。出されてきたものがもう、資料としても非常に不十分で、ちょっとこの子を受け入れると入学後大変かなというものも比較的評価しやすい。つまりAとCというものは簡単に識別できるんですけども、やはり一番大きいものはここなんです。評価に差を付けにくい内容という部分です。つまり、明確な根拠とか理由を持って、細かい点数化っていうのが非常に困難な部分になります。このBというのをあまり広く取

りすぎても差が付かないので、付けたとしてもここを中心にAまでは届かないけれども、ややプラスかなと。Cまでは行かないけれどもややマイナスかなということで、現実的にはせいぜい4段階か5段階評価っていうのが現実的かなと思います。そう考えた時に、さっきの分析的評価っていうのがありましたけれども、その評価観点別にこういったものを積み上げていった時に、いろんな誤差が積みあがった形で、最終的な評価に影響を及ぼすかもしれません。ですので、先ほどの分析的な評価と総合的評価っていうのを考えた時に、個人的には大量の受験生を対象とする際には総合的評価の方が適しているのかな、まだ妥当なのかな。理想的だとは言えませんが、まだましなのかなというふうに考えております。

色々評価について見てきましたけれども、それぞれ大学入試で行った評価方法というのは当然のことながら検証をしなければいけません。例えば、入学後に大学の先生たちが、この学生主体的だなというふうに評価する。そういった学生の多くが仮に入試で主体性を評価していた時に、その主体性の得点が高ければ、ある程度その評価の妥当性というものが担保できるわけです。ですが、もうちょっと検証を積み上げていって、他の能力や資質ですね。知識とか技能、思考力とか判断力。いわゆる学力検査等の得点と、入試の時に評価した主体性の得点の関係性において、強い相関関係があったらどうなのか。こんな解釈が成り立つかもしれません。主体性を持っているという人たちは、主体的に動いて、これらの能力を身に付けている。そうした時に、この主体性というものを直接的に見て評価するという意味はどれくらい重要なのかというところに行きついてしまいます。

それを整理すると、こういうふうなイメージになります。ここは直接的に主体性を評価するタイプです。これは間接的に評価するやつなんですけれども、主体性を直接評価しなくても、他の評価で、間接的に評価できるとする。さらにそ

の評価が、公平性が確保されていて、さらに効率的であったとすれば、どういったことが起こるかという、当然のことながら実施する大学としては、それはこっちでしょうということになるんじゃないかと思います。そうなった時に、入試の評価とは別に考えておくべき視点というところをちゃんと踏まえておかなければいけないということになります。中教審の答申ではこういったことが言われています。「接続段階の評価の在り方が変われば、それを梃子のひとつとして、高等学校教育及び大学教育の在り方も大きく転換すると考えられる」。つまり、大学入試の影響力を以て高校教育に一定の何かしらの転換を促そうというようなのが趣旨です。ここをどう捉えていくのかというのが主体性評価においては、考えておかなければいけない視点ではないかと思います。

入試制度設計で意識すべきこと

ということで、今の考え方を踏まえて入試制度設計で意識すべきこと。いろんな観点があると思いますが、ここではあくまで一般入試で、仮に評価するということを想定した場合ということでお聞きいただければと思います。入試がもたらす影響力っていうのは、高校現場において非常に大きな影響をもたらします。例えば、大学入試において主体的な活動や実績を評価しますよというふうに宣言した場合であれば、高校時代の生活で生ずる活動とかっていうものが活性化するかもしれません。その中で健全な動機付けの中において、それを素直にアピールするんだったら、それはそれで理想的な形かもしれませんが、なかなかそうはいかないのは現実だと思います。生徒たちにとって、やはり大学に入学したい。第一志望の大学に行きたいというのが根幹にありますので、どんな活動や実績が入試に有利なのか、入試に有利な活動や資格を優先的に取ろう。自分がやりたいことよりも、それを優先的にやろうという動機付けられることは十分に考えられるわけですし、一部の指導熱心

な先生がいざしたら、「そんな活動や実績じゃ、主体的だと評価してくれないぞ」というふうに指導されるかもしれません。つまり、ある種主体的であるということを道具的に使うことが考えられるわけです。当然のことながら、生徒たちが自らやろうという主体性というものとはかけ離れたものになっていく可能性が高くなります。こういったものをどう考えるかというところが、ひとつ重要な点ではなかろうかと思います。

そこで、色々な考え方があると思いますが、私自身は最近、少しこういうふうを考えています。大学が、主体的な活動実績を評価しますよというふうなことを言います。あるいは、マスコミがそういった入試になりますというふうに言うと、どうしてもやっぱり受け手の側としては、中高一貫校やSSH校が有利だとか、課題発見型のカリキュラムの方が有利だというふうに、過敏な反応っていうのがあったりします。ですが、本当にそこまで反応する必要があるのかというところを、少し考えてみたいわけです。こういうふうな反応が起こる背景には、入試での評価の内訳が、主体性というものが8割ぐらいを占めて、その他の評価方法がぎゅっと脇に押しやられるような。つまり、入試で主体性等の評価が合否を決定付けるような印象を持つんですけれども、これはもちろんAO入試とかであったらこういった形もあるかもしれませんが、一般入試とかにおいて、そういったことが起こるというのは、少し考えにくいのではないかと思います。

本当に合否を大きく決定付けるようなことになるのかということを、ここで考えてみたいと思います。実際の評価ということで、ふたつのケースを示しますが、ここでケース1として示すのが一番オーソドックスな形です。一般入試だと考えてください。共通テスト500点。個別学力検査400点。そこに主体性100点ということで、この合計点で評価しますよと言うと、こういう配点なのかというふうに受け手側は思います。ですが、これをあえてこういうふうに考えてみたいと思います。共通テストと個別学力検査と

いうものがあつたところに、主体性が 100 点ぽんと乗ってきたよというふうなことを考えますと、実際の合格の分布っていうのはこういうふうになります。低い得点から高い得点まで並べますと、上の方はですねこの主体性の 100 点分がゼロ点でも、合格する受験者層であります。一方でこちらは主体性評価が満点でも不合格となる受験者層ということになりますので、結局この影響を受けるのは、ここのボーダー層しか生じないということになります。もちろんここにもすごい数の受験生が分布しているということであれば、その部分に該当する受験生にとっては大きな影響かもしれませんが、全体として見れば主体性の影響力っていうものは限定的なものと言ってもいいのかもしれませんが、ただし、配点っていうのは受験生に対するメッセージになります。これが 100 点だったら、あるいは 500 点だったら、それ分だけ重視するのかというメッセージになるということです。しかし、実はその配点というもののより大きな要因があります。それは、どの程度の差を付けて採点するかということです。こちらの方が、よほど合否に影響を及ぼすということになります。例えば、主体性の部分を配点 500 点としたとしても、その得点のほとんどが 400 点のところに散らばっていたら、もう主体性評価自体の影響度っていうものは相当小さくなるということになるわけです。ですので、どのぐらいの散らばりを持って採点するのかというのは、結局大学や学部の方針になりますので、それが実際の影響力というふうになるかと考えられます。

もうひとつのケースです。もう少し主体性評価というものを、大学入試の中で重視しようというふうなことを考えた場合、こういったケースが考えられると思います。これは共通テストと個別学力検査の点数で並べておいて、ある基準点を以て、これより上の人たちだけを対象に評価しようという考え方です。つまり、基礎学力の部分が満たされていると考えられる得点以上の受験者に対して、主体性を評価しよう。ここ

の点数は、共通テストや個別学力検査の得点は引き継がずに御破算にしようという、いわゆる、資格試験として扱うというような考え方です。そうすると当然のことながら、主体性の評価の影響力は大きくなりますが、ここで考えなければいけないのは、理想的、あるいは適切な基準点です。ここをどう設定するのかというのが明確な根拠を持って設定するのはなかなか難しいところもありますし、一定の競争倍率があればいいのかもしれませんが、それが下がってしまうと、この基準点自体が機能しないということもあります。また、この部分を御破算にして、この主体性をメインに評価するとなると、その公平性の確保とか、受験生自身の納得性の担保っていうものが、相当強く求められるということになるわけです。さらにこの基準を満たしていないという人たちは、主体性評価の対象とはなりません。そういったことを考えると、現実的な入試制度設計っていうのはいろいろと課題を含んでいると言えます。

先ほどから繰り返しになりますけれども、主体性を評価したくても、その評価技術っていうものは、あまり確立されたものがなくて、非常に難しいところがあります。そうであれば、まず評価技術として安定している手法ですね。学力検査だとか、これまでの伝統的に蓄積された技術があります。入学者に求める能力や資質っていうのは主体性以外にもありますので、そういった部分を確実に評価することが、まず重要な前提になるのではなかろうかと思います。その上で、主体性を評価するわけですが、さっき見ましたようにケース 1 のようなオーソドックスな考え方だと、その主体性評価自体が合否を決定付ける影響っていうのは、全体で見れば限定的だというふうにも言うことができます。と考えれば、どういうふうにその主体性評価を位置付けるのかということになってきますけれども、受験生にとって適度な動機付け、つまり高校教育をゆがめるような過度な動機付けとして機能するようなものではなくて、ここの適度

なというのが非常に難しいんですけれども、こういったものがどういった状態なのかを考えていく方が、重要ではないかと思います。それを絵にしますと、やはり一般入試ですので受験生である高校生が、日ごろの学習活動を通して、努力が直接的に反映されやすい土台。学力検査なんていうのは最たるものかもしれませんが、そういったものを土台にした上で、主体性評価を課すことによって、高校生たちが日ごろの高校生活を通して頑張ってきたことを一度振り返られるような、そういった意味合いも含めた位置付けが必要になるのではないかと思います。

さて、主体性の話、その評価の話をしてきましたけれども、実はそれとは別に考慮すべき大前提があります。これは特に大学の関係者にとって必要な視点ではなかろうかと思いますが、主体性評価というと評価方法に注目が集まりがちなんですけれども、もっと重要な前提があります。それは何かというと、これは金魚の水槽。金魚すくいだと思ってください。この水槽の中の金魚が受験生だとして、全ての金魚が、その大学にとって欲しい金魚だと思える金魚だったら、もう道具なんて何でもいいんです。網を使ってもいいですし、金魚すくいを使ってもいいわけですね。どの道具を使っても自分が欲しい金魚が取れるわけですので、受験の文脈で言えばクジでもじゃんけんでもいいわけです。そうすれば、その欲しい人材が取れるわけです。一方で、全ての金魚が欲しいと思えない金魚だったら、どの道具を使っても全く意味がない。何を使って取っても、取りたい金魚ではないわけです。ところで、どの道具が適切であるかが重要になってくるのはここですね。欲しいと思える金魚が一定数いる場合。自分が欲しいと思う数と同程度いる場合は、欲しい金魚を選定して、確実にすくえる道具は何なのかということを考える必要があります。こちら絵も同じですけれども、欲しいと思える金魚が少ない場合ですね。自分が欲しいと思う数より少ない場合は、確実にそれをすくった上で、足りない部分をどう補うかとい

うことになると思います。要は何が言いたいかというと、評価や方法ということを検討するのも重要なんです、欲しいと思える。あるいはアドミッションポリシーに沿っている志願者層を形成しない限り、この方法の議論をしても意味がないということになります。しっかりとこういった志願者集団というものをどう形成するのかということをやった上で、評価方法を大学としては考えていかなければいけないということになるかと思います。

地方国立 S 大学の事例

残り 10 分弱ですので、最後に事例をご紹介します。佐賀大学は、地方国立大学です。ここは東北ですので、もう遠い、九州の話になります。こんな大学です。6 学部あって、学生数は大体 6,000 人ぐらいの大学。そういった大学の話ということになります。佐賀大学では高大接続改革を進めているんですけれども、この学力の三要素と呼ばれるものに対して、共通テストで見るところ、あと個別試験で見るところ。これは一般入試ではないですけれども、ペーパーベースドテストにプラスして、タブレットとかを用いた CBT などを活用して、思考力等を見ようということを今行っています。今日のテーマである主体性等ということに関しましては、この特色加点という制度が対象です。この考え方ってどういったものかって言うと、あえて加点分を当初の配点から外に出します。つまり、外に出すことによって受験生に意識してほしいというものです。特色加点は、申請してもしなくても構いません。申請すれば、アドミッションポリシーに応じて何かしらの形で加点。なければそこは点数が入らないということになります。申請の様式は、活動実績の名称とか実施機関、活動期間や活動概要に加えて、申告する実績とか活動を通して身に付けた能力とかスキル、あるいは経験等が、大学入学後にどう活かせるのかなど、アドミッションポリシーとの関係性を記述してもらう予定です。この部分は、アメリカ

の入試でいえば、エッセイみたいなものになるかもしれません。受験生のアピール部分です。ですので、例えば理系の分野で有利な活動実績ってなんですかというふうに聞かれるんですけども、もちろんその探求型の活動とかがあったら、それが評価されるかもしれませんが、全く別の分野で入学後にこうした経験が生かれますというふうにアピールさえできれば、そこに点数が入らないわけではありません。あくまでも一般入試を対象として、こういった制度設計をしています。

その中で今言いましたように、「申告する実績とか活動を通して身に付けた能力とかスキル、あるいは経験等が、大学入学後はどう活かせるのかを書いてね」というふうに、大学側はメッセージとしては発信するわけです。そうすると、高校生はこれまでの自分を振り返ることになります。じゃあ効果的なアピールするためには何が重要かって言うと、これは就職試験でも一緒ですけれども、結局何を学ぶのかとか、どんなことを求められているのかということを知らないと、十分なアピールできないわけですね。つまり、1回ここで振り返ってもらい、高校までの自分と大学で求められているということを一度すり合わせてもらいたいと考えています。その狙いは何なのかというと、主体性の評価というよりも、大学と学生のマッチングということになります。

では一般入試においてどう評価するのかということになりますが、基本的にボーダー層が対象になります。さっき出てきた絵のように、特色加点申請書を採点してゼロ点であっても合格となる受験者層。逆に、満点であっても不合格となる受験者層は特色加点として採点しても最終的な合否の結果に影響がないので、ここは採点しません。ここの入れ替わる可能性があるところだけを採点するということになります。ちなみに、この部分の得点帯ですけれども、本当に1点差の中にたくさんの受験者がいます。その数点差で、合否が分かれている層なんですけど、この点数差に、本当に能力的な差っていうのがあるの

かっていうと、あまりない。であれば、違った側面を評価して、そこだけでちょっとひっくり返してはどうかという考え方になります。大学や学部にとってミスマッチの学生を一人でも減らすことができるということは大きなメリットとなるのではないかと考えます。

最後にですけれども、こういった形がひとつの方向性として考えられるだろうというところをお示しして終わりたいと思います。これまで、紙で出願を行う際ですけれども、願書とか何か活動実績を出すのであれば、それと一緒に根拠資料や参考資料を出すということが一般的でした。ただ、紙でやると新聞記事とか賞状とか証明書。そういったものを何枚以内でしっかりと整理して出してくださいねって言わないと、膨大で紙で提出されてもそれを評価するには限界があるという評価環境上の問題点があります。ですが、今年から佐賀大学とか、九州地区の国立大学では導入を始めたんですけれども、インターネット出願が導入されることによって、ひとつの形としてこういった可能性が生じてきます。受験生はネット上から志望理由書であったり、活動実績とか学修計画書などの大学が求める項目を入力します。そこに根拠資料として、例えば新聞記事のハードコピーとか、場合によっては写真とか、いろんなものが添付できます。ここにはeポートフォリオって書いていますけれども、これがないと不利になるというわけではなくて、ひとつの根拠資料としての幅が広がるということです。例えば、高校時代における発表会とかの動画であるとか、何かしらのコンテンツであるとか、いろんな情報などを蓄積することがあると思いますが、それをショーケースという形に集約すれば、これまでにはない情報量をもった根拠資料となります。そうすると、申請書の文章のうまい下手とかで、差が付くんじゃないのかっていう心配があるかもしれませんが、どんなに素晴らしい文章を書いても、その根拠はどうなんですかっていうふうに見ていくと、この主張はあまり根拠がないねといった印象に左右され

ない評価にも繋がるものだと思います。これが必ずしもベストだとは思いませんけれども、これまでとは違ったアピールの仕方、幅が広がるということで、ひとつの形ではなかろうかと思います。もちろん、AO入試や推薦入試で深く、その生徒の情報をたくさん見たいという場合は、こういった情報の広がりには役に立つのではないかと思います。佐賀大学では今度の一般入試から実際にこれを導入します。こういったものを通じて、一般入試の中においても、システム的にある程度評価環境というものを整備して、書類審査として主体性に関わる評価していきたいと考えているところでございます。以上で、私の報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

樫田豪利特任教授(司会)：

西郡先生、ありがとうございました。ご質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

資料

「主体性評価」にどのように向き合うか？
～地方国立大学の立場から～



西部 大（佐賀大学）

3

「主体性がある」と評価しますか？

- 1 自ら進んで積極的に物事に取り組み、自分の意見をはっきりと述べるができるとともに、自分に自信を持っている。
- 2 目に見える顕著な行動として確認することはできないが、自分自身で物事をしっかりと考えているような雰囲気がある。
- 3 一見、不器用で成功に辿り着くことはなかなかできないが、失敗を反省し、地道に課題を乗り越えていく姿勢がみられる。

上記①～③について、
「主体性がある」と評価する順に並び替えてください。

4

本日の内容

1. 個人認識としての「主体性」
2. 主体性評価へのアプローチ
3. 入試制度設計で意識すべきこと
4. 地方国立S大学の事例



2

みなさんの評価結果は？

1	2	3
1	3	2
2	1	3
2	3	1

3	2	1
3	1	2
1	2	3

1 = 2 = 3



5

個人認識としての「主体性」

3

個人個人の主体性認識は多様？

- 評価する人、評価する分野、背景などの違いによって「主体性」の捉え方は異なるものと考えられる。
- 捉えることが難しい「主体性」について、さらにその程度を比較することは、もっと難しい。
- しかし、「学力の3要素」の1つとして、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価することが求められている。

どのように向き合うか？

- ・ 何を考える必要があるか
- ・ 理想を実現できるのか？
- ・ 現実的な問題は？
- ・ 妥協点を探る必要性 など



主体性

6

「主体性」とは何か？

7

参考

企業での主体的行動の捉え方

文部科学省大学入学資格推進委託事業（主体性分野）作成の資料より

企業人事担当者が考える新任社員の業務に関する主体的だと考えられる行動の例

- 言われた事以上のことをやる
- 1教える、いろいろな推測して10質問してくる
- 自分の意見が言える
- 自ら積極的に行動する
- 自分の企画を上司に提案しているとき



10

参考

高等学校学習指導要領（改訂版）の表現から

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）＜2016年12月＞

「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること」

すべての教科・科目等を以下の3本の柱で再整理

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

「第1章総則」より抜粋

8

個人的な解釈としては

大学入試という場で「主体性」を考えた場合

「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」

に関するもの・・・？

11

高校と大学での主体的行動の捉え方

文部科学省大学入学資格推進委託事業（主体性分野）作成の資料より

高校教員が考える探究活動における主体的だと考えられる行動の例

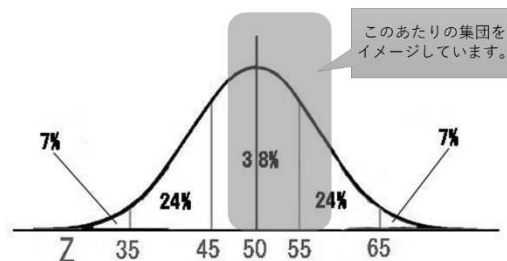
- 学外の人たちへのコンタクト、実際の連絡やインタビューの実施等
- 授業外の自主的な活動
- 生徒自身によるテーマ設定
- 課題研究のプロセスを生徒自身が常に臨機応変に変更する
- 他者と積極的に意見交換をする
- 発表の場に参加する
- 発表の場において質疑応答を適切にこなすことができる

大学教員が考える正課教育における主体的だと考えられる行動の例

- 学生が課題に対して、他の学生と進んで議論している
- 研究室に質問をしにくる
- 指示していない課題に取り組んだとき
- 実験計画を提案してきたとき
- 講義中に、板書の内容に疑問が生じて質問をするとき
- 学外での企画に参加

9

本日想定する集団の学力層



12

「主体性評価」へのアプローチ

13

各立場で評価方法も課題も異なる

行動主義的な立場からの評価

- 書類審査
- 面接試験
- ⇒ 評価コストは最低限
- ⇒ 多数の受験者評価も想定

【課題】

- 異なる分野の活動実績の比較
- 本人の関与の真偽

プロセス重視の立場からの評価

- 書類審査
- 面接試験
- パフォーマンステスト
- ⇒ 評価コストは高い
- ⇒ 限られた受験者を想定

【課題】

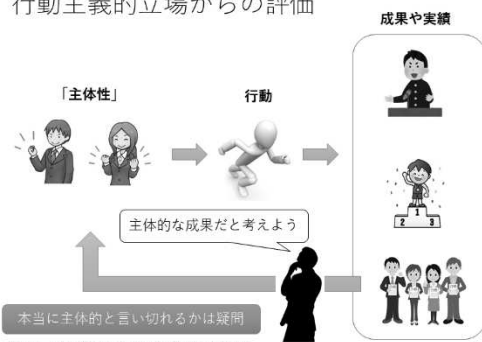
- 評価に掛ける時間
- 適切なループバック作成



どちらか一方が良いとは言えない

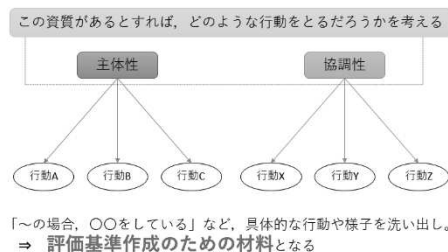
16

行動主義的立場からの評価



14

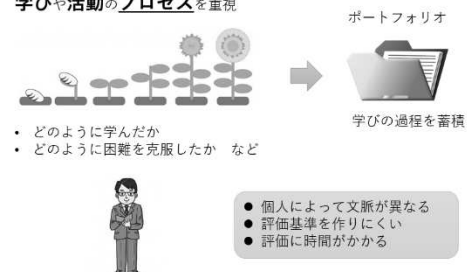
評価を行うための作業



17

プロセス重視の立場からの評価

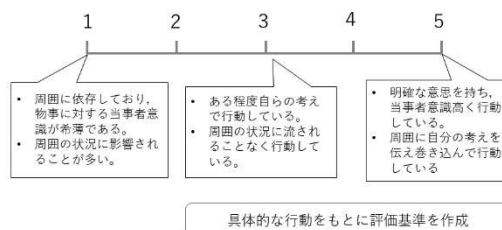
学びや活動のプロセスを重視



15

構造化（ルール）した評価

主体性 「自ら明確な意思を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」



三村英典『人事アセスメント論』（2005）より作成

18

信頼性の高い項目と低い項目の存在

ある大学のAO入試における面接者の評価一致率（ルーブリック使用）

専門的な関心に関する項目 一定の一致率：50%～80%程度

意欲・態度に関する項目 低い一致率：10%以下

木村拓也・吉村幸「大学入試研究ジャーナル」（2010）

そうであれば

ルーブリックの
構造化の強化



（面接試験であれば）
面接者によって個別に工夫される
展開や評価の視点を一定の枠組み
に押し込めてしまう。



質問紙の方が適している
ことになるかもしれない

19

評価方法の検証結果から生じること

- 主体性があると評価した学生が、入学後に本当に主体性があるかを検証することは重要（与評価の妥当性検証）例えば、入学後に「主体的」と評価される学生の多くが、入試の主体性評価の得点が高いなど。
- しかし、他の能力や資質（例：「知識・技能」や「思考力・判断力」「表現力」）と主体性の相関関係が強いということが明らかになった場合



主体性を持つ者は、
主体的にこれらの
能力等を身に付けている

直接評価する意味とは？

22

分析的評価と総合的評価

分析的評価（構造化した評価）

観点① 8点／10点

観点② 4点／10点

観点③ 2.3点／3.0点



各観点の得点の合計点
3.5点

- （欠点として考えられること）
- 各観点の設定の困難さ
 - 全体の印象と一致しない
 - 時間がかかる

総合的評価（自由度の高い評価）

観点① 7点／10点

1つ観点の基準に沿って採点

主体性



- （欠点として考えられること）
- 詳細なルールが共有できない
 - 信頼性に疑問 など

20

入試での評価とは別に考えておくべき点

「主体性」を直接評価しなくても、他の方法で主体性を間接的に評価できる。それも公平性が確保され、効率的だとしたら・・・

主体性

主体性を直接的に評価

例）面接試験や集団討論など



主体性を間接的に評価

例）学力検査と書類審査など

高大接続改革の重要な趣旨（中教審答申より） 高校教育への影響力

接続段階での評価の在り方が変われば、それを梃子の一つとして、
高等学校教育及び大学教育の在り方も大きく転換すると考えられる。

23

どこまで点数化できるか

例えば、活動や実績等を中心に評価するとして

A

多くの人が高く評価する内容 評価は比較的簡単

ややプラス評価（+）

B

評価に差をつけにくい内容 明確な根拠や理由をもって
細かい点数化は困難

ややマイナス評価（-）

C

多くの人が低く評価する内容 評価は比較的簡単

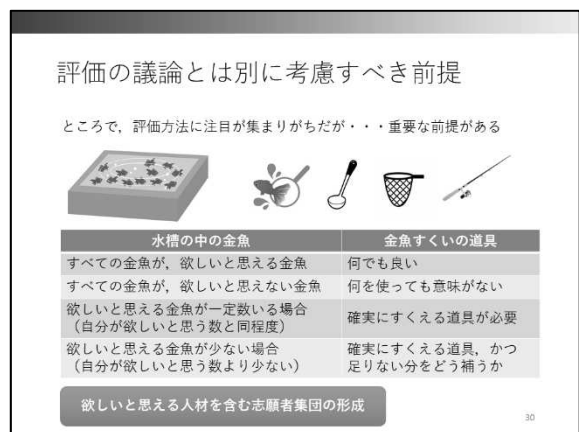
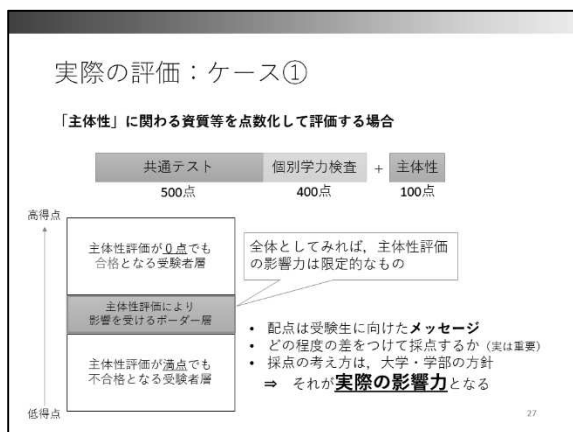
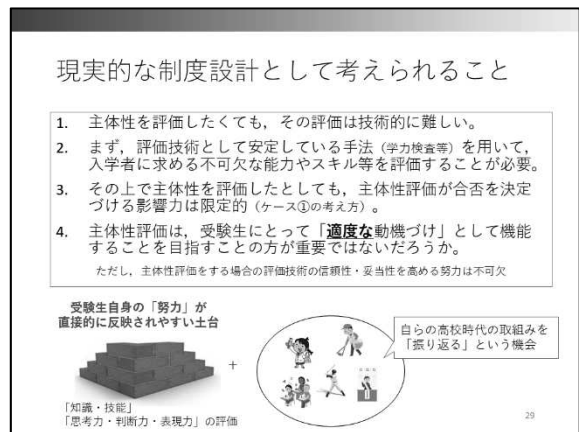
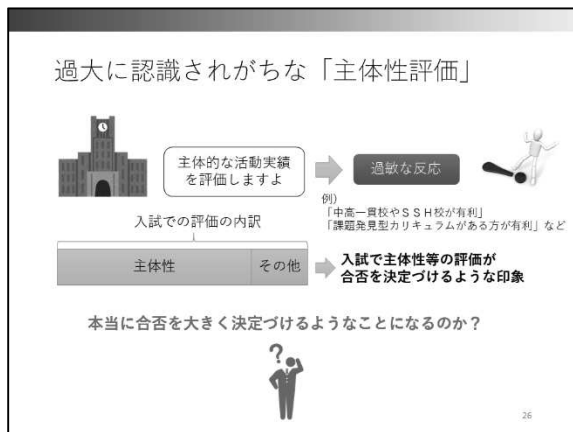
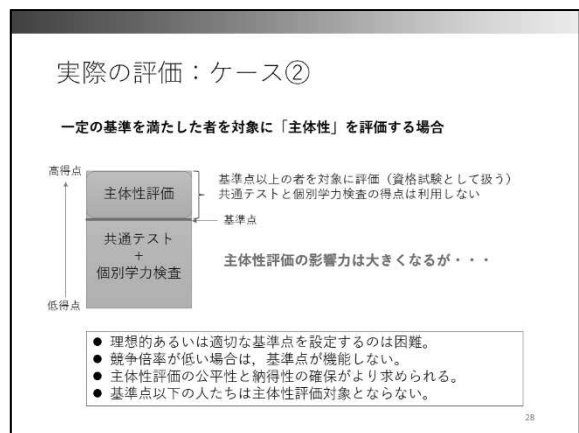
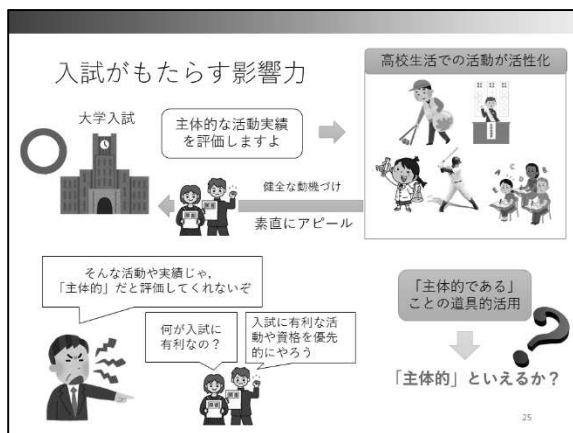
せいぜい4段階か5段階評価が現実的

21

入試制度設計で意識すべきこと

※ 一般入試での評価を想定

24



地方国立S大学の事例

31

参考

申請内容のイメージ（現在実施している学部の様式）

- ◆ 活動・実績等の名称
- ◆ 活動・実績等の主催、認定、授与、発行等の機関等の名称
- ◆ 活動期間または実績取得年月日
- ◆ 活動・実績等を証明する資料及び参考資料等の添付
- ◆ 活動・実績の概要（規模、参加資格、入賞条件、課題研究の成果など）
- ◆ APとの関連性

申請する実績・活動を通して身に付けた能力・スキルや経験などが、大学入学後の学習や活動に、どのように活かせるか など

受験生のアピール部分

芸術地域デザイン学部 特色加点申請書

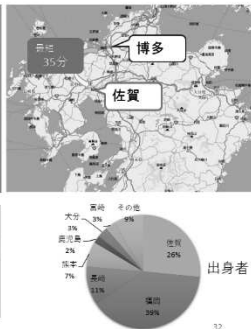
佐賀大学について

教育学部	医学部
芸術地域デザイン学部	理工学部
経済学部	農学部

学部生：6,108名

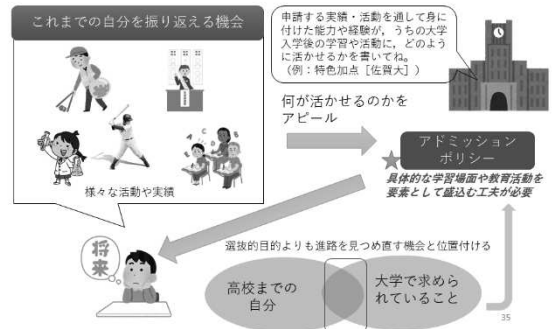
学校教育学専攻科（修士課程）	地域デザイン研究科（修士課程）
医学系研究科（修士課程）	工学系研究科（修士課程）
農学研究科（修士課程）	鹿児島大学大学院連合農学研究科（修士課程）

大学院生：1,025名



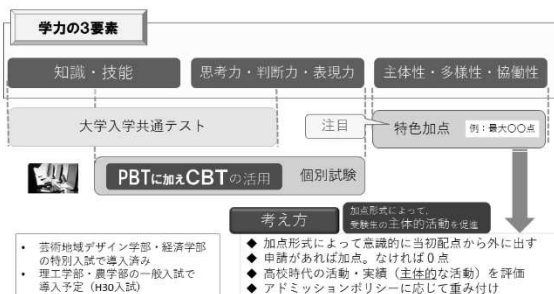
32

自分の進路を見つめ直す機会として



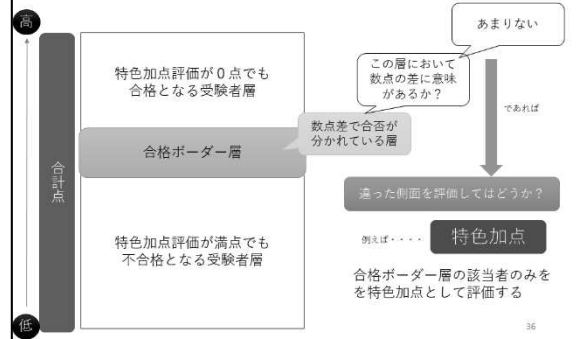
35

「特色加点制度」とは？

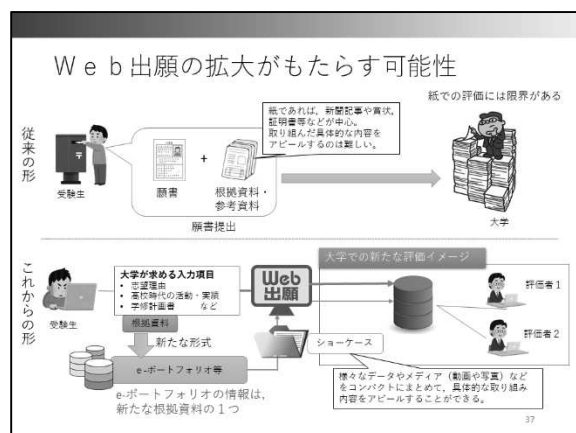


33

一般入試における評価の考え方



36



現状報告者紹介

千葉 栄美（ちば えみ）氏

1966 年徳島県生まれ

〔教員歴〕

青森県立野辺地高等学校横浜分校 教諭（6 年間）

この間 1991 年～1993 年まで青年海外協力隊員としてトンガ王国教育省に現職派遣
青森県立大湊高等学校教諭（7 年間）

青森県立田名部高等学校教諭（11 年間）

青森県立弘前高等学校教諭（3 年間）

青森県立田名部高等学校教諭（現職）（3 年目）（通算 14 年目）

〔主な教育活動〕

田名部高校で 5 年間，弘前高校で 2 年間進路指導部長を務める

現在は教務主任

現状報告者紹介

石井 裕基（いしい ひろき）氏

1962 年香川県生まれ

〔教員歴〕

香川県立坂出工業高等学校講師（1 年間）
香川県立坂出工業高等学校教諭（2 年間）
香川県立高瀬高等学校教諭（4 年間）
香川県立多度津工業高等学校教諭（4 年間）
香川県立丸亀高等学校教諭（11 年間）
香川県立観音寺第一高等学校教諭（現職）（13 年間）

〔主な教育活動〕

進路指導主事（10 年目），SSH 推進部（8 年目）

日本統計学会に所属し，2015 年から 2018 年までの毎年 3 月に「統計教育の方法論ワークショップ」（主催：日本統計学会統計教育分科会，日本統計学会統計教育委員会，情報・システム研究機構統計数理研究所）において，統計を利用した探究活動など統計教育の取組について報告している．

他に，日本テスト学会，日本アクティブ・ラーニング学会に所属している．

2005 年に，東京大学教養学部主催の「高校生のための金曜特別講座」（当時）を全国にネット配信するアイデアを担当の松田良一助教授（当時）に提案し，現在全国の高等学校で多くの高校生が東京大学駒場キャンパスで行われる「高校生と大学生のための金曜特別講座」（2018 年度から改名）を受講している．

〔その他の特記事項〕

日本統計学会統計教育賞受賞（2016 年）
香川県教育功労者表彰（2016 年）

現状報告者紹介

有山 智雄 （ありやま ともお）氏

〔教員歴〕

国立東京学芸大学附属高等学校（4年間）

私立開成中学高等学校（現職）（30年目）

〔主な教育活動〕

担当教科：理科（地学）

地学，地学基礎の教科書（啓林館），サブノート地学基礎（旺文社）などを
執筆

部活動：地質部，ハンドボール部

現状報告者紹介

宮本 友弘（みやもと ともひろ）氏

1966 年茨城県生まれ

〔教員歴〕

メディア教育開発センター研究開発部助手（8 年間）
びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部准教授（5 年間）
聖徳大学大学院教職研究科准教授（8 年間）
東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授（3 年目，現職）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（児童期・青年期の学力，自己概念，進路選択に関する研究）

〔主な著書，研究業績〕

宮本友弘（2018）．小学校 6 年間の学力変化の分析 日本テスト学会誌，14，31-49.
宮本友弘・倉元直樹（2018）．国立大学の個別学力検査における記述式問題の出題状況の分析—80 字以上の記述式問題に焦点を当てて—，大学入試研究ジャーナル，28，113-118.
宮本友弘・相良順子（2018）．女子高校生における内的準拠性による学業的自己概念の形成—I/E モデルに基づく分析— 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要，4，99-105.
宮本友弘・倉元直樹（2017）．国立大学における個別学力試験の解答形式の分類 日本テスト学会誌，13，69-84.
宮本友弘・倉元直樹（2017）．児童期における知能の動揺性及び学力との関連性の検討—ある小学校の縦断データから— 教育情報学研究，16，61-68.

〔学会活動等〕

日本教材学会理事（3 年間）
日本テスト学会理事（1 年目）
一般財団法人応用教育研究所理事（1 年目）

現状報告 1：目に見える「積極性」は主体性なのか？ —地方に生きる高校生の現実—

青森県立田名部高等学校教諭

千葉 栄美 氏

〔講師紹介〕

榎田豪利特任教授(司会)：

引き続き現状報告に移らせていただきます。現状報告の1『目に見える「積極性」は主体性なのか？～地方に生きる高校生の現実～』、青森県立田名部高等学校教諭千葉栄美先生、よろしくお願いいたします。

千葉栄美教諭：

主体性育成の取組

青森県立田名部高校の千葉と申します。よろしくお願いいたします。私の方からは、本校で行われてきた主体性を育む取り組みを簡単に発表させていただきます。これは青森県の地図です。野辺地という駅から1時間かけて下北まで来ます。海沿いの下の写真のようなところをずっと北上すると、ところどころに上にある写真のような無人駅があり、最後に着くのがむつ市です。下北半島の中で唯一の市制を敷いていて、5万9,000人ほどの人口です。そこにあるのが田名部高校、1学年が200人です。普通科4クラス、英語科1クラス、教員は48名、平均年齢は35歳。初任で来るか、もしくは二校目で来る先生たちが圧倒的に多い学校です。

本校の主体性に関わる取り組みを簡単にまとめました。時系列にそってお話をしていきたいと思います。これが、グランドデザインなんです。今から10年前、若い教員や本校出身の教員6名ぐらいで組織されたチームで1年間かけて本校は今後どうあるべきかについて話し合いました。そこで出された1枚の紙です。この当時、下北地区から



20名以上の中学生が、他の地区の進学校に流出していました。それを止めたいと考え進学実績を上げることを明記しました。県内屈指の進学実績、難関大学、医学部医学科への合格、これは、地元の中学校へのアピールであると同時に、我々教員の覚悟を示したものです。その翌年に、キャリア教育について考えるチームが発足し、また1年かけてキャリア教育の全体計画を作りました。大学に入れることがゴールではなくて、10年後の責任ということを私たちは考えました。10年後にその生徒が本当に自立をして、しっかりと社会の中で生きているという状況を作りたい。そのために考えたのが上に書かれてある3つのことです。当時はイベント型のキャリア教育が先行していたのですが、そうではないんだと。キャリア教育は日常の中にあり、学びこそ大事で、それに加えてもう一歩自分の力で踏み出すこと。それを支援したいんだと。そして、失敗こそ許容されるべきで。たくさんの失敗の中から生徒を育てていこうと考えました。本校のキャリア教育の全体計画は、これ以降ずっとこれをベースに行われています。そして、特徴が下にあるのですが、

生徒に求めるだけではなくて、教師に求めました。教師自身がお互いのネットワークを作ろう。それから、生徒たちの失敗を許容しよう。そういうふうに進んできました。

ザ・プロフェッショナルという講座が始まったのもこの頃からで、今年 10 年目になりますが、土曜日の午後、90 分で様々な素敵な社会人を呼んで実施されます。生徒たちにとっての社会人教育にもなりますし、生き方のロールモデルにもなるかと思います。色々な方に来ていただいています。医師、看護師、教員だけではなくて、地元の葬儀屋さん、津軽三味線の奏者、去年はバイオコックスの開発者にも。それから、オリンピック選手にも来てもらっています。県費基準ですので、1 時間数千円という謝礼なんですけど、こんな遠隔地でも思いを持って来てくれませんかと言うと、快諾してきていただけます。この 10 年の中で何度も来ていただいている方もたくさんいます。もちろん、依頼をかけるのは私たちなんですけど、実際の当日の運営は全て生徒が行います。いらっしゃる方の接待も、会場の設営も、司会も。異年齢との交流については、下北半島には大学がないので、なかなか違う年齢の人と関わるということが少ないんですが、上とではなくて、逆に下と、と考えてみました。10 年ぐらい続いていますけど、地元の小学校で、授業を教え、彼ら自身が子どもたちのロールモデルになるという体験をしています。この他にも、例えばボランティア活動で言えば、去年は年間 25 件ぐらいの依頼があって、延べで言うと 450 人ぐらいが地域の様々なボランティアに出ています。

現状と課題

この図は、国公立大学の現役合格者数推移です。本校進学希望者の 9 割以上は国公立大学が志望です。どこの大学に行くにも、自宅

から出なくてはいけないので、やはり金銭的なところで国公立を希望する生徒が多いために、国公立大学に入れるということが、我々の学校の使命となっています。なので、その数字を書いています。定員数が違うので、数字だけでは見えてきませんから、卒業した人数に対する国公立大学の合格者の割合を、赤いラインで、パーセンテージで示しました。グランドデザインが策定され、キャリア教育が始まり、最初は合格数が面白いように伸びました。でも見ていただくと分かると思うんですが、伸び悩みます。この時が多分一番辛かった気がします。まず教員が辛くなっていました。真面目で一生懸命な先生が心身の不調をきたされたり、生徒はやらされているという感じになっていきました。どんなに一生懸命色んなことをやっても、うまく回らなくなっていきました。

課題克服のために

そこで国公立大学合格者数が一番底を突いた時に、私たちが次に考えたのが、アクティブラーニングです。先ほどの映像で分かると思いますが、結局ザ・プロフェッショナルやボランティアをやっても、「先生参加します」と手を挙げる生徒の 8 割は女子です。男子は部活が忙しいとか、何となく個では動かないとか、様々な理由があるんだと思いますが、「やります」と積極的に言えるのは女の子たちだけで。どんどん色んな活動をして、それによってどんどん実践を高めて行っている子と、そうじゃない子の差が圧倒的に出てきました。それから、学習の個別指導なんかもどんどんしていたのですが、結局いつ見ても、同じ質問ブースに座っているのは、同じ生徒と先生ということもすごく多く見られるようになりました。体のいい家庭教師です。先生教えてくださいと言われれば、一生懸命真面目に先生方は教えるんですが、でも同じ生徒に放課後何時間も関わっているこ

とで、他の生徒を犠牲にしているような気がしてきました。このようなことから、キャリア教育を日常の学びの中で、授業の中で行おうと考え、アクティブラーニングにかじを切りました。ちょっと授業の様子です。これは、英語の授業の様子をちょっと撮ってきたんですが、御覧ください。

それから平成 28 年に、本校は創立 100 周年を迎えたのですが、もう一度グランドデザインを見直しました。今度は進学実績ではなく、地域と歩み、世界へ挑むというキャッチフレーズを作りました。一番大事にしたのは、日常の学習です。そして、課題探究活動を本気でやっていくということです。世界や日本、地域の課題にちゃんと目を向ける人を作っていこうというコンセプトで、グランドデザインを作り直しました。これは、本校の課題研究の様子です。3 年生が全員ポスターセッションという形で 1, 2 年生に発表します。3 年前から始まったんですが、今は 1 年生から課題研究をずっと取り組んでいます。総合的な学習の時間の中です。もう一度、このグラフに戻らせてください。この 12 年間で、定員を充足していたのは 3 年しかありません。9 年は定員割れです。そして、今年の春卒業生、81 人国公立大学合格と出ていますが、今年の春の卒業生は 200 名定員ですが、165 人です。圧倒的な定員割れが起きています。さらに、その中の生徒の毎年 1 割は、家庭的な事情から就職です。もちろん、専門学校の生徒もいます。これが、地方の現実です。うちの学校は偏差値 80 オーバーもいますし、それから 30 台の生徒もいます。その標準偏差の中で、先生方が必死に戦っているのが現実です。そういう多様性のある学校って、きっと他の地域の先生とか、都会の先生から見れば大変だろうなって思われるかもしれないのですが、私はこの多様性こそが本校の力だと思っています。高校を卒業して漁師になる生徒が、京都大学を受ける生徒に勉

強を教えている姿。それから定期考査で 1 位を取るのが専門学校に行って美容師になるという生徒だったり。そういう多様性の中で生徒たちは、学んで一緒に笑って、泣いて、育っていくんです。なので、多分うちの学校の生徒は 10 年後、20 年後職場で例えば高卒の人がいても、高卒だからと言ってバカにするような人間は恐らくいないんじゃないかなと思っています。こういう幅のある学校の中で、教員が全ての生徒に対応するのは実質無理です。だからこそ、生徒に主体性を持たせなければ、教育が成り立って行かない。そこで、主体性っていうことでずっと取り組んでいます。

主体性育成の取組から見えてきたこと

田名部高校における主体性の育成について。これは私の考えですが、まとめてみました。必死で 10 年間主体性を追い求めてきました。その中で見えてきたことは、自分のためではなくて、人とか社会のための主体性こそ必要だということ。何となく自分の進学のためとか、大学入学のためにと色んな活動をしている生徒は、やっぱり底が浅い気がします。社会の在り方に課題意識を持って主体的に行動している生徒は全然違います。それから、主体性の涵養には時間がかかるということ。私自身も高校の時は恐らく全く主体的な生徒ではなかったです。ずっとと色んなことに悩んで、うまくいかない自分のがっかりして、失望して。でも頑張ってみようと思ってちょっととんちんかんな行動をしていました。主体性が出てくるまでって、実は大事な時間があるんじゃないかと思います。高校在学中全然主体的じゃないなって思う生徒が、例えば 5 年後学校に訪ねてきてくれた時に何かとっても素敵な活動をしていたりすることがよくあります。大輪の花は遅咲きであることが多いような気がします。高校現場にいますと、そういう場面にたくさん遭遇します。

そして、主体的であることを求め続けられる生徒たちの苦悩。一見主体的なことを、どんどんやってくれる生徒がいます。私たちが望むような主体性を発揮し、こういうことであれば、あの生徒に頼めば大丈夫みたいな。そういう子が必ずどの学校にもいるんじゃないかなと思います。そして、実は先生方みんな分かると思うんですが、そういう子こそ苦しんでいます。期待される中で、自分のありようみたいなものを敏感に感じ取って、でもものすごく悩んでいたりと、傷付いていたりすることも多いです。常に主体的であれ、主体的であれという圧力が、彼ら、彼女たちをすごく苦しめているなと思う時もあります。それから学校生活での積極性は、主体性とイコールではないのではないかと。主体性って自分で選ぶもので、他からどう見られているかということに気にすることなく自分で考えるものだと思うのですが、学校ではそうではなくて、求められている事を何となく察知をして、行動をしている生徒がいて、そうした生徒を高く評価する傾向があります。積極性をイコール主体性と捉えて、混同しているところがあるような気がします。たくさん積極的な行動をしているのに、何ひとつ自信に結びついていない生徒がいることも現実のような気がします。

そして中学校教育の変化と高校への影響ですが、観点別評価も、それから知識だけではない学力の測定方法、入試方法も、中学校の方でまず入っています。中学校では観点別評価もしっかりやっていますし、それから高校入試も。例えば青森県であれば、特色化入試で、各学校によって比率は違いますが、特別活動や部活動をちゃんと点数化すること、これを明言化して入試を行っています。中学生はそういうことにとても敏感です。ここ数年、何となく気付いたんですが、高校の中で部活の部長を決めたり、委員長を決めたりすることに、実は全然困らなくなりました。

誰かやりたい人って言ったら、ずっと手が挙がります。彼らは、それをするのが自分の得になるということを知っているからです。でも、そういう生徒が、リーダー性があるかというと、そうではなかったりします。結局教員が一生懸命色んなテコ入れをして、傀儡政権みたいな感じになって苦労するっていうことが、本校の場合では割と多くなってきた気がします。それから、授業や行事の後の感想文がすごく面白くななくなりました。みんな、評価としてそれが点数化されるのを分かっているんで、分かったことを書き、何か感動したことを書き、自分はこれからこうして行きますみたいなパターンが決まっています。全然面白くない講演だったとか、私は、ここはこう思うんだけどみたいなことを、あまり書いてこなくなりました。それがここ数年の変化です。でも、そういう生徒たちをずるいとか、さかしい生徒だとは私は思いません。愛すべき不器用な子たちです。本当にずるいというか、本当に賢い子は、そんなことに翻弄されずに、自分でちゃんと優先順位を付けて、自分の学びをしています。間違ったメッセージが伝わってしまったがゆえに、子どもたちがそれに翻弄されている現実があります。その状態を何とか高校3年間でいや、違うんだよ。主体性ってこういうことなんだよって必死でどこの学校も教えているんじゃないでしょうか。最後になりますが、主体性の評価について、制度のことはこれから色々ところで議論されると思うのですが、制度に頼る前に、高校教育で我々が考えなければいけないことが、私はあるような気がしています。2年前に、企業を辞めて地域起こし協力隊で、岡山の高校に行き手伝いをしている女性、江森さんという方と話をしたことがあります。その方が言った言葉がものすごく私の中で印象に残っているのですが、アクティブラーニングをやろうって声をかけていながら、先生たちは本当

に生徒たちのアクティブを認めているんですか。都合のいい主体性だけを認めて、何か言ってきたら生意気だって切り捨てて、そのくせアクティブにだって言っていないかと。それは、本当にそうだと思います。学校の中には主体性のダブルスタンダードが存在します。そして、地方の場合は、我々こそ生徒たちの前のロールモデルです。他で大人を見ることがあまり多くはないので、でもその私たちが、本当に主体的で生き生きと生徒たちにもものを語っているのか。そこをまず、考えなければいけないような気がします。

それから部活動、ボランティア。教育課程外に活動機会を設けて、それが点数化をされてしまうと、やはり不利な学校が出てくるのも事実です。例えば同じ市内にある小規模の高校は部活が4つです。そのうち野球部は今年一人だと聞きました。また、ボランティアも本校のような学校だと、一括して募集を受け付けて、そして一括して生徒を出していきます。でも、そういうシステムを持っていない学校には、例えば地域の人たちもボランティアを頼みません。なので、ボランティアの機会についても地域の中でも格差が生まれている気がします。

そして最後ですが、主体性が大事なことは、みんな知っています。私たちもそれを必死に追い求めてきました。評価されなくても大事だということを知っているし、逆に評価されることになってしまうと、それが大切だよ、大事だによって生徒に言いにくくなるような気が、私の中ではしています。

この図を見てください。田名部高校の家庭学習時間です。11月のテスト直前ではない平日を調査した1学年の平均です。一週間とって、1日当たりの平均家庭学習時間を示しています。学年によるふけさめはありますが、低下しています。加えて圧倒的な二極化が進んでいます。これは、2月に内閣府が出した調査なんです。高校生のインターネット利

用時間、5時間以上が26%です。多分、勉強しながら利用というのもあると思うので、そのままとは言い切れないかもしれませんが、この現状が、多分本校にも当てはまっていると思います。学びからの逃走が起きています。今彼らは恐らく主体的にゲームをしているのだと思いますが、本当に大事なことをやるべきことにちゃんと時間を費やすということをしていかなければいけないのではないのでしょうか。例えばそれが500点満点中の数点であっても、主体性が評価され、何か活動したことが点数になるよって言ってしまっ、それを私たちが間違った形のメッセージを出してしまえば、生徒たちの学びが更に失われていくのではないかと。それが、私の中での心配です。地方の高校はどこでも同じような活動をしていますし、同じように一生懸命頑張っているような気がします。その状況をお伝えできればと思って登壇をしました。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

檜田豪利特任教授(司会)：

千葉先生、ありがとうございました。ご質問につきましては、皆様のお手元にあります質問票をご利用いただければと思います。ここで、短い休憩をはさませていただきます。手前の右手の方にある時計で14時25分に現状報告の2を始めますので、それまでの時間、しばらくご休憩していただければと思います。

資料

第28回 東北大学高等教育フォーラム
「主体性」とはなんだろうか 大学入試における評価とその限界への挑戦

目に見える「積極性」は主体性なのか？ ～地方に生きる高校生の現実～

青森県立田名部高等学校 千葉 栄美

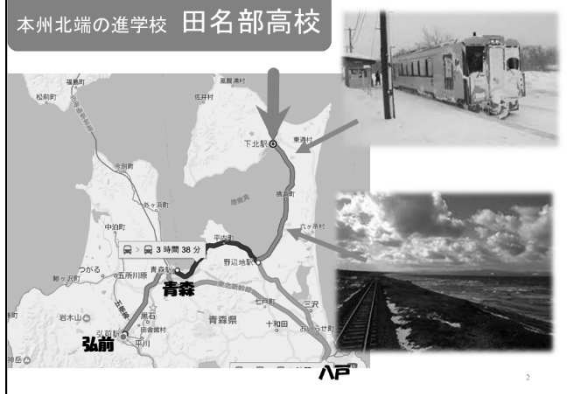
1

田名部高校の取組

2007^(H19) 課題研究実施 総合的な学習の時間
2008^(H20) グランドデザイン策定
2009
2010^(H22) キャリア教育の全体計画策定
2011^(H23) →中央教育審議会答申
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
2012^(H24) アクティブ・ラーニングへの取組開始
2013
2014^(H26) →初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）
アクティブ・ラーニング明記
2015
2016^(H28) 新グランドデザイン策定
2017

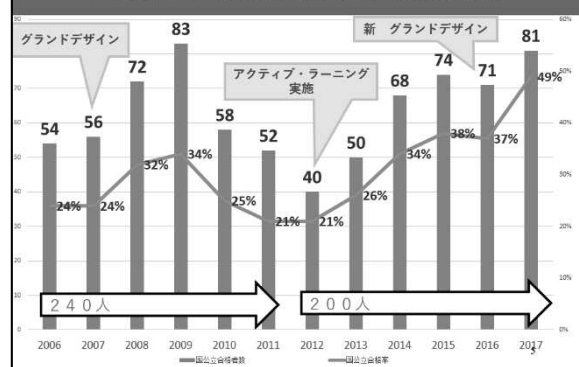
4

本州北端の進学校 田名部高校



2

国公立大現役合格者数推移



青森県立田名部高校

生徒数 1学年 200人
普通科 4クラス
英語科 1クラス
教職員 48名
平均年齢 35歳弱
(教員の65%が20代30代)
特色 ・創立102年
・下北地域唯一の進学校
・青森県大学進学のための
重点校(6校中の1校)



3

田名部高校における主体性の育成

勉強でもキャリア教育でも「主体性」の育成を
求め続けてきた10年間



その中で見てきたこと

- ・自分のためではなく、他人や社会のための「主体性」こそ必要だということ。
- ・「主体性」の涵養には時間がかかるということ。
- ・主体的であることを求め続けられる生徒たちの苦悩
- ・学校生活での「積極性」≠「主体性」であること。
- ・中学校教育の変化と高校への影響

6

主体性の評価についての疑問

- 制度の変更に頼る前に、高校教育が見直すべきことがあるのではないか
 - 学校の中のダブルスタンダード
教師自身が「主体的」なのか
- 部活動、ボランティアなど教育課程外の活動機会の不平等（少子化が進む地方の小規模校の現実）
- 目に見える成果のみが点数化されることへの不安

7

自主性、能動性、技能性は他から強制されたり、そそのかされたりしただけで、本当にはたらくものではない。知的好奇心や疑問、問題意識、あるいはあこがれや願望などに支えられて、ああしてみよう、こうしてみようと、自主的に起こる内心の欲求、意欲と、それにもとづく積極的行動と、さらにその行動を可能にするために必要な技能を自分で訓練する。その結果、成功し満足することで主体性は育っていく。

主体性を育てるには、なんといっても、筋道を立てて地道に実践を重ねていく以外にはない。掛け声や観念だけではどうにもならないと思う。

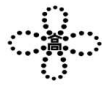
中沢政雄 『主体性を育てる教育技術』 昭和50年2月1日発行 国語情報 第6巻2号より抜粋

知識や技能は客観的に評価することができても、人間性とか創造性とか意欲といったものは客観的に評価することは困難です。たとえば、客観的に評価することができるとしても、その評価の基準が明示された途端に、その評価基準によって高く評価されることを目指す子どもたちが現れることによって、子どもたちの人間性や創造性や内からの意欲というものを破壊するような恐ろしい結果をよびおこす危険さがあります。

板倉聖宣 『教育評価論』 板説社、2003 （2017 荒井克広先生講演資料より）

8

創立100周年に向けて 本州北端からの新たなチャレンジ



校 訓 「自律」「協和」「純正」

平成21年度～

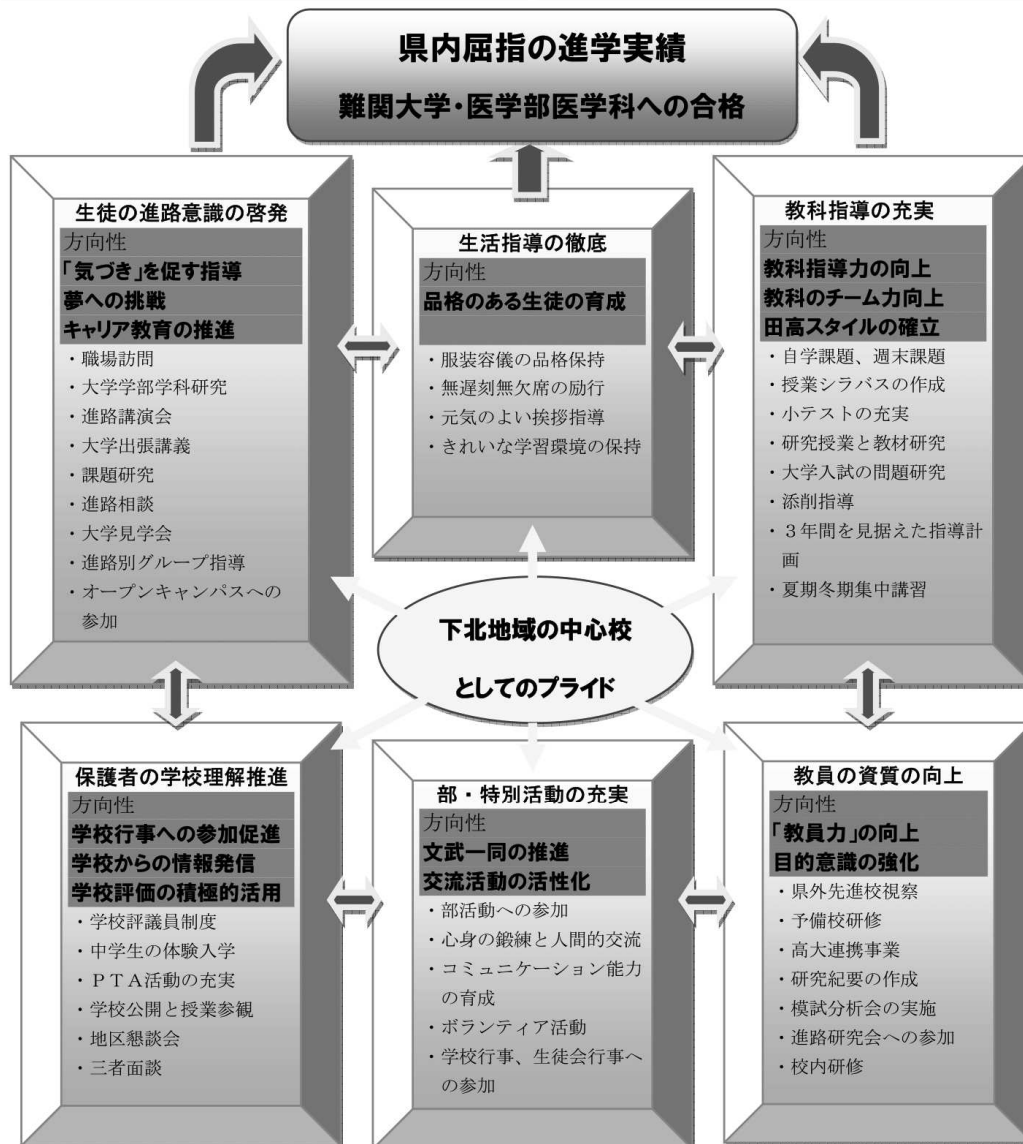
教育目標 「全人的な人間教育の実現」

めざす学校像

- 1 地域に貢献できる人材を育成する学校
- 2 進学校として生徒の進路志望を達成できる学校
- 3 地域すべての人が誇りに思える学校
- 4 生徒の特質を活かし、一人一人を大事にする学校

めざす生徒像

- 1 素直な考えと寛容な心を持つ生徒
- 2 自ら学ぶ意味を見つけ、自己を向上させる生徒
- 3 ラウエの伝統を継承し、地域の期待に応える生徒
- 4 リーダーとして社会で活躍できる生徒



田名部高校グランドデザイン ラウエの継承と明日への挑戦



校 訓 「自律」「協和」「純正」

平成28年度～

教育目標 「全人的な人間教育の実現」

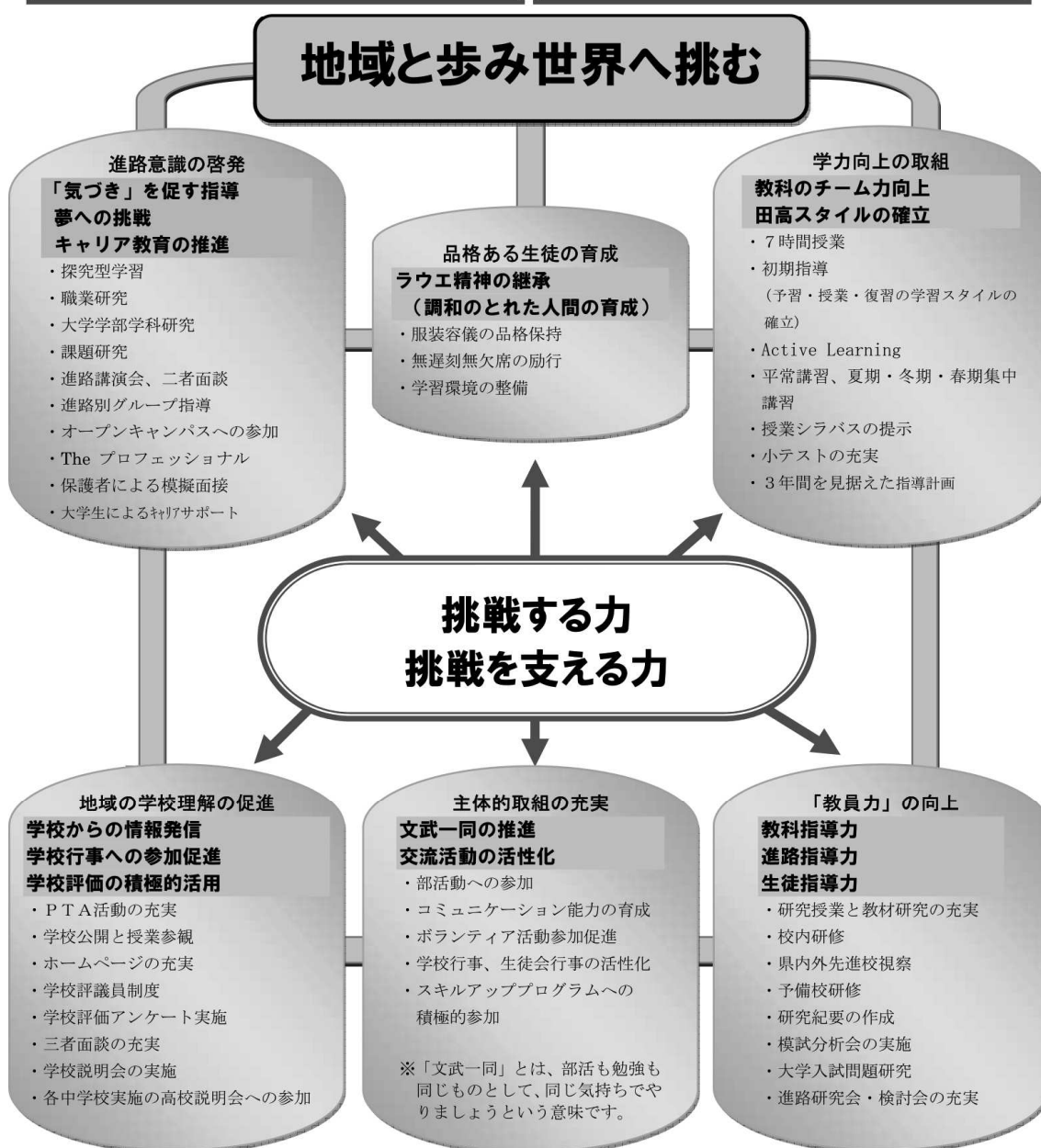
めざす学校像

- 1 地域に貢献できる人材を育成する学校
- 2 生徒の進路志望を達成できる学校
- 3 地域すべての人が誇りに思える学校
- 4 生徒の特質を活かし、一人一人を大事にする学校

めざす生徒像

- 1 素直な考えと寛容な心を持つ生徒
- 2 自ら学ぶ意味を見つけ、自己を向上させる生徒
- 3 本校の伝統を継承し、地域の期待に応える生徒
- 4 リーダーとして社会で活躍できる生徒

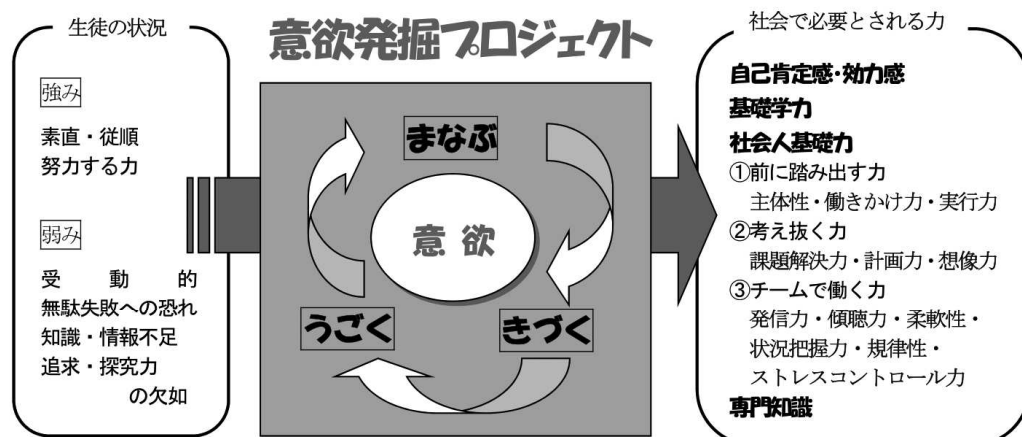
地域と歩み世界へ挑む



キャリア教育全体計画

創立100周年に向けて 本州北端からの新たなチャレンジ

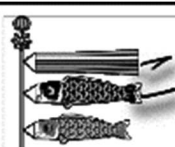
- ◎ 田名部高校のキャリア教育は日常の中にこそあります。
- ◎ 学びを大切にし、そこから一歩前に自らの力で踏み出すように支援します。
- ◎ 生徒が失敗を恐れず、のびのびと活動し、失敗から学ぶ姿勢を大事にします。



教科	総合的な学習の時間	道徳	特別活動	教育課程外活動
学ぶ力 主体的に学習 積極的な発言・質問 学び合い・教え合い	興味を持つ力・ つなぐ力 課題研究 職業観の育成 進路研究	人と関わる力 挨拶 感謝 協調性 責任感	計画する力・ 実行する力 係・委員会活動 学校行事 清掃活動	社会と関わる力 スキルアッププログラム ボランティア・講演会 The プロフェッショナル 職業講話 部活動

教員に求められること

- | | |
|--|--|
| 社会人として魅力的な大人である
教員同士のネットワークで生徒を支える
教科指導力の向上・充実を図る
進路指導力の向上・充実を図る
生徒の相互作用を信じる
学校生活での諸体験を生徒自らが自身の進路志望につなげられる働きかけを行う | 社会の変化に敏感である
生徒自ら動き出すよう働きかけ、待つよう心がける
質問できる環境作りをする
選択肢の提示をする
失敗後の支援をする |
|--|--|



こちら海老川町進路指導部 『こちエビ!』

2016年5月25日

第2号

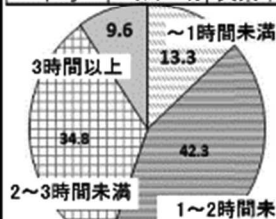
発行

青森県立田名部高等学校
進路指導部

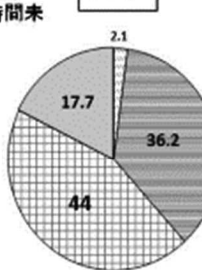
あなたの一日の学習時間どれくらいですか・・・?

平成28年度第1回学習状況調査の結果より

1年	2年	3年
平均 1時間55分	理系平均 2時間24分 文系平均 2時間7分	理系平均 3時間9分 文系平均 2時間46分



2年



3年

学年が上がるにつれ、一日の平均学習時間1時間未満の人の割合が減り、3時間以上学習する人の割合が増えています!

- ~1時間未満
- 1時間~2時間未満
- 2時間~3時間未満
- 3時間以上 (%)

あなたの勉強時間は・・・?
()時間

まあ今はこれくらいで大丈夫...
部活で忙しいし...

もっと勉強しなきゃいけない!
でもどうやって...?

家庭学習時間の目安としてよく言われるのが、「学年+1時間」です。
つまり、1年生は1日平均2時間。2年生は3時間、3年生は4時間です。
自分の学習時間と見比べて、どれくらい足りないか確認しよう。

全体的にもう少し家庭学習に時間をとって欲しいです。高総体へ向けて部活も忙しいと思いますが、勉強との両立が必要です!

◆毎日家に帰るころには部活で疲れて死にそうぐらいでしたが、最低限各教科の課題や小テストの勉強はしました。どれだけ疲れていても一日2時間は一生懸命勉強していました。
◆毎日の家庭学習で気を付けていたことは目標を持つことです。今日やるべきことを紙に書いて可視化することで、やる気を持続できました。
H27年度 合格体験記
「無限の夢をつかみとれ」より抜粋

こうして部活で忙しい先輩たちも家庭学習時間を確保していました!

そうだ!図書館へ行こう!

田高図書館は、この春から午後7時まで開館しています!
本を借りるだけでなく自習する場所としても利用できるの、どんどん利用しましょう!



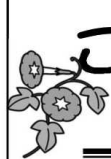
そうだ!進路資料室へ行こう!

職員室の隣にある「進路資料室」を知っていますか?ここには国内大学の資料、赤本が揃っています。
昼休み、放課後ともに開放していますので、自由に入って進路の情報収集に役立ててください!



進路指導部長 千葉 栄美

結果ではなくて
進路指導部で三年生の進路面談をしてい
る。一人十分。縄文時代の研究がしたい。
地域経済を何とかしたい。自分が出会って
来た先生のようにしたい。...夢を語
る生徒達。自分が何をやりたいのか、どこ
に行くのか必死で探している生徒もいる。
皆必死で自分の未来と向き合っている。い
いなぁと思う。だから学習時間はこれか
らもっと増えるはずだとも思う。▼批
判を恐れずに言えば、私は結果ではなく
努力する過程こそが大事なのだと思ってい
る。2045年問題、シンギ ユラリテイ
人口知能が人間を超えると思定されてい
るを知っているだろうか。もうしばらく
すると、人間が必死で何日も何年もかけて
探した答えをコンピュータは一瞬で出すよ
うになる。と云われている。では、人間
が人間である意味は何か。それは多分、結
果ではなく精一杯努力をしたその過程では
ないだろうか。何かを目指し必死に努力す
る中で私たちが豊かになり、優しくなるの
ではないだろうか。▼進路資料室の中で一番辛
そうにしている生徒は、成績が悪い生徒で
はない。努力できずにいる生徒だ。彼
らは自分自身に失望し、深く傷ついている
成績がなかなか上がらなくても、志望校に
落ちても、精一杯努力している生徒は不
思議な力を持っているものだ。そして、
そんな生徒たちはしっかりと自分の未来を
つかんでいる。▼本校の学習時間の少な
さはそのまま我々教師にも突きつけられて
いる。成績が上がる、学習時間が少ない
。でもそれは生徒だけの責任だろうか。
我々は生徒に響く言葉で努力の大切さを
語ってこれただろうか。学ぶことの意義と
責任を伝えられているだろうか。学問の楽
しさを語れているのだろうか。田名部高校
全体の課題として、自学習時間の増加に
本気で取り組みたいと思う。



こちら海老川町進路指導部

『こち海老』



2016 年 7 月 25 日
第 4 号

発行
青森県立田名部高等学校
進路指導部

今回のこち海老では、現在分かっている参加可能なスキルアッププログラムの日程を掲載します。一年間でこれほど参加のチャンスがあります。部活や講習を言い訳にして一度も参加せず、後悔することの無いように。部活や講習の予定を考えながら、学校だけではなく学びの世界を広げてください。

The プロフェッショナル @ 田名部高校

※ 7 月現在確定分

8/28(日)	南部町はらだクリニック院長 原田英也氏 苦学の末医師になった内視鏡検査の専門医	10/1(土)	ブナコ株式会社 代表取締役 倉田昌直氏 地場産業の世界への挑戦
9/3(土)	現役看護師 看護の仕事紹介、簡単な看護技術体験	11/5(土)	日本赤十字青森支部 古川靖之氏 大地震、災害など国際支援の現状
12/10(土)	青森西高校 吉田理子先生 ボート競技で 2 度オリンピック出場	↑ 参加する講座にチェックをつけていきましょう。	

地域連携に関する講演、ワークショップ @ むつ市立図書館

「くらしと地域～地域を考える視点を養う～」をテーマに講座が開催されます。

7/23(土)	日本の人口構造とむつ市／産業構造の変化と中小企業
8/27(土)	GDP の見方、むつ市の GDP／産業成長と景気変動
9/24(土)	家計消費と支出／むつ市の雇用と失業、労働力人口
10/8(土)	金融の仕組み／財政の仕組み
11/26(土)	グローバル社会と地域
12/10(土)	テーマに沿ったグループ発表等

その他

7/23(土)	海を味わおう in 青森（講演会） @大湊安渡館
7/30(土)	むつ市の未来を考える @下北文化会館
8/10-11	スタディーツアー（慶應義塾大学先端生命科学研究・三陸被災地巡検）
9/3(土)	第二田名部小学校ボランティア学習会（ボランティア）
9/10(土)	スキル・マインドアップ研修会（講演会）
9/17(土)	外科手術体験セミナー、薬学セミナー @田名部高校
11/12(土)	青森中央学院大学「世代の架け橋公開講座」@田名部高校
11/26(土)	ドクタートーク（現役医師の講演） @田名部高校
12/10(土)	青森中央学院大学「世代の架け橋公開講座」

※この他、各クラスや廊下の掲示板に掲載された講演会等も、レポートを提出すると、スキルアップの単位に認定されるものが多くあります。疑問がある場合は進路指導部に質問に来てください。

このマークのついている講座、講演会はスキルアップ単位認定の対象となる場合があります。



チラシや掲示物にこのマークがあるかどうかを目印にしましょう。



語らない君たちへ

皆さんは立場や意見の違う人に対して、あるいは公の場できちんと自分の思いを語っているだろうか。例えば文化祭のクラス展示。いいアイデアを持ちながら口をつぐんでいる人がいる。誤解なのに教師に怒られ、きちんと説明すればいいのに、何も言わない人がいる。おそらく、若いみなさんたちの中にはたくさん言葉があるのだと思う。感受性が優れ、言葉を大切に扱う人は、逆に言葉が出てこないこともよくある。他の人の視線も気になるだろう。でもそれを乗り越えてしっかりと語らなければいけない。それが大人になるということだ。▼コミュニケーションの必要性が叫ばれてから久しい。現代はほとんどの仕事チームで行われる。自分の思いをきちんと口に出せなければ、他の人から敬意を払われることもないし、いい仕事もできない。だから、「語らない君たち」は「語らださなくていけない」のだと思う。話が合う人との間だけで会話をするのはなく、立場や考え方の違う人にもしっかりと自分の言葉で自分の思いを伝える訓練をしなくてはならないのだと思う。社会に出て、必要に迫られてから急に語りだせるなんてことは絶対に起きない。▼きちんと自分の思いを自分の言葉で語るためにはまずは「よいモデル」が必要でそして「承認」が必要だ。本校で 8 年前から実施しているサ・プロフェッショナルにはいつも一流の人たちが来てくれる。1 時間半、彼らは仕事の喜びを、苦労を、そして自分の人生を雄弁に語ってくれる。講演後の生徒の質問にも丁寧に答えてくれる。内容もそうだが、「人に伝える」ということはこういうことなのかといつも感心させられる。参加してみませんか？良いモデルを語りだしませんか。大人になるために。強くなるために。自由になるために。

進路指導部長 千葉 栄美

こちら海老川町進路指導部 『こち海老』

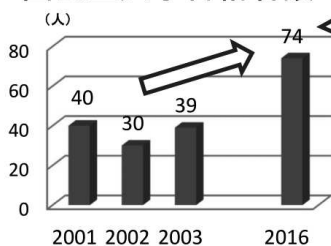
2016年10月12日
第5号
発行
青森県立田名部高等学校
進路指導部

田名部高校創立百周年記念!

～15年前と現在～

今の田高に通っている皆さんが生まれた頃の田名部高校進路データを紹介していきます。

国公立大学合格者数

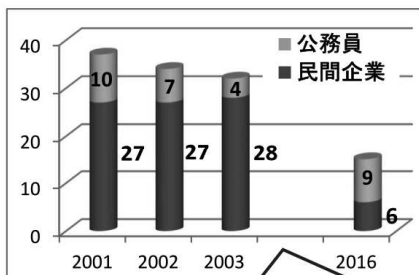


15年前と比べて昨年の国公立大学合格者は約2倍!

このグラフにある2001～2003年は普通科5クラス、英語科1クラス、衛生看護科と現在より2クラス多い7クラス編成でした。

そして、この2000年代に入って導入する大学が増えてきたのが推薦・AO入試。近年では多くの大学が様々な方法でAO入試を行っていることは皆さんも知っているはずです。

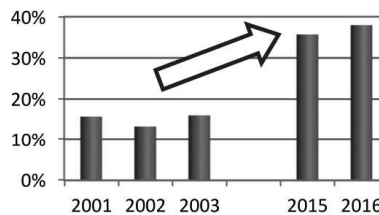
昨年は74名中20名の先輩がこの推薦・AO入試で合格をしています。



こちらは、就職者数の推移のグラフです。

就職者数全体の数は半分に減っていますが、公務員の占める割合がとて高くなっています。2003年は就職者全体の数が32人に対して公務員は4人と、公務員として就職したのは12%ほどしかいませんでした。しかし、去年の卒業生は15人中9名が公務員試験に合格し就職しています。

国公立大学進学率



国公立大学進学率も高くなっています!



【9月 面談月間終了】

進路指導部では9月を「面談月間」とし、HR・教科・部活での面談を呼び掛けてきました。一年生は文理選択、二年生は進路志望、三年生は最終志望校決定と学年ごとに重要な決断をしなければならない時期です。今回、先生とじっくり話をして新たな目標が見えてきたのではないのでしょうか。100周年を迎えた田高で新たな歴史を作り上げていくのは皆さんです。自分の目指す進路に向かって今日から努力を積み重ねていくことが進路達成につながります。

101年目への挑戦

百年の時に思いを馳せる。ロシア革命が起こった1917年(大正6年)本校開校。昭和の激動の中、下北の地で、脈々と続いた教育活動。平成になり、英語科が誕生。ポト部の悲しい事故。失われた導命。地域の多くの医療人を輩出してきた衛生看護科の開科。部活動での活躍。進学実績の向上。その時々には必死に歩んでいた生徒、そして教職員がいた。▼私は90周年の年も本校に在職していた。当時も良い学校だった。素直で明るい生徒達が一生懸命学んでいた。しかし、地域の人間には「医学科や東大には入れない学校」だと思われていた。その当時、優秀な中学生の一部は本校ではなく、下宿をして青森や八戸の高校に進学していた。成績層の幅が広く、下位層の指導に終始し、上位層をしっかりとばし切れていなかったのは悔しいが、事実であった。▼その頃から「挑戦」が始まった。創立百周年にむけて本州北端から新たなチャレンジというブランドデザインを掲げ、「難関大学、医学部、医学科への合格」を目標に明記し、下位層にも手厚く指導しながら上位層もしっかり伸ばす。という覚悟を決めて私たちの教育活動が始まった。個別添削、入試問題研究、作題力向上のための研修会、若い教員集団が時間を削って、必死に生徒と向き合い、それに生徒も応えてくれた。医学科現役合格まではブランドデザインを掲げてから3年かかった。けれどもそれからはほぼ毎年コンスタントに医学科、難関大学への合格を出している。だから今がある。▼勉強だけではなく、キャリア教育、ボランティア活動、講演会、全人格的な成長のためにありとあらゆる事をやった。就職指導もしつかり行い、公務員の合格率は現在県内1、2を争う。▼そして百周年を迎えた。私たちの「挑戦」は続く。今までは教員が必死で生徒を引っ張ってくる指導だった。でもこれからはそれを変えていく。「自ら学ぶ生徒」を作り、育てていくのだ。田名部百年の歴史をつくらせて来た生徒、歴代の教職員、そして地域の人々の想いに恥じない学校であり続けたいと思う。

進路指導部長 千葉 栄美

現状報告 2：四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える

香川県立観音寺第一高等学校教諭

石井 裕基 氏

【講師紹介】

樫田豪利特任教授(司会)：

それでは、これより現状報告を再開させていただきます。現状報告の2『四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える』、香川県立観音寺第一高等学校教諭石井裕基先生、よろしくお願いいたします。

石井裕基教諭：

こんにちは。今日はよろしくお願いいたします。スライドの方が『四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える』ということで、ご報告させていただきます。それでは改めまして、よろしくお願いいたします。今日の話題ですけれども、この三本立てでご報告できたらと思っています。

香川県立観音寺第一高等学校について

本校の概要ですけれども、香川県の西、ヤドン県というふうに改名しましたけれども、ポケモンのヤドンを利用して、うどんからヤドンに代わりましたが、香川県の西の方にあります。外から見るとこのような学校です。近くの海辺に銭形砂絵という江戸時代にできた縦横 100m 前後のモニュメントがあります。400 年近く経っています。この銭形を見れば、健康で長生き、しかもお金に不自由しないというふうに言われていますので、ぜひ皆さん一度直接見に来てください。それから、お土産としては観音寺饅頭というのがとてもおいしいです。そしてこの島というのが、伊吹島というのがあります。人口は約 6 万人。近くにある人口約 6 万人の三豊市がありますけれども、本校の生徒はこの二つの市、これを合わせた約 12 万人前後の市民が母体となっています。本校の歴史です。この辺りは、お手元の資料に載せていますのでそちらをご覧ください。



さい。クラスは 1 学年 7 クラス。普通科と理数科がありますが、理数科は 2 年次から 1 クラスできます。1 年生の時は特色コースというのがありまして、2 年次からの理数科の母体となるコースです。国公立大学等々、合格状況は 3 ヶ年平均が 100 名少しということになります。部活動は結構盛んで、これは先々週 13 日、ミライモンスターというフジテレビ系の番組で本校の陸上部の選手が 2020 年のオリンピック候補ということで放送されました。まだ YouTube で流れていますのでご覧ください。

SSH・探究活動の取組について

本校は、SSH の指定を受けています。今年度はⅡ期目の 2 年目になります。概念図はこうなっています。高い志と科学的な問題解決、意思決定力ということで行っています。中心になっているのは探究活動です。今年からⅡ期目を始めるに当たって、2 年生全クラスで探究活動をやろうということで、普通科文系は総合的な学習の時間、普通科理系は課題探究という学校設定科目で行っています。理数科はⅠ期目から科学探求という学校設定科目で行っています。海外研修を 12 月に行っていて、これはアメリカのデュアルテ高校というところと交流行事であるポスターセッションをしている様子です。

それから校内での発表会もあります。私の担当は数学ですけども、数学の方ではデータ解析ということを中心に行っています。スポーツデータ解析コンペティションというのがありまして、そこに毎年ポスターを出しています。今年、三連覇ということで新聞に取り上げられました。ぜひ数学の先生、ここにいらっしゃいましたら参加されたら非常に面白いと思います。また、データ分析ということで、和歌山県が昨年度からデータ活用コンペティションというのを始めました。その第1回に本校の1年生が、特に授業とは関係なく取り組んで参加しました。その様子ですけども、これは一次予選がありまして、そこから選ばれた10チーム、高校部門は5チームが参加しました。こんな様子なんですけれども、音声は流れませんがこんな感じで発表をしています。全てのチームに賞を頂け、本校の生徒たちは楽天賞を受賞し副賞に楽天ポイント5万円分を貰いました。

生徒の「主体的」な活動を考える～仮説～

続きまして今回の報告が生徒の主体的な活動を考えるということで、「四国の進学校で生徒の主体的な活動を考える」というテーマを考えました。このスライドが私の、頭の中の状態でした。一週間前、頭の中は真っ白でした。考えれば考えるほど、分からなくなりました。そもそも、考えるためには知識がないと駄目なので、知識をいっぱい仕入れたんですけども、知識を入れれば入れるほど分からなくなるということで、頭の中は真っ白でどうしようということで。こんな仮説を立ててみました。大学入試改革が行われて、大学入学が学力の三要素と、各大学のアドミッションポリシーに合っているかを測る入試として行われようとしています。その中でも、特に主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度が測られようとしています。しかし、高校教員にとって主体性とは何かと問われた時に、多様な捉え方が予想され、それを評価し入試の書類に添付することは、非常に困難が予想され

る。また捉え方が多様であり、その文章表現や点数化も様々な基準が生じ、それらを一律に同等に評価できないのではないかという仮説を唱えました。

検証～教員アンケート～

それを検証するために、アンケートを急遽ここに日付が出ていますけれども、11日から16日の数日間で、本校の先生方全員と知人のいる近隣の高校の先生方をお願いし行いました。回答数が33です。お手元にアンケートがございますのでご覧いただくと分かりますが、1番は日ごろの生徒の活動の中で、生徒が主体性を伸張させていると思われる活動や、生徒の主体的な取り組みであると感じられる活動について、具体的に記入してください、とたずねました。この項目を考えながら、私もこんなん聞かれたら、書けないよなと思いながらアンケートを取ったのですが、先生方本当にすごいなと思いながら、本当に色々なここに書かれているようなものが出てきました。添削をお願いするであるとか、質問をするとか、授業中のアクティブラーニング。生徒同士で話をしたり、意見を交わしたりと。そういう活動が主体的な活動ではないか。また、課題研究等々の探究活動。そういうものが、教科に関わる主体的な活動ではないかと、たくさん回答していただきました。回答数は57あります。それから教科外で、校内でどんな主体的な活動が想定されるかということで答えていただいたのか前のスライドです。部活動に関すること、部活動を自主的に生徒たちで活動していく様子、それが主体的な活動ではないかということです。それから、学校行事への取り組み、生徒会活動、それとホームルーム活動、SSHの活動、そしてまた進学に関することとして、色んな説明会であるとか、体験活動に参加する。これが主体的な活動ではないかというふうに先生方は回答してくださいました。それから校外での、教科とは関係のない校外での主体的な活動については、懸賞論文への応募、それからボランティア活動ですね。

地域のボランティアに参加する、それから瀬戸内国際芸術祭というのがありますけれども、これのボランティア活動に参加する。あるいはここにたくさん挙がってきたのは進学に関わること。それから地域交流も、本当に色々な分野が出てきます。ということで、本当に多種多様で主体的な活動と言われたら、こういうことを先生方は考えられていることが分かりました。それから、じゃあそれをどう評価するかと。評価しろと言われたら、どういうふうにするのかということで、答えていただいたのがこのスライドです。お手元の資料では、裏側 2 ページ目になると思いますけれども、最も多かったのは、教科に関わる活動については、文章による評価。あるいは評価できないと。数値によるとすれば、到達度評価。それから校内での教科外の活動は文章による評価。校外での活動についてもそれが最も多かったです。文章による評価が、どうやら評価としては高校の先生方、本校の先生方についてはやりやすいと。ただ、ここに書かれていますけれども、どうやって差を付けるのかが分からないということです。また、具体的にどうしますかということも聞きましたけれども、少し時間がかかっていますね。リンクがうまくいっていないようでファイルが開きませんね。教科に関しては、キャンドゥリストを作成するとか、評価の観点、ループリックですね。ループリックを使ってするか。結果、賞状とか貰った、それを評価に入れる等々が出ています。その中には、高校側が主体性を評価する必要はない、大学側が面接を通して主体的に評価すればよいという回答もありました。それから、教科外の校内での活動については、どう評価するかと言うと、こういう回答です。賞状や活動記録、ただ、他の生徒とどれくらい到達度が違うのか。それをはっきりさせることが非常に困難だと。あるいは客観的な証明や、証拠があれば主体性に優れているということになるのだろうか、ならないということです。生徒理解や実力の伸びなどがあるが、その基準をどうやって共通化するのか思いつかないという回答が出

ています。じゃあ、続いて 3 番目です。生徒の主体性を評価する入試を行われようとしています。ア〜カまで選んでもらいました。それに対する回答は、アが 4 人、それからイが 6 人、そしてウが 9 人、そしてエが 12 人でした。それからオが 3 人、カが 7 人です。一番多かったのはこのエ。育成は大切だけれども、入試で測ることは不相当だと。評価しろと言われれば評価しますがということです。それから、差を付けることが非常に難しいと。利用してほしいけれども参考程度にしてほしいというのが本校の先生方の考え方です。それで、その他のところには、各大学の基準で面接においてのみ評価項目として扱ってほしい。それから、ここですね。先ほども西郡先生がおっしゃっていたようだけれども、主体性が発露する局面というのは、自分の所属するクラス、部活動、校外団体の集団的な雰囲気が大きく影響しているのではないかと。なので、一人ひとりの主体性を個別に捉えようとするとは評価は実態に沿っていないのではないかと。集団に左右されるものではないかということです。次の回答もそうです。発揮できる機会が多い環境にある子と、少ない子がいると。それによって、入試に使うのはどうかということです。それからこういう意見もあります。全て何々するとか、全く何々しないというどちらかの意見だけという風習に沿うことなく、各大学が必要と感じる入試をすべきではないかと。そして、主体的に変わっていく力を身に付けることは大切なんだけど、文章で評価することは可能。でも入試の客観性、公平性を考えると数値化が必要。でもどうなんだろう。本当にいいのかと。丁寧な面接をすることでのみ可能ではないのかという回答、意見です。それから主体性を大学入試で評価することに対して意見ということでお願いしたのが次のものですがこれですね。考え方、意見としてはこういうものがあります。ポートフォリオ的に評価することが可能だけれども、本当に自らののか、入試のためなのか判断できないと。それ

から表現の方法や何を基準に等、ばらばらになる可能性が高い。それから文章による評価で大学が参考にする程度がふさわしいと。高校現場に主体性の評価を求めるのではなく、大学側で考えてほしい。アピールできる表現力のある生徒への評価が高くなるのではないかと。急激な変更は混乱を招きますよとか、客観性を持たせるのは難しい。これは結構多いです。主体性があるから合格させるのではなく、入学した生徒の主体性を育てていくべきではないのか、大学はということです。それから言われていないのに率先してこれらの期待以上にすることが主体性のはずだけけれども、評価するというメッセージを発した段階で、概念と根本的に矛盾するのではないかと。入試の就活化が進むのではないかと、本当にたくさんの疑念と言うか疑問点と言うか、主体性を評価することに対する本当に入試にふさわしいのかという考えがたくさん出ています。

考察～入試で公正に評価できるのか？～

考察ですけれども、先生方が主体性を感じる生徒の活動というのは、教科に関わる活動は質問、添削、教えあい、探究と。教科外の校内での活動については、部活動での自主的活動、リーダーシップ。ただこのリーダーシップもちょっと疑問がありますけれども、生徒会での企画、運営、探究活動、コンテスト等への参加、清掃。教科外ではボランティア、進路に関わる探究、体験活動、地域交流等々。探究、フィールドワークということです。評価方法としては、やれと言われれば、文章による評価でしょうと。でも入試に使うんだったら、数値による評価はしなくちゃいけないですよね、客観的にするためには。でも本音で言えば評価できないでしょうというのが先生方の考えというふうになると思います。それが先ほどの、この3の主体性を評価する入試が行われようとしています、どのように考えますかというところに現れているのではないのかなと考えます。先ほど色々な意見がありましたが、こ

れがやっぱり全てではないのかなと。主体性を評価すると。こんな主体性を評価しますよと言われた瞬間にもう主体性ではなくなっているでしょうと。そして、本当に評価すべきことではないと思うし、入試の就活化。これでいいんですかと。自己プロデュース力を測るだけになるんじゃないですかというのが、今の流れではないかというような意見が中心なのではないのかなと思います。

結論～評価するなら、探究・学びの過程を～

結論ですけれども、これは私の考えです。主体性という言葉にあまりにも振り回されていないだろうかと。主体性から主体的に離れ、客観的に、冷静に見つめ直してみる必要があると。主体性よりは学問、学びへのモチベーションの方が大学に入学する際は重要ではないだろうかと。それが最も現れるのが探究活動ではないかと。もし仮に合否を決める第三の要因として測るのであれば、探究のプロセス、学びのプロセスこそが測られるべきではないかと。学習指導要領改訂の次期学習指導要領で重要なことですが、この何ができるようになるか、何を学ぶか。どのように学ぶかと。主体的という言葉が表れているのはここですよ。どのように学ぶかと。これが主体的な活動を評価されるというか、主体的な活動が表れることということに、学習指導要領ではなっている。そして、社会に開かれた教育課程と言われています。また、総合的な探究の時間。教科理数で、理数探究基礎、理数探究という科目が新しく加わりました。ということで、多分これではないのかなと。これは、私が進路指導主事になった時に10年前に考えたスローガンですけれども、『「学び」っておもしろい!!』っていうふうに、生徒にいかに関心されるか。つまり、大学へは学問をしに行くのであって、学問に必要なのは多分モチベーションでしょう。そのモチベーションをどこに向かわせるか。それがゲームであれば、生徒は主体的にゲームをします。それを学問の方に向けさせれば、学問をするで

しょう。モチベーションが高ければ高いほど、主体的に学び、研究する。さらに、高校時代に学んだ知識、技能を基に探究活動をしっかりとしてきた生徒の学びのモチベーションは高いものがあるということを、多分 AO 入試等を通じて、大学の先生方は感じられているのではないのでしょうか。大学はそのことをアドミッションポリシーに明記することで、そのような学生が欲しいのではないかと考えています。私が生徒の探究活動等々の指導の中から考えていることは、生徒は探究活動を通して街に出て、街に溶け込み、街の人と触れ合って、街の魅力に気づき、街を愛して、未来の街を支えるひとりの大人として成長する。これがこれから求められている教育のひとつではないのかなと考えています。直面した課題をどう乗り越え、解決したか、そこから何を学んだか、成し遂げたか。その学習過程を問う入試。これが主体性を問う入試ではないかと。主体性を評価した入試を行うことで、要は、文科省は何を言いたいかということを下には書いたのですけれども、予想ですけれども、主体性を評価しますよということで、今の入試改革の根本というのは大学教育と高校教育を変えたいと。そのためには間をつなぐ入試が変われば、変わるでしょうということが、確か元だったと思います。なので、探究を高校現場に根付かせたいというふうに考えているのではないのかなと。それが、学習指導要領の中で探究活動に関する科目がふたつも現れた。さらに、歴史探究とか、地理探究とかも増えてくる。探究活動が主体的な学びではないかと考えています。

つぶやき～視野を広げ、主体的に行動する～

最後になります。改革を進める上で、それはお手元にも書いたんですけれども、高校教員としてはどうすべきかと。いつも入試改革、入試が変わるとなると、受け身的に、勝手に付度して、大学がこういうふうにするんじゃないかというふうに思いながら、合わせようと思います。それが、逆にまた生徒を苦しめ、改革を推進させていく

ということになるのではないかと考えます。例えば今でいうと英語 4 技能検定。それから e-ポートフォリオ。できる環境にある生徒とない生徒がいる。都会と地方とは全く違う。でも、入試に入れようとしている。じゃあ何かやらなくちゃと私たち地方の教員は考えざるを得ない。でも、なかなかできないよねと。そんな環境が整っていないのにはと思います。まさに、私たちが主体性を持って、多様な人々と連帯、協働しつつ行動する態度が求められているのではないのかなというふうに考えています。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

樫田豪利特任教授(司会)：

石井先生ありがとうございました。続きまして現状報告 3、有山先生となります。ただいまからコンピュータのセッティングを行いますので、しばらくお待ちください。

資料

第28回 東北大学高等教育フォーラム 新時代の大学教育を考える[15]

「主体性」とは何だろうか
大学入試における評価とその限界への挑戦

四国の進学校で
生徒の「主体的」な活動を考える

日時: 2018年5月21日
時間: 14:20~14:40
場所: 東北大学百周年記念会館
菟ホール

香川県立観音寺第一高等学校
教諭 石井 裕基
ap0170@kagawa-edu.jp

香川県

教育概要(全日制課程)

- 55分6限(火曜日のみ7限)授業を実施
- クラス数 7クラス×3学年 (生徒数 738名)
- 普通科・理数科で一括募集
2年次より、理数科1クラスと普通科6クラスに別れる
- 1年(特色コース2クラス+普通科5クラス)
特色コース: 2年次から理数科への進級を希望する生徒を中心に編成。
- 2年・3年(理数科1+文系特色コース1+普通科5)

大学合格状況(過去3カ年平均)
国公立大 107名
私立大 381名

今日の話題

一. 本校の概要

二. 生徒の「主体的」活動を考える
仮説 ⇒ アンケートによる検証
⇒ 考察 ⇒ 結論

三. その他 ... つぶやき

SSHの紹介(概念図)

SSHの概要がわかる説明資料

香川県立観音寺第一高等学校

高志 高い志と科学的な問題解決意欲決定力

科学的探究力

国際性

課題 成果

普及

検証

香川県立観音寺第一高等学校

本校の歴史

1900年(明治33年) 香川県立丸亀中学三豊分校として創立
1903年(明治36年) 香川県立三豊中学校として独立
1907年(明治40年) 三豊郡立三豊実業女学校創立
1921年(大正10年) 香川県立三豊高等女学校に改名
1949年(昭和24年) 三豊中学校と三豊高等女学校が統合
観音寺第一高校が設置
1969年(昭和44年) 全日制課程に理数科 設置
2011年(平成23年) 文部科学省からSSHに指定
2017年(平成29年) 文部科学省からSSHⅡ期目の指定

香川県立観音寺第一高等学校

SSHの取組の一つ 探究活動の紹介

- 2年生の全生徒が取組んでいる。
- 普通科・文系 >>> 「総合的な学習の時間」
- 普通科・理系 >>> 「課題探究」(学校設定科目)
- 理数科 >>> 「科学探究」(学校設定科目)

2年生海外研修(2017年11月18日)
デュアルテ高校とのポスターセッションの様子

2017年2月16日 SSH研究成果報告会にて

スポーツデータ解析コンペティション最優秀賞ポスター



「第7回スポーツデータ解析コンペティション」(日本統計学会)
<http://estat.sci.kagoshima-u.ac.jp/sports/index.htm>

7

探究活動(1年生が「主体的」に活動)

協賛企業表
 コンペティションの主旨にご賛同いただいた10社の協賛企業から下記のとおり協賛企業賞が授けられました。

協賛企業 (五十音順)	学名 (五十音順)	協賛賞の額	賞状
エイチ・データ・システム	和歌山大学 「おかげさまで」	和歌山大学・和歌山大学 「おかげさまで」	賞状商品券10万円分
KDDIX株式会社	和歌山大学 「おかげさまで」	和歌山大学・和歌山大学 「おかげさまで」	賞状商品券10万円分

「楽天賞」受賞
 副賞「楽天ポイント5万円分」

協賛企業 (五十音順)	学名 (五十音順)	協賛賞の額	賞状
エイチ・データ・システム	和歌山大学 「おかげさまで」	和歌山大学・和歌山大学 「おかげさまで」	賞状商品券10万円分
KDDIX株式会社	和歌山大学 「おかげさまで」	和歌山大学・和歌山大学 「おかげさまで」	賞状商品券10万円分

10

データ分析を主とした課題研究・数学(SSH)

和歌山県
 Wakayama Prefecture

和歌山県データ活用コンペティション

和歌山県は、総務省統計局・独立行政法人統計センターと連携して
 データの活用や統計的思考の重要性を積極的に全国に発信していきます。

和歌山県の
 数値方針

政府関係機関の
 地方部局

和歌山県データ
 活用推進センター

有識者ネットワーク
 アドバイザリーボード

和歌山県データ
 活用推進プラン

第1回 和歌山県データ活用コンペティション

和歌山県は、全国にデータ活用的重要性・有用性を発信するとともに、次世代のデータサイエンティストを育成するため、
 「和歌山県データ活用コンペティション」を開催。

8

今日の話題

- 一. 本校の概要
- 二. 生徒の「主体的」な活動を考える
 仮説 ⇒ アンケートによる検証
 ⇒ 考察 ⇒ 結論
- 三. その他 … つぶやき

11

探究活動(1年生が「主体的」に活動)



2018年2月10日和歌山県データ活用コンペティション
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/pref/020100/data/sankabosyu2017.html>

9

四国の進学校で 生徒の「主体的」な活動を考える



二. 生徒の「主体的」な活動を考える

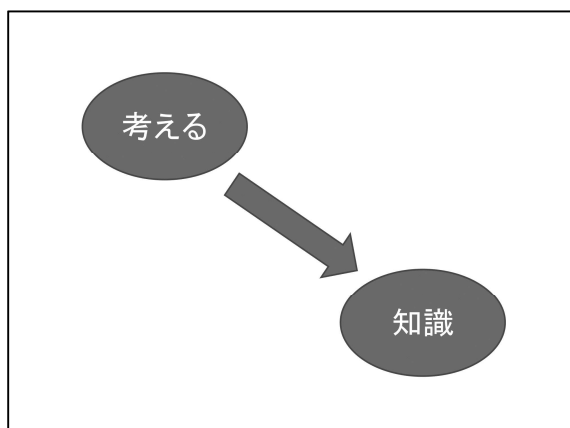
2) アンケートによる検証

1) 日頃の生徒の活動の中で、生徒が「主体性」を伸長させていると思われる活動や、生徒の「主体的」な取組であると感じられる活動について、具体的に記入してください。

回答

期 間： 2018年5月11日～16日
対象者： 本校の職員及び近隣校（知人）
回答数： N=33

16



二. 生徒の「主体的」な活動を考える

2) アンケートによる検証

回答 A. 教科に係る活動

1) 日頃の生徒の活動の中で、生徒が「主体性」を伸長させていると思われる活動や、生徒の「主体的」な取組であると感じられる活動について、具体的に記入してください。

オープンクエスチョン（答えのない問い）に答えるとき
難しめの問題に出くわし、自ら辞書で調べているとき
3年生が国立二次試験対策として過去問題の添削に何度もやってくる。
教科書に載っていない別解を考え、それを友人や教師に紹介する。
数学検定や統計検定を受検したり、数学オリンピックに参加したりした。
課題研究で、謎に思うことを積極的に様々な方に質問する。
疑問点がある場合、教員や友人に聞く
実験の手順で、何故それをするか考えること、積極的に動くこと。
学ぶ順序は授業に添っているが、自らの疑問に対する答えを探そうとしている活動
試験でどこが出題されそうか、予想した。
授業で習ったことに疑問をもち、文献調査や聞き取り調査などを行った。

17

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

1) 仮説

大学入試改革が行われ、大学入試が学力の三要素と各大学のアドミッションポリシーを測る入試として行われようとしており、その中でも特に「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」が測られようとしている。しかし、高校教員にとって、「主体性」とは何かと問われたとき、多様な捉え方が予想され、それを評価し入試の書類に添付することは、非常な困難が予想される。また、捉え方が多様であり、その文章表現や点数化も様々な基準が生じ、それらを一律に同等に評価できないのではないか。

15

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

2) アンケートによる検証

回答 B. 教科外の、校内活動

1) 日頃の生徒の活動の中で、生徒が「主体性」を伸長させていると思われる活動や、生徒の「主体的」な取組であると感じられる活動について、具体的に記入してください。

SSHでの課題研究などの活動
推薦・AO入試などの面接や口頭試問において同じような学科を志望する生徒同士でお互いに練習させることで主体的に取り組んでいると思う。
受験に向けての面接練習やグループ討論練習で、自主的に相互のスキルアップに向けたチームを作って取り組む。
福祉系への進学希望者が、（前期で面接試験もあったため、）地域の社会福祉協議会を自主的に訪問し、インタビューさせてもらっていた。また、この生徒は西部義経学校の発表会や福祉祭りのボランティアなどにも参加し、福祉の現場理解につとめていた。
看護系進学希望者が、看護体験に参加していた。
国際教育の広がりの中で、短期・長期、交換留学にすすんで参加。
清掃活動で自分の役割ではないが、自分で動いたり、手伝ったりしたとき。

18

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

2) アンケートによる検証

回答 C. 教科外の、校外活動

1) 日頃の生徒の活動の中で、生徒が「主体性」を伸ばさせていると思われる活動や、生徒の「主体的」な取組であると感じられる活動について、具体的に記入してください。

地域の市民活動センターの呼びかけに応じて、NPOの活動の手伝いを行う。
医療系希望者には地元の病院での実習体験、教員志望者には小・中学校での学童保育を特別支援学校希望者には特別支援学校での支援ボランティアなど様々なボランティアなどを積極的に参加するように動いています。
将来、就きたい仕事の職場に直接連絡し、仕事の実情を把握した。
地域社会(コミュニティ)の行事に参加し、活動。
懸賞論文などに積極的に応募した。
地元「お遍路さん(多数)」にインタビューし、四国霊場八十八所の魅力について聞き取り調査をした
最初は主体的ではないかもしれないが、やっていくうちに主体性が出てくるものもあるのではないかな。

19

2) アンケートによる検証

2)上の表で丸を付けた項目について、具体的に記入できる場合は下記にご記入をお願いします。

回答 B. 教科外の、校内活動

体育祭や文化祭の感想を書かせ、頑張ったこと、工夫したこと、反省点などを記入させる。
調査書を用いる形が一般的だが(文書形式)、評価まだできているのか疑問?!
賞状、活動記録(時間、内容)がわかれば、文章で評価を書くことはできるが、それが他の生徒とどのくらい到達度が違うのかという問題が出た場合、それをはっきりさせることは困難ではないかと思う。
順位がつくなど、客観的に評価できるものではないため、他人との比較ができない。
戦績や業績といった客観的な証明や証拠があれば主体性が優れているということになるのだろうか? ならないと思う。
様々な活動に参加したものの記録と感想を担任も生徒も記録しておき、指導要録を書くときや面接連取をする際に使う。
高校側が主体性を評価する必要はない。大学側(雇用者側)が面接を通して主体的に評価をすればよい。

22

2) アンケートによる検証

2) 1)で記入した活動が調査書等で入試に使われる場合に、どのように評価するのが適切ですか。下の表の活動ごとに、適切と思われる評価方法の一つだけを選び○を記入してください。

評価方法 活動	数値による評価		文章による評価	評価できない	無回答
	到達度評価	相対評価			
A. 教科に関わる活動	7人	3人	12人	9人	1人
B. 教科外の、校内での活動		3人	20人	8人	1人
C. 教科外の、校外での活動			20人	8人	4人

「文章による評価」と「評価できない」の両方を選択した方が、1人

意見) ○ どうやって差をつけるのか、分からない。
○ 評価項目を具体的に「～できた」と行動などで示すことができれば、数値化は可能。

20

2) アンケートによる検証

2)上の表で丸を付けた項目について、具体的に記入できる場合は下記にご記入をお願いします。

回答 C. 教科外の、校外活動

校外での活動の場合、評価対象となる情報が必要なだけ入ってこない気がします。
賞状、活動記録(時間、内容)がわかれば、文章で評価を書くことはできるが、それが他の生徒とどのくらい到達度が違うのかという問題が出た場合、それをはっきりさせることは困難ではないかと思う。
順位がつくなど、客観的に評価できるものではないため、他人との比較ができない。
B)と同じように、活動の内容と、そこか得られたことを文章で評価することは可能。
さまざまな活動に参加したものの記録と感想を担任も生徒も記録しておき、指導要録を書くときや面接練習をする際に、使う。
地方新聞(『四国新聞』)に記事が掲載。
：古墳祭りに参加した歴史愛好家の感想文 ；観音寺文化財協会発行の機関誌
評価は行っていない。
高校側が主体性を評価する必要はない。大学側が面接を通して主体的に評価をすればよい。

23

2) アンケートによる検証

2)上の表で丸を付けた項目について、具体的に記入できる場合は下記にご記入をお願いします。

回答 A. 教科に関わる活動

Can-doリストを作成し、教科担当者や本人の自己評価をもとに成績を評価
評価の観点、規準などを作り、段階的に評価
賞状、活動記録(時間、内容)がわかれば、文章で評価を書くことはできるが、それが他の生徒とどのくらい到達度が違うのかという問題が出た場合、それをはっきりさせることは困難ではないかと思う。
高校側が主体性を評価する必要はない。大学側(雇用者側)が面接を通して主体的に評価をすればよい。
課題研究の発表における「発表会やコンテスト」の名称と受賞内容を記入する
順位がつくなど、客観的に評価できるものではないため、他人との比較ができない。
作品の書き始めから完成までの軌跡が分かる振り返りシートを準備し、毎時間の終わりに生徒に記入させる。最終的には相互鑑賞、自己評価をし、100点満点で自分の作品を評価させる。

21

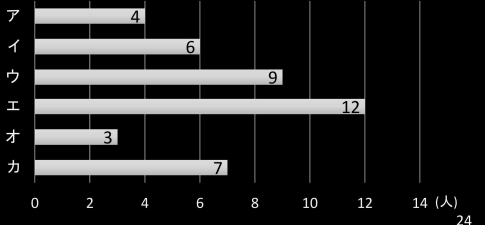
2) アンケートによる検証

3) 生徒の「主体性」を評価する入試が行われようとしていますが、どのように考えますか。

エ「育成は大切だが、入試で測ることは不適當」 36.4%

ウ「差をつけることが難しい。利用してほしいが参考程度に」 27.3%

複数回答者有り



24

③ 生徒の「主体性」を評価する入試が行われようとしています、どのように考えますか。

カ) その他

○各大学の基準で、面接においてのみ、評価項目として扱うのが良い。

○(ウ)に近い考えなのですが、(オ)の懸念もあるので、そうならないように十分検討や対策を実施した上での、実施が求められるのではないかと考えています。

○「主体性」が発露する局面は、自分の所属するクラス、部活動、校外団体の集団的な雰囲気が大きく影響している。一人ひとりの主体性を個別に捉えようとする評価は、実態に沿っていないと思われる。

○主体性を発揮できる機会が多い環境にある子と少ない子がいる。その子自体に主体性が豊かにあっても、入試の評価の業績として残せない子は不利。

○ア～オのすべてに○と×をつけたい気がする。

25

2) アンケートによる検証

④ 「主体性」を大学入試で評価することに対して、ご意見がございましたらご記入ください。

回答

①実際に評価できるのか
②求めたら露骨になって主体性と書えるのか？(何もない状態で学外での活動に主体的であると言えるが、そういう活動をする人を選る、評価するのなら、全員が参加して主体性があると書えるか)
③高校入試の文章でさえもめるのに、さらに難しいものを共通化して評価をつけられるか。調査書の文章も学校ごとに違うの本当に共通に評価してよいのか。

勉強不足だと思うが、やはり「どのような指標・基準で、どのように評価するのか」というのが分からない、是非も返答しづらい。また「主体性」は一人の人間として、社会の中で生きていく上で、当然必要もので、求めていくこと、育てていくことは大切だが、それと大学入試のなかでどう評価し、合否の基準として維持するのか、というのは難しい気がする。一度の面接だけで、他の受験生と優劣を決める？担任の調査書や推薦書が得点化される？などなど

入試で主体性を評価するとなれば、「入試のための主体性」を生徒は通ってしまうのではないだろうか。また、生徒たちは大学が提示するアドミッションポリシーに基づいて活動を選択し、実績を作り、そこから成長していく自分を創出していくでしょう。その過程を、「主体性」と呼べるのでしょうか。

私は、担任や部活動の顧問、生徒会の担当をしていて、主体性は「具体的な目標と、責任感のもとに育つ」と感じています。目標を設定し、それを達成するためには何をしなければならぬのか、いつまでにそれをしなければならぬのか、そのためには何が必要で、誰の協力が必要で、これらを計画・実行しなければならぬのかを想定する。そしてそれを自分を中心となって成しとげること、責任感・自覚を持つこと。それらが整えば、生徒は自ら行動を出しています。その思考や活動の過程こそ、主体性が発揮された瞬間ではないでしょうか。このような過程が伴う活動であればよいのですが、評価されるのが前提となった場合には、活動が表面的なものになってしまうという懸念があります。

主体性とは、「やりたい自分を持ち、そのために自ら行動していく力」だと私は考えますが、高校生にとって、確固たる「やりたい自分」をもって、そのために行動していくというのは簡単ではないと思います。大学のアドミッションポリシーは、求める学生像の提示のみを役割とするのではなく、高校生が「やりたい自分」を持つための参考であり、人が人に勝つべき、近づこうと行動するように、目指すべき方向の道しるべとして存在してほしいと考えます。主体性を評価することに限らず、慎重にさまざまな意図を考慮した上で、提示してもらいたいと思います。

主体性を数値化するのには困難だと感じ、文章による評価は差別化しにくいと思う。面接で、面接官が主観的に判断すべき項目だと考える。客観的に主体性を測ることは不可能ではないが、したがって入試に公平性を求めるなら、取り入れるべきではない。

28

③ 生徒の「主体性」を評価する入試が行われようとしています、どのように考えますか。

カ) その他

○必要な学部(特に、医学部や高偏差値の大学・学部)については、このような「主体性」の評価があっても良いと思うが、多くの学部で、その生徒自身の評価があいまいになると感じる。日本の「全て～する」が「全く～しない」というどちらかの意見だけという風習に添うことなく、各大学が必要を感じる入試をすべきでは？

○主体的に関わっていく力を身につけることは大切であり、それを文章で評価することも可能であると思うが、入試の客観性・公平性を考えると数値化が必要。それは、大学が丁寧な面接をすることでのみ可能になると思うが、今以上にその枠を広げる必要はない。「ペーパーテスト」の中身の見当は必要だろうが、「ペーパーテスト重視」で良いともう(努力の指針となりうる客観性)。

26

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

3) 考察 ① 先生方が「主体性」を感じる生徒の活動

回答

【A. 教科に関わる活動】

質問 添削 教え合い 探究

【B. 教科外の、校内での活動】

部活動での自主的活動・教え合い
リーダーシップ(?) 生徒会活動での企画・運営
探究活動 コンテスト等への参加 清掃

【C. 教科外の、校外での活動】

ボランティア 進路に関わる体験活動 地域交流
講演・セミナー参加 探究(フィールドワーク)

29

2) アンケートによる検証

④ 「主体性」を大学入試で評価することに対して、ご意見がございましたらご記入ください。

回答

「主体性」を自ら積極的に参加した(取り組んだ)ことの履修として、ポートフォリオ的に評価することは可能だが、本当に「自ら」なのか「入試のため」なのかは判断できないと思う。また、それらの活動が「合格のための手段」となっているのが現実ではないかと思う。

「文章で評価」としたものの、文章を書く側から見ると、表裏の方法や何を基準に・・・など、バラバラになる可能性が高い。どうすればいいものかな・・・

各高校が独自で評価すると学校間で差が生じるため、文科省が定める程度スタンダードを定めておく必要がある。

勉学に励み、成績が優秀である生徒も、主体的であると言えると思います。コミュニケーション能力があり、活動に活動している生徒はカリキュラムに評価される制度になるならば「文章による評価で大学が参考にする程度」が相応しいと思います。

模範が準備をしなくても、しっかりと主体性をもって生活している生徒はその内容を自分で書ける(読める)のでその機会はある。

高校現場に主体性の評価を求めるのではなく、大学側で考え、責任をもって合否を決めて欲しい。従来のAO入試をベースに、面接方法を考える。推薦書の受渡の様子など、十分に主体性を測れるのではないかな。

主体性というより、主体性をアピールできる表現力のある生徒への評価が高くなりそうなのが気になる。評価は難しい。

まずは、参考程度でお願いしたい。あまりにも急激な変化は混乱を招き、受験生の間での合否の客観性がそこなわれるのは明らかである。

客観性を入試では必要とすると思うのですが、主体性を客観性をもたすのは難しいと思います。ただ、周知より実を挙げて主体的に活動する事実があれば、評価されていいと思うが、何がきっかけで促しているかの判断が難しい。促した結果は、促した部分(学力の3要素のうちのいくつか)があると思うので、促した結果を評価するのでいいと思う。ただ、促した結果に結びついていないから、部分が促していないというのともうかと思う。

評価することそのものは決して悪いことではないと思うが、主体性があるから合格させるのではなく、入学した生徒の主体性を育てていくべきではないかと思う(そんなに主体性が大切であれば)。私は入試は学力だけで評価すべきだと考えています。

27

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

3) 考察 ② 適切と思われる評価方法

【A. 教科に関わる活動】
【B. 教科外の、校内での活動】
【C. 教科外の、校外での活動】

やれと言われれば・・・？！

○「文章による評価」

客観的？

入試に使うなら・・・

△「数値による評価」

本音は・・・

◎「評価できない」

30

3) 考察

4 「主体性」を大学入試で評価することへの意見

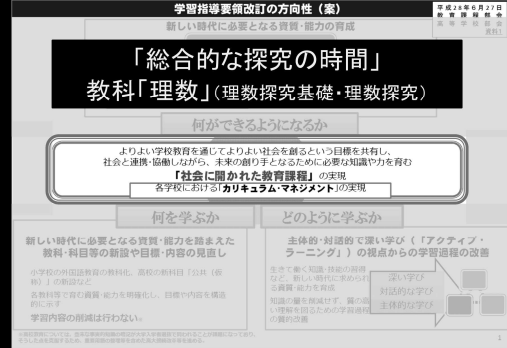
回答

「言われていないのに」「率先して」「こちらの期待以上に」することが【主体性independence】である。とすると、「評価する」というメッセージを発した段階で、「言われていないのに」「率先して」という「自活、自立、非依存性」という「主体性independence」の概念と根本的に矛盾する。

「主体性」ではなく「自主性Autonomy」ならば、評価者が期待する行動や意思を、言われる前に持っているか、という概念なので、評価可能かもしれない。が、これも「評価する」というメッセージを発した時点で論理が破綻する。そもそも「評価してはならない」項目だと思う。全人格的に評価され、「入試の就活化」が進むと思う。結局「自己プロデュース力」を測るだけになるのでは。

31

☆) 学習指導要領



二. 生徒の「主体的」な活動を考える

3) 結論

「主体性」・・・という言葉に、あまりにも振り回されていないか。

「主体性」から「主体的」に離れ、「客観的に」「冷静に」見つめなおしてみる必要がある。

「主体性」より「学問・学びへのモチベーション」の方が、大学に入学する際は重要ではないだろうか。

それが最も現れるのは、「探究活動」ではないか。もし仮に可否を決める第3の要因として測るのであれば、「探究のプロセス」「学びのプロセス」こそが図られるべきであろう。

32

二. 生徒の「主体的」な活動を考える

3) 結論

大学へは、「学問」をしに行くのである。学問に必要なのは、「モチベーション」。

「モチベーション」が高ければ高いほど、「主体的」に学び、研究する。

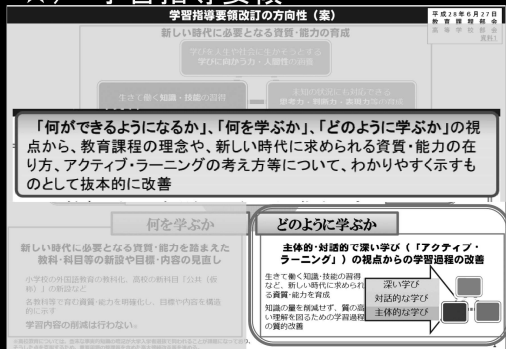
更に、高校時代に学んだ「知識・技能」を元に「探究活動」をしっかりしてきた生徒の学びのモチベーションは高いものがある。

大学は、アドミッションポリシーに明記することで、そのような学生がほしいのではないかと。「学び」っておもしろい!!

生徒は、探究活動を通して、街に溶け込み、街の人と触れ合い、街の魅力に気づき、街を愛し、未来の街を支える一人の大人として成長する。

35

☆) 学習指導要領



二. 生徒の「主体的」な活動を考える

3) 結論

「直面した課題をどう乗り越え、解決したか、そこから何を学んだか、成し遂げたか」・・・「学習の過程」を問う入試

「主体性」を評価した入試を行うことで、次期学習指導要領の中で重視しようとしている「探究」を高校現場に根付かせよう。

36

今日の話題

一. 本校の概要

二. 生徒の「主体的」活動を考える

仮説 ⇒ アンケートによる検証

⇒ 考察 ⇒ 結論

三. その他 … つぶやき

37

三. その他…つぶやき

英語四技能
検定

e-Portfolio

高校教員の「受け身」と「忖度」が、この「改革」を前進させる？

私たちが、「主体性を持ち、多様な人々と連帯・協働しつつ『行動』する態度」が求められている？

38



ご清聴 ありがとうございました。



39

「四国の進学校で生徒の『主体的』な活動を考える」

香川県立観音寺第一高等学校

教諭 石井 裕基

1. 本校の概要

1900（明治 33）年に開学した旧制三豊中学校と、1907（明治 40）年に開学した旧制三豊女学校とを前身にもち、今年、創立 118 年目を迎える香川県の西の端（観音寺市）に位置する中堅の進学校である。元内閣総理大臣の大平正芳氏、直木賞作家の芦原すなお氏、豊田理化学研究所所長の玉尾皓平氏、香川県知事の浜田恵造氏など多くの著名な先輩を輩出している。

2011（平成 23）年度よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究指定を受け、一昨年度の厳しい浪人生活（経過措置）を経て、今年度Ⅱ期目の 2 年目を迎えている。陸上競技部（棒高跳びは有名）、アーチェリー部、新体操部、山岳部、邦楽部、吹奏楽部など部活動も盛んで、校訓『我らに 燃ゆる 希望（のぞみ）あり』『我らに 高き 矜持（ほこり）あり』『我らに 重き 使命あり』のもと、文武両道に取り組んでいる。

2. 四国の進学校で生徒の『主体的』な活動を考える

1) 仮説

大学入試改革行われ、大学入試が学力の三要素と各大学のアドミッションポリシーを測る入試として行われようとしており、その中でも特に「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」が測られようとしている。しかし、高校教員にとって、「主体性」とは何かと問われたとき、多様な捉え方が予想され、それを評価し入試の書類に添付することは、非常な困難が予想される。また、捉え方が多様であり、その文章表現や点数化も様々な基準が生じ、それらを一律に同等に評価できないのではないかと。

2) アンケートによる検証

教員に対し、次のアンケート調査を行った。

1 日頃の生徒の活動の中で、生徒が「主体性」を伸長させていると思われる活動や、生徒の「主体的」な取組であると感じられる活動について、具体的に記入してください。

（なお、記入例は参考であり、それにこだわることなく、感じられた事を自由にご記入ください。）

A. 教科に関わる活動（記入例：英語の ALT と積極的に会話し、添削指導をお願いした。）

B. 教科外の、校内での活動（記入例：部活動で練習方法を自分たちで考えて、練習を行った。）

C. 教科外の、校外での活動

（記入例：フロンタランナー育成事業に登録し、栗林公園で外国人に案内を行う活動をした。）

2

1) 1 で記入した活動が調査書等で入試に使われる場合に、どのように評価するのが適切ですか。

下の表の活動ごとに、適切と思われる評価方法を一つだけ選び○を記入してください。

活動	評価方法	数値による評価		文章による評価	評価できない
		到達度評価	相対評価		

A. 教科に関わる活動				
B. 教科外の、校内での活動				
C. 教科外の、校外での活動				

2) 上の表で丸を付けた項目について、具体的に記入できる場合は下記にご記入をお願いします。

また、すでに評価されている場合、具体的な資料などありましたら、アンケートの回答に添付してご提出いただけますとありがたいです。

A. 教科に関わる活動

B. 教科外の、校内での活動

C. 教科外の、校外での活動

3 生徒の「主体性」を評価する入試が行われようとしています、どのように考えますか。

次の項目の中から選択し、記号に○をつけてください。

ア. 部活動や課題研究の取組の成果を入試に活かすためにも必要なことである。

イ. 学力だけではなく、主体的に関わっていく力を身につけることは大切であり、その取組を評価される入試は必要である。

ウ. 主体的な取組を入試の評価に利用してほしいが、受験生間で評価に差をつけることは難しいと思われるので、参考として利用する程度にしてほしい。

エ. 「主体性」は生徒の成育歴など内面に関わる部分であり、育成することは大切であるが、それを入試に利用することは相応しくない。

オ. 大学の過去問対策と同じく、その大学に合格するための様々な活動に「主体的」に取り組む生徒が現れ、同時に、合否に関わらない活動には参加しないようになることが予想されるので、それを入試に利用することは相応しくない。

カ. その他 ()

4 「主体性」を大学入試で評価することに対して、ご意見がございましたらご記入ください。

3) 考察

4) 結論

3. その他

高校教員の受け身と「忖度」が、この「改革」を前進させる？

私たちが、「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ行動する態度」が求められている？

現状報告 3：開成における生徒の主体性

開成中学・高等学校教諭

有山 智雄 氏

〔講師紹介〕

樫田豪利特任教授(司会)：

それでは現状報告の3『開成における生徒の主体性』，開成中学・高等学校教諭有山智雄先生です。よろしくお願いいたします。

有山智雄教諭：

ただいまご紹介にあずかりました開成中学・高等学校の有山と申します。子供の頃に、片平キャンパスの近くの祖父母の家によく遊びに来ていたので、今回こうやって東北大のフォーラムにご縁があったのは何か面白いなと思っています。

開成はどんな学校か

さて、開成における生徒の主体性ということで、お話をしていきたいと思います。まず開成は一体どんな学校なのか、そのご紹介からいきたいと思います。創立147周年ということで、歴史は長いです。中高一貫の私立の男子校。東京都内の荒川区、下町なのですが、山手線の西日暮里の駅から歩いて3分ぐらいのところにあります。中学から300人、高校から新たに100人入学するので、高校生は1学年400人います。開成というと「東大合格者日本一」のイメージがもしかしたら強いかなとは思いますが、我々が日ごろ「開成で大切にするのはこれだ」そう思っていることをいくつかご紹介したいと思います。以下のことは、創立者の佐野鼎、それから初代校長の高橋是清の頃から言われていることです。まず「開物成務」。これは開成という校名の由来にもなっています。物を開き、務めを成す。次に「ペンは剣よりも強し」。これは開成の校章、我々は「ペン剣」と呼んでいますが、これは開成でとても大事な考え方です。それか



ら「質実剛健」「進取の気性と自由の精神」。これは大事にされています。そして「自主、自律」。こういうことを我々は大事にしたいと思っています。

さて、今回このフォーラムのお話をいただいた時に、主体性と言われても、正直あまりイメージがわいてきませんでした。それでは、開成の中で一体どういうことが当てはまるのだろうか。それを考えてみました。そうしますと、思い浮かぶのが「自主、自律」なんです。開成の中では「自主性」という言葉を使うことが多いのですが、これは昔から大切にされてきたことです。例えばこのスライドは、校長が学校のことを紹介する時に使うものを拝借してきたのですが、やはり「自主性」ということが、大きく扱われています。それから、これは校長のスライドその2なのですが、「自主的行動、自律的行動で得た達成感」、これが「自己肯定感」であるとか、「自信の源泉」になっていく。そういう意味で、非常にこの「自主的」であるということは意味がある。こういうふうに述べられています。

開成における生徒の自主性の例

それでは「自主性」という言葉が開成の日ごろの教育の中で、どういうふうに使われているのかということを、少し探してみました。

よく言われるのは「生徒の自主的な活動を大事にしています」ということです。運動会であるとか文化祭、多様な部活動や同好会。これらについては後ほど紹介したいと思いますが、「自主的な活動」を大事にしています。それから、「自分で勉強しなさい」ということをよく言います。主体性を持って、学ぶ態度。これとニアリーイコールなのかなと思います。このスライドに、「指示待ち勉強」ということを書きましたが、実は開成に入ってくる子は何年も塾に通って、たくさん宿題を出されてそれをこなすという形で勉強を進めてきた子が多いです。そういう状況から、どうやって自分の力で勉強できるようにしていくか。これは大きな課題だと認識しています。次に「自主的な進路選択」。これは大学はどこに行くか、そういうことを含めて、自分が一体何をやりたいのかを考え、その「やりたいこと」をしっかりとやっていきなさい。そういうことを日々言っています。自分が何をするのかを、自分が選んだ価値基準でしっかりと決めなさい、ということが強調されています。

運動会

それでは、いくつか具体的な事例をご紹介します。まず、運動会についてです。開成の卒業生に「開成の思い出は？」と聞けば 100 人中 98 人ぐらいは多分運動会を上げると思います。この写真で後ろに見えるのはアーチと呼ばれる畳 24 畳分の巨大な絵です。これは高校 3 年生が何ヶ月もかけて、毎年新しいのを描いています。運動会は生徒にとってなぜそんなに大きい存在なのか。これは 8 色の対抗なのですが、高校は 8 クラスあるのでクラス対抗になります。そして半年以上かけて準備をするわけですが、下級生の指導は高 3 に任せます。教員は、手は出さない。ルールも、生徒に、具体的には運動会審議会や運動会準備委員会などに任せて決めさせています。競技の審判も、生徒に任せる。このような形でやっています。それでは教員

は一体何をやっているかというと、ひたすら見守る。手や口を極力出さない。まあ出しくなる場面もあるのですが、何とか我慢します。もちろん押さえどころは押さえなければいけないわけですが、そのギリギリの線を何とか頑張って探っている。そういう形でやっています。この写真は、うちは中高一貫なのですが、中学校 1 年生です。勝って喜んでいるシーンですが、かわいいですね。この子たち中学生も高校 3 年生が指導していきます。それから次の写真ですが、高校 3 年生になると棒倒しをやります。黒い制服の上着を着た子が周りにうろうろしていますが、これは生徒がやっている審判です。教員はフィールドにはいません。教員はルールも細かいところまでは全員は分かっていたりしますし、生徒がいないと運動会はとても成り立たないです。この写真は運動会が終わった翌日、片付けの日なのですが、みんなとてもいい顔をしているなと私は感じました。やはりひとつのことを成し遂げた達成感。これが自己肯定感や、自信の源泉になっているのだと思います。生徒にこういう活動をやらせることが、長い目で見た時は確実に本人にとってプラスになる。そういうことを我々は感じています。

文化祭

次に、文化祭についてもちょっとご紹介します。こちらも生徒が運営していくという形でやっています。ここでは、部活とか、そういうものについて少し紹介します。まず、ジャグリング部というのがあります。この部は最初、同好会からスタートして 10 年以上続いています。高校のチャンピオンというだけではなくて、全日本のチャンピオンが出たりしています。頑張る子はいつでも練習しており、非常にレベルが高いです。それからこれは折り紙部という、普通あまり聞かない部かと思います。5m×5m というような大きい紙から、折っていく作品もあるそうです。1 枚

の四角い紙から折るだけでなく、色々組み合わせる場合もあるそうです。この部もやはりやってみたいという子からスタートした部です。それからこの写真は、文化祭の有志の参加団体が作った手作りの野球盤です。いろいろな球場を真似したのを作ってやっていました。開成のグラウンドというのも作ってやっていましたけれども、長方形ないびつな野球場になっていました。このような少し風変わりな活動だけでなく、オーソドックスな部や同好会の活動というの、もちろんやっています。この写真は硬式野球部のトスバッティングですね。この写真はボート部。非常に伝統のある部活で、筑波大附属高校とは90回対校戦を続けています。早慶レガッタより長い歴史を持っています。対戦成績は今年の春負けちゃったので、またタイに並んだというところで、非常に競っています。平成29年には、全国選抜で4位になりました。この写真のように4人で漕ぐ種目です。そんな活躍をすることもあります。これはこの年だけめちゃくちゃ強かったということで、いつも強いわけではありません。それから、少し変わり種としては、エコカー同好会というのがあります。原付バイクの50ccのエンジンを使って自作の車を作る。その車で燃費競争をするエコランという大会があるのを見つけてきた生徒が、やりたいと言って同好会を設立しました。当然お金が必要になります。エンジン買ったり、フレームを組んだり。これはペン剣基金という開成内部の研究助成金を利用しました。この基金は、OBが寄付してくれたお金を原資としたものなので、研究活動などできちんと審査を通れば、お金が貰える。そういう制度がうちの学校はあるので、それでやりしました。

こうやって色々な同好会が次々と出てくるというところは、ひとつうちの特徴でもあるのですが、「やりたいことはやった方がいい」というメッセージは、日ごろから発信されている。そういう空気感が、やっぱり学校の中

にはある。顧問さえいれば、同好会は作れるので、教員としては背中を押す役割になると感じています。それから、うちの学校は生徒に恵まれているのはもう間違いないと思います。挑戦する仲間を、日ごろから周りにたくさん見ている。それから、好奇心旺盛な仲間がたくさんいる。全校生徒、中高で2,100人、それからOBもいるわけです。

誰が一番主体的か？

さて、主体性を評価するというのが今回のテーマであるわけですが、それでは野球部で頑張っている子、ボート部で全国大会で4位になった子、エコカー同好会を設立した子。どの子が、一番主体性があると言えるでしょうか。同じ部活動でも結果が出た、結果が出なかったということはありません。結果が出た方がきっと頑張ったのだろう、我々は、そう見がちかもしれません。エコカー同好会は、ゼロから始めて何かやろうとした。これは「主体性がある」というふうに我々は感じることは多いかと思います。ただ、そこで差を付けることに果たして意味があるのか。評価は正直簡単ではないなというふうに私は感じています。

では、個人に少しスポットを当てていきます。A君という生徒。この子は地質マニアで、地質部の部長もやっていました。非常に積極的な子で、外部の研究者にも積極的にコンタクトを取って会いに行き、自分でどんどん研究を進めていきました。合宿の時に、珍しい化石を発見したこともあったりして、この子はそういう実績をきちっとアピールして、東大の推薦入試、これは各校からひとりだけという枠があるわけですが、それを見事に勝ち取りました。これは、主体的な活動というのが、具体的に評価されて、結果に結びついた。そういうひとつの例かと思います。

次にB君。彼は現在30代後半の卒業生なのですが、中学時代はそれほど成績が目立っていたわけではなかったのですが、高校では成績

がトップクラスになりました。僕のクラスにいたので、どうしてそんなに成績が良くなったのかを聞きました。そうしたら、「勉強のやり方が分かった」と言っていました。その子は夜 11 時には寝ていることで有名だったので、寝る間を惜しんで勉強したわけではないようです。その子は東大に入って、現在国土交通省で仕事をしています。どうやったら住みやすい日本を作れるか、日々頑張ってくれています。

それから C 君。この子は、在学中は優等生でも何でもなし。むしろ劣等生だった。これは僕の評価ではなくて、本人の談です。彼は開成から東京医科歯科大学に進んだのですが、在学中にインターネットとコミックカルチャーを組み合わせた仕事を自分で始めました。そして、大学 6 年生の時に一つの決断をしたそうです。学校の実習が忙しくなってきた時期ですが、仕事もこのタイミングで中断したら駄目だろうと思ったそうです。彼は歯学の勉強は後でもできるけど、この仕事はこの波を逃すわけにはいかない。そう思って、仕事に専念したそうです。結局仕事は軌道に乗り、現在では有名なイラストコミュニケーションサイトの会社の社長になっています。このスライドは彼がくれたメールの一部です。彼は「現在の目標はコミックカルチャーを守り、次世代の担い手を育てていくことです」と書いています。彼は非常にしっかりとした信念を持って生きている。そして、その信念に基づいて自分の進路を決めている。彼はとても主体的に生きていることは間違いありません。ただ、彼が在学中にどうだったかという点、主体性という観点ではあまり目立つことはなかったように思います。

個人個人で見た時、主体性には観点が色々あるということもありますが、評価は簡単ではないと思います。

学びにおける主体性

では最後に、まとめの方に入っていきます。

主体性と一言に言っても、色々な場面のものがあると思います。学習場面における主体性、例えばグループディスカッションで積極的に発言したなど。それから学習計画を立てる上での主体性。また、進路決定等における主体性。本当に色々な主体性があります。そもそもこの議論は学力の三要素という話から出てきているわけなので、「学ぶって何なのか」ここに立ち返ってちょっと考えてみました。学ぶというのは、「自分の能力を高める活動」と私は考えました。ただ、その時に外部と情報を色々やり取りする。具体的には授業を受けるとか、自分で勉強するとか調べるとか。あとは人々と協働するということも入ると思います。ただ、ここでひとつ注意したいのは、この人々と協働するというのは学ぶことの全てではなくて、ひとつの要素であるということです。では、そういう「学ぶ」ということを考えた上で私が授業をどんな感じでやっているかということに触れます。開成では、授業の内容ややり方は、授業の担当者に任されています。私は講義形式で授業をすることが多いですが、頭をいかにアクティブにさせるかということを念頭に置いて進めています。グループ発表やグループレポートをやらせることもあります。ただ、宿題や補講や講習をがんがんやっているかと言うと、決してそんなことはないです。この写真は授業の風景ですけれども、こうやってもくもくと授業を受けているのは、果たして主体的ではないのでしょうか。頭はフル回転かもしれません。これは、グループでスマホを使って自由に調べていいという形でやっているのですが、この中で一体誰が一番主体的に学習をしているのか、正直なかなか分かりません。

指示待ち勉強の卒業

それから「指示待ち勉強」ということが先ほど出てきましたが、これは要するに自分にとって何が必要なのか、どのように勉強を進めるかということ、自分で決めることが大

切だということです。そういうメッセージは、僕は日々発信するし、そういう空気感を何とか作っていきたいと思っています。この写真は口をぽかっと開けて、餌を入れてくれるのを待っているひな鳥。最初はこういう子が多いです。これをどうやって自分で餌を捕れる、狩りができる人間に変えていけるか。そういうふうに成長させられるか。これが大きなポイントだと思っています。ですから、あんまり親切に宿題を出しすぎるのは、自分で考えるチャンスを奪っていることになるのかなとも思います。

主体性を評価すること

さて、最後のスライドになります。この主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度ということが、フォーラムのこの文章にも出てきているわけですが、もともとは文科省から出ているわけです。この文章は実は、ふたつのことが組み合わさっていますね。主体性を持って学ぶ態度。これは今日話してきたようにとても大切なことだと思います。もうひとつ、多様な人々と協働して学ぶ。これも大切なことであることは間違いないし、できた方がいいです。ただ、「主体性を持って学ぶ態度」の評価というのは、あまり簡単ではない。さきほど、色々な子たちを紹介し、「誰が一番主体的か」を考えましたが簡単には言えない。ところが、この「多様な人々と協働して学ぶ」ということになると、見えることで評価ができそうな気がします。ただ、その観点の評価とこの「主体性を持って学ぶ態度」という観点の評価は、これは別だと思います。ましてやこのスライドの一番上を書いてある「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価とは、決して一緒ではない。我々は見えることでしか評価ということはできないのだと思いますが、それが本当に評価したいことの評価になっているのか。そこら辺は気を付けていく必要があるのかと思います。ちょっとまとまりのない話になってしまいました

が、以上を以って私のご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

檜田豪利特任教授(司会)：

有山先生、ありがとうございました。先生方へのご質問につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

開成における生徒の主体性

開成中学校・高等学校
有山 智雄

[2] 主体性という言葉で思い浮かんだこと

文部科学省

・「主体性を持って多様な人々と協働して
学ぶ態度」

・開成 「自主 自律」
「自主性」(＝主体性)
は昔から大切にされてきた

[1] 開成はどんな学校か

- ・1871年創立
創立147周年
- ・中高一貫
- ・私立男子校
中学300人
高校400人



校長のスライドより

自主性、自律性

- ・楽しい時間が自主性、自律性
を育む
- ・なぜなら積極的にものを考え、行動
する事が出来るから

このイメージが強い？



東大合格日本一 1982年から37年連続

校長のスライドより

自己肯定感、自信の源泉

- ・自主的行動、自律的行動で得た達成感
 - ・与えられたものではなく、自分で自主的に選んだ事柄を
 - ・自分で考え、困難に遭遇しても、自律的に活動して
 - ・困難を乗り越え、成果に到達する事が出来た

開成が大切にしているもの

- ・開物成務
- ・ペンは剣よりも強し
- ・質実剛健
- ・進取の気性と自由の精神
- ・自主自律



「自主性」の開成での使われ方

- ・生徒の自主的な活動
→運動会、文化祭、多様な部活、同好会 etc.
- ・自分で勉強する ≡「主体性を持って学ぶ態度」
→指示待ち勉強の卒業
- ・自主的な進路選択（やりたいことをやる）
→自分が何をするのかを自分が選んだ価値基準で決める

[3] いくつかの事例



達成感が
自己肯定感、自信
の源泉となる

運動会



文化祭 2日間で3万人来場



運動会

- 8色対抗（高校はクラス対抗）
- 半年以上かけて準備
- 下級生の指導は高3に任せる
- ルール決めは生徒に任せる
- 審判は生徒に任せる
- 教員は見守る（手や口を極力出さない）

ジャグリング部 実は強豪



折り紙部



手作り野球盤 (有志の参加団体)



新たな同好会が次々できる理由

・「やりたいことはやったほうがいい」

というメッセージの発信, 空気感の醸成

・顧問さえ見つければ同好会はつくれる

→教員は背中を押す

・挑戦する仲間を見ている

・好奇心旺盛な仲間がたくさんいる(2100人+OB)

部活, 同好会



誰が一番「主体的」?

・野球部

・ボート部

・エコカー同好会

→評価は簡単ではない

ボート部

- ・伝統の部活
- ・筑波大附属高校との対校戦(45勝45敗)
- ・高校選抜大会
全国4位(H29年)



個人



エコカー同好会

- ・「エコランに出たい」
- ・同好会を設立
- ・ペン剣基金で
資金調達



Aくん

- ・地質マニア
- ・研究者にも積極的に
コンタクト
- ・珍しい化石発見
- ・難関推薦枠獲得
(各校1人)



Bくん

- ・開成中学 あまり目立たず
- ・開成高校 成績トップクラス
- ・「自分で勉強するやり方がわかった」
- ・東大 文Ⅰ→法学部
- ・国土交通省

「学ぶ」とは？

自分なりに考えた「学ぶ」

- ・外部と情報をやりとりし、
自分の能力を高める活動

→授業を受ける, 自分で勉強する, 調べる,
本を読む, 人々と協働, 発信する..., 考える

Cくん

- ・開成在学中
「優等生でもない(むしろ劣等生だった)」
- ・開成→東京医科歯科大学 本人談
- ・大学在学中にインターネットとコミックカルチャーを組み合わせた仕事を始める
- ・大学6年の時に仕事に専念
- ・現在, 代表取締役社長

授業

- ・内容, やり方は担当者に任される
- ・講義形式の授業が中心か
 - ◆ 脳をいかにアクティブにさせるか
- ・グループ発表, グループレポートなどもあり
- ・宿題は多くない
- ・補講は多くない
- ・講習は多くない

誰が一番「主体的」？

- ・Aくん 地質部での積極的な活動
- ・Bくん 「勉強のやり方がわかった」
- ・Cくん コミックカルチャーの会社を起業

→評価は簡単ではない

指示待ち勉強の卒業

何が必要なのか, どのように勉強を進めるのか, 自分で決めることが大切

メッセージの発信, 空気の醸成

宿題こなす勉強

→

自分で勉強



[4]まとめ

主体性の階層構造

- ・授業などの学習場面における主体性
- ・学習計画を立てる上での主体性
- ・生き方, 進路決定などにおける主体性

A 主体性を持って

多様な人々と協働して学ぶ態度

$A=B+C$

B 主体性をもって学ぶ態度 → とても大切
C 多様な人々と協働して学ぶ→できた方がいい

- ・Bの評価 は簡単ではない
- ・Cの評価 と Bの評価 Aの評価 は別

ご清聴 ありがとうございました



2018.5.21

開成における生徒の主体性

開成中学・高等学校教諭 有山智雄

〔１〕開成はどんな学校か

- 1871年創立 創立147周年
- 中高一貫の男子校 中学300人 高校400人
- 東大合格者数日本一（1982年から37年連続）
- 「開物成務」「ペンは剣よりも強し」「質実剛健」「進取の気性と自由の精神」「自主自律」

〔２〕主体性という言葉で思い浮かんだこと

- 学校教育法（H19） 「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」
- 開成 「自主 自律」
「自主性」（＝主体性）は昔から大切にされてきた
 - 生徒の自主的な活動 （運動会，文化祭，多様な部活，同好会 etc.）
 - 自分で勉強する ⇔ 「主体性を持って学ぶ態度」
→自分にとって何が必要で，どのように勉強を進めるのか，自分で決める
 - 自由な進路選択 →自分が何をするのかを自分が選んだ価値基準で決める

〔３〕いくつかの事例

〔４〕まとめ

- 授業などの学習場面における主体性
 - 学習計画を立てる上での主体性
 - 生き方，進路決定などにおける主体性
- 「学ぶ」とは？

現状報告 4：東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授

宮本 友弘 氏

〔講師紹介〕

樫田豪利特任教授(司会)：

最後の現状報告になります。現状報告 4『東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題』、東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授宮本友弘先生、よろしくお願いいたします。

宮本友弘准教授：

東北大学高度教養教育・学生支援機構の宮本と申します。今日は東北大学の AO 入試において、主体性評価がどういった具合に行われてきたか、あるいはどんな課題があるかについて報告したいと思います。皆様のご興味はもしかするとこれからの一般入試での主体性の評価にあるかとも思うんですが、私としましてはまず、東北大学の AO 入試でどういった主体性評価がなされてきたかということ、改めて見直すことによって、一般入試における主体性評価の何かヒントが得られるのではないかと考えまして、こういったテーマでお話させていただくことにしました。どうぞよろしくお願いいたします。

まず本日の内容なんですが(スライド 2)、大きく 4 つのことについてお話をさせていただきます。まず私は専門が心理学でして、先ほど西郡先生の発表でも少し触れたかと思うんですが、心理学の観点から主体性ってどういうことなのかについて、少し説明させていただきます。次に、本学の AO 入試における主体性評価の現状、続きましてその課題、最後にまとめということをお話をさせていただきます。



心理学からみた主体性とは

それでは始めます。まず主体性についてですが、これは心理学的に考えますと、何が重要になってくるかと言いますと、個人の行為とか行動の原因ってというのが、どこにあるかっていうことなんですね。すなわちこれ(スライド 3)を人と見てください。この人が何か行為をする時、その原因はどこにあるのか、起点はどこにあるのかを考えます。その際、従来は原因は人の外部にあって、外部からの働きかけで、ある行為、行動が起きるという考え方がありました。具体的に言いますと、それは学習という側面におきましては、条件づけというようなことで知られています。さらに、学習に関係するところとしましては、意欲では、外発的動機づけとなります。これらのことについては、本日ご来場いただいている先生方も、学生時代に教職科目で勉強なされたかと思います。しかしながら、こういった外部の原因だけじゃ、人間の行為とか行動を説明できない。そういうことがありまして、やはり人間の中に行動の源泉となる原因があるんじゃないかと。そういう見立てが重要というような考え方になっていきました。学習面で言いますと条件づけといった外部の働きかけよりも、認知の働きが重要であると。

あるいは、意欲でしたら内発的動機づけと言われるものが大事だというようなことになりました。大きく人間観として、外に原因を求めていく場合は他律的というような言い方をします。それに対して、中に原因を求めていく場合を自律的と言います。心理学におきましては、この自律的であるということが、イコール主体ってことなんです。すなわち、行動の起点となるのが個人の中にあるよってというような考え方です。

じゃあ、そもそもその個人の中の大きな起点って何かと言いますと、意志なんです(スライド4)。それはどういったものかと言うと、心の中心にある自我の働きによって、その意志が生じる。もっと言えば、様々な認知や、あるいは内発的動機づけ、そういったものと統合するものが自我という考え方なんです。この自我の働きのうち、主体性と関連することを言った人が誰かと言うと、エリクソンという学者さんなんです。フロイトの弟子なんですけれども、彼はアイデンティティっていう概念を出しました。これは自我同一性っていうんですけれども、どういうことかと言いますと、まず、これは青年期の発達課題で、抽象的に申し上げますと、児童期までの自己の見直しと再構築ということなんです。ちなみに児童期は勤勉性が発達課題です。自我同一性を簡単に言いますと、自分は〇〇だという感覚です。ここでいう自分が自我、〇〇だというのは、〇〇と同一だという意味で、自我同一性となります。自分は何であるかっていう感覚にはふたつの側面があります。ひとつは今現在の自分のまとまり感です。多様な自分がいるんですが、それらをまとめて、自分はこうだという自己定義なんです。もうひとつが、実は進路とかに関係してくるんですが、過去と現在と未来の自分の一貫性なんです。自分が時間的にどうつながっているかということで、自我同一性の側面として非常に重要になってきます。この自我同一性が確立されますと、自己基準による決定ができる

ようになります。つまり、自分は〇〇だから、△△をするんだというようなことになります。例えば僕は医者を目指すから、じゃあ東北大の医学部を目指すんだというように、そういう自己基準による決定が生まれるという仕組みです。

さらに最近、アイデンティティっていうのは個人の単独の作用ではなくて、他者とのやり取りによって自分の意味が明確になると言われています(スライド5)。例えば、お母さんが最初から母親アイデンティティがあって、子どもを産むのではなく、産んだ後に、子どもとのやり取りの中で母親としての感覚を強めていく、そういうような考え方なんです。従いまして、最近高大接続改革の文脈で言われている学力の三要素の中での、この主体性、正式には主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度の中に込められている協働っていうのは、こういった相互作用の要素も含み込んでいる概念なんだというふうに、私は解釈しております。さて、ともあれこういったアイデンティティを持つとどうなるかっていうと、自己基準ができますので、初めての場面や未知の場面でも慌てなかったり、うろたえたりしません。さらにここが重要なんですが、今と将来とのつながりっていうのを考えるので、キャリア展望が非常に明確になっていくということが特徴として言えます。これが今、心理学的に見た時のひとつの主体性の考え方です。

東北大学 AO 入試における主体性評価の現状

次に、以上の考え方を踏まえながら、東北大学の AO 入試についての現状について見たいと思います。まず、東北大学が求める学生像とは何かと言うと(スライド6)、アドミッションポリシーに掲げられているんですけれども、ひとつはやはり、研究大学として研究者をぜひ目指してほしい、研究者を目指すんだというのが第一義的にあります。次に、職業人としても、少し一段高いレベルの職業人を

目指してくださいと.さらに,高水準の学力.
この3点が,特に研究者を目指すということ
と,高水準の学力ということが,アドミッ
ションポリシーの中核を成しています.そも
そも研究者を目指すんだったら,主体性ない人
っていない,主体性のない研究者はいない
ということです.さらに,研究大学としての入
学後の学習には,学力は大前提となります
ので,一般入試とAO入試で求める学生像の基
本は,ほぼ同じということなんですね.基本
は同じということです.この点におきまして,
主体性を含み込んだ学力の概念が,すでに内
包されているというのが東北大学のアドミ
ッションポリシーです.

続きまして,じゃあそう言った中で一般入
試とAO入試は何が違うのか,AO入試のコ
ンセプトは何かと言うと,そのひとつが第一
志望ってということなんですね(スライド7).
AO入試は,第一志望者のための特別な入試
機会であるということなんです.そのため,
AO入試では,高校生が思慮すべきキャリア
展望を求めていくことになります.そうしま
すと先ほども申し上げたアイデンティティの
ひとつの側面と非常に合致することでもあ
るんですね.2番目は学力重視.これは,一般
入試と同等以上の水準の学力を求めており
ます.具体的には高校で身に付けるべき学力を
要求しているということになります.

AO入試において,そういった側面を評価
することもアドミッションポリシーに掲げて
います(スライド8).学力と,さらにプラス
アルファの部分があるんですが,学力の部分
で基礎知識,あるいは思考力,表現力を問い,
さらにプラスアルファの部分では,主体的学
習意欲等々を評価しようとしています.この
ように,もうすでに今の段階で学力の三要素
をアドミッションポリシーの中に含み込んで
おります.そのために,具体的にどういう道
具立てをしているかと言いますと,まずは,
AOⅡ期は11月にやるのですが,学力に関し
ては独自の筆記試験で,プラスアルファの部

分は出願書類や面接で見ます.2月に行われ
るAOⅢ期では,学力の部分はセンター試験
で,プラスアルファの部分はAOⅡ期と同様
の方法で見えていくというのが基本的な道具立
てとなっております.具体的に出願書類はど
ういったものがあるかと言いますと,調査書,
志願理由書,活動報告書,志願者評価書とい
うものからなっております.

実際に平成30年度入試は,どのように行
われたか言いますと,まず,AOⅡ期につい
ては(スライド9),一次選考と二次選考があ
るんですが,文学部,医学部医学科,保健学科,
歯学部では必ず一次選考を行います.その際,
歯学部以外は出願書類も評価します.表の色
が付いている点数は一次の結果を二次でも利
用するという意味です.一次選考で筆記試験
を課す学部ではすべて,その結果を二次選考
で利用しています.一方,理学部,工学部,
農学部の一次選考にある丸が何かと言うと,
ある倍率を超えたら,一次選考を実施するの
ですが,いずれも出願書類で判断するという
意味です.二次選考では,全学部で面接試験
を課します.また,学部のアドミッションポ
リシーによって出願書類の使い方が違うん
ですけれども,単独でこのように配点するパ
ターンと,面接点に組み込んでいくパターンが
あります.

AOⅢ期については(スライド10),倍率に
よっては一次選考を行います,その際は,
センター試験の結果を利用します.一部の学
部では出願書類も活用しています.二次選考
では,AOⅡ期と同様に全学部で面接を実施し
ます.また,出願書類も,面接点に含めるパ
ターンと単独で配点するパターンがあります.

さて,学力重視ということは,我々は学生
にどういう学習行動を求めているかという
(スライド11),一般入試との連動した受験
行動を期待しているんですね.すなわちAO
入試の準備が,一般入試にも有効に機能する
ということです.11月にAOⅡ期があります.
その後にセンター試験.それでAOⅢ期,前

期日程、後期日程と続くのですが、AO を受験される方には、前期日程、あるいは後期日程までも視野に入れた計画的な勉強をして臨んでいただきたい、それだけ強い意志を持って、東北大に向かっていただきたいということを、我々は求めています。

こういった一貫した行動のひとつの指標として(スライド 12)、AO 入試で不合格で、そのまま一貫して東北大を志望し、一般入試を受けていただいて、合格した人の人数があります。最近が増えていまして、200 人を超えるというような状況で動いています。

さらにこうして選抜した方々の入学後の学習行動として(スライド 13)、2009 年、2011 年、2013 年の 2 年ごとにそれぞれ入学年度別に 4 年間の GPA を見ました。共通科目と専門科目に分けています。共通科目とは、1、2 年生で学ぶような科目です。こうして見ていただくと分かるように、前期日程で入ってきた方に比べて、AO で入ってきた方の成績は、共通科目、専門科目に関わらず高い。これは統計的にも有意になっております。このように、AO で入ってきた方は、入学後も非常に一生懸命勉強をしているというような状況が示唆されております。

現状まとめますと(スライド 14)、我々は AO 入試の中で主体性をどう評価してきたかと申しますと、まず、コンセプトにおいて第一志望、学力重視を強調していることです。先ほど述べた心理学的なアイデンティティ論から見ると、第一志望ということはアイデンティティを問うていることであり、まさに、主体性を見ているということなんですね。また、学力重視についても、主体的な学習行動が反映されていないと、一定水準以上の学力って得られないんですね。実際、学習面での意欲と、学力の相関関係は非常に高いことが知られています。道具立てとしましては、先ほどご覧になったように筆記試験、センター試験、出願書類、面接から多面的、総合的に評価しております。最後に成果につきまして

は、先ほど GPA を見たように、入学後の学習にも主体的に取り組んでいるということが、示唆されている状況です。

主体性評価の課題

課題なんですけれども(スライド 15)、ひとつは、出願書類です。やはり出願書類の評価っていうのは難しいですね。そもそも主体性がどの程度反映されているのかと。西郡先生のご発表にもございましたように、成果を見ていくのか、プロセスを見ていくのかというのは、非常に大きな問題です。そのあたりについては、アドミッションポリシーに照らして、今のところそれぞれの学部で判断していただいております。さらに、評定者側の信頼性ですね。どれぐらい、評定がぶれずに一致していくのかということなんです。この点につきましては、私どもでも各学部さんの依頼を受けて統計的に分析したりして、色々とチェックしております。詳しいことは言えないんですが、一生懸命そのことに対しては、腐心してきたという歴史がございます。また、ポートフォリオはうまくいくのか。最近、e ポートフォリオが広まりつつあります。私は、5 年前、京都のポートフォリオ評価を非常に先導されている先生がご指導している高校を訪問したところ、同校の担当教員の方から、ポートフォリオ評価がうまくいっている高校はないんだと聞きました。非常に驚きまして、どうしてですかと聞いたんです。そうしましたら、まず高校生が資料を蓄積できないと途中でなくしちゃったりするので、蓄積ができないとおっしゃっていました。また、もう一つ理由として、教員の共通理解がないと難しいということで、ある特定の先生は一生懸命やっているけれども、ある先生がやっていないといった状況だと駄目だと。この共通理解を得るのもすごい大変なんだと。だからなかなか、成功事例は生まれないということでした。じゃあそれを電子化すれば解決するのかと。ある一定の、作業上の省力化

は行われるかもしれませんが、根本的な解決になるかどうかというのは、ちょっとゆっくり見ていった方がいいのかなと思います。さらに、これはポートフォリオの件とも関係するんですが、私どもの入試では、できるだけ高校側の負担をかけないようにと考えてきました。出願書類におきまして、あまり書く量はないかと思います。そういった負担が、今後出願書類の扱いが大きく変わってきた時にどれくらい変わっていくのか。それが非常に気になっているところです。

2 番目の課題なんですが（スライド 16）、波及効果です。波及効果というとプラスをイメージしちゃうと思うんですけど、実は学習行動を方向付けづける影響には、ネガティブな側面もあるんですね。どういうことかと言いますと、評価に行動を合わせすぎてしまい、行動が形骸化してしまうということです。簡単に言ってしまうと、これは多くの先生方が、今までの発表でも言われていたんですが、「主体的である」と評価されるような行動をしてしまうことです。そういったことになりかねないんですね。それは非常に、本来の主体性の評価の妥当性が低下していくお話になっていきます。もうひとつは、お膳立てしすぎちゃうことの弊害なんですね。これは、速水先生という、仮想的有能感という言葉で有名な先生なんですが、その方が言っていた疑似内発的動機づけが危惧されます。教師が一生懸命お膳立てをする、色んな教材を準備する、色んな授業準備をすると、その時は非常に意欲的にやるんだけど、教師がその努力を辞めた瞬間、パタッとやらなくなってしまうといった状態を言っています。そういう状態は一見主体的なんですけれども、実はさっき言った自律か、他律かって考えた場合は、他律的なんですね。決して自律的にはなっていないと。そういう波及効果が非常に懸念されるところでございます。まとめなんですが（スライド 17）、やはりこれまでのご発表もありましたし、私も改めて

主体性ということを考えてみましたところ、その定義、測定、評価は、そもそも容易ではありません。しかし、そうであっても、重要なことは、結果に対して不合格者が納得できるかです。そういうような入試をやっていかなくてはいけないわけなんですよ。この書類のどこが駄目なのか、一体、何が評価されているんだ、といったあたりをしっかりと分かるようにすることが重要かと思います。この点については、主体性の評価が一般入試にも導入された場合、ますます重要になっていくかと思います。これは多少手前味噌なところもありますけれども、東北大学が求める学生像。すなわち研究者を目指している研究者志向のある方には、もう主体性の要素は含まれています。ですので、この意味で主体性は、これまでの AO 入試で評価されていましたが、各学部の先生方と入試の時にいろいろお話をすると、詳しいことは言えませんが、皆さんすごくこの点を大事にされています。これは事実です。最後に今後、東北大学としましては AO 入試の定員を全募集定員の 30% まで拡大する方針でございます。研究大学として求めている学生像、アドミッションポリシーの基本は変わりません。ですので、具体的な方法とか、そういったところを先生方は気になるかと思いますが、アドミッションポリシーに込められた我々の意図やメッセージをよく読み取っていただければと思います。少しオーバーしました。どうもありがとうございました。

（拍手）

檜田豪利特任教授(司会)：

宮本先生、ありがとうございました。これまでのご講演に関するご質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

これから、次の討議に向けて舞台の設定等を行いますので、15 時 50 分まで休憩とさせていただきます。その間に、係の者が会場内

を回って質問票を回収いたしますので、質問票は、係の者にお渡しください。ご協力の方、よろしくお願いいたします。それではこれから 50 分まで休憩時間とさせていただきます。

第28回東北大学高等教育フォーラム 2018.5.21

東北大学AO入試における 主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
准教授 宮本友弘



主体性とは？②

■個人の「意志」に基づく行為 自我の働き
アイデンティティ(自我同一性) by エリクソン

- 青年期の発達課題
児童期までの自己の見直し・再構築
児童期の「勤勉性」が土台にある
- 「自分(自我)は〇〇だ(〇〇と同一だ)」という感覚
現在の自分のまとまり
過去, 現在, 未来のつながり
- 自己基準による決定
「自分は〇〇だ, だから△△をするんだ!」

本日の内容

1. (心理学からみた)主体性とは？
2. (AO入試における主体性評価の)現状
3. (AO入試における主体性評価の)課題
4. まとめ

主体性とは？③

■他者との相互作用の重要性

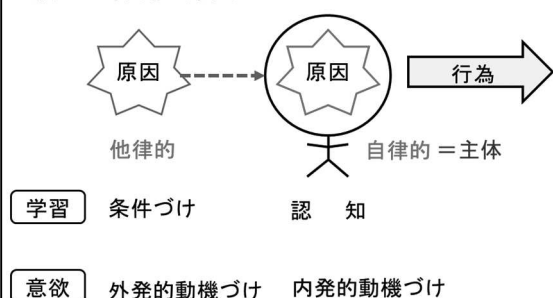
- アイデンティティの確立は個人の単独作用ではない
他者とのやりとり(相互作用)によって
自分の意味(役割)が明確になる

⇒ 「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」

⇒ 初めての場面や未知の問題にも慌てない, うろたえない
キャリア展望

主体性とは？①

■個人の行為の原因



現 状①

■東北大学が求める学生像

- 21世紀の人類社会の課題に対し研究者 として真剣に取り組み優れた貢献をしようとする志
- 豊かな学識とリーダーシップを備える職業人 として社会の発展に優れた貢献をしようとする志
- 本学学士課程を受けるにふさわしい高水準の学力

⇒ そもそも、「主体性」の無い研究者はいない
「研究大学」として入学後の学修に学力は大前提
一般入試とAO入試で求める学生像の基本は同じ

現 状②

■東北大学のAO入試の特徴

①第1志望者のための特別な入試機会

⇒ 高校生が思慮すべきキャリア展望を要求

②学力重視:一般入試と同等以上の水準の学力

⇒ 高校で身に付けるべき学力を要求

現 状⑤

■AOⅢにおける評価の実際(H30年度入試)

	一次		二次			
	センター	出願	センター	筆記	出願	面接
教育学部	○		550		面接点含	100
法学部	○	○	900		100	300
経済学部	○		900		面接点含	250
医学部医学科	○	○	1100	250	面接点含	250
医学部保健学科	○	○	900	200	面接点含	200
歯学部	○		850		面接点含	200
薬学部	○		950		面接点含	100
工学部	○	○	900	100	100	100
農学部	○		900		50	200

現 状③

■AO入試における評価のための道具立て

学力(幅広い基礎知識や論理的思考力、表現力・コミュニケーション能力など)

+

α(豊かな人間性、想像力・発想力、倫理性、主体的学習意欲と協調性、学問に対する好奇心など)

	学力	α
AOⅡ期(11月)	独自の筆記試験	出願書類 面接
AOⅢ期(2月)	センター試験	

※出願書類

調査書 志願理由書 活動報告書 志願者評価書

現 状⑥

■一般入試との連動

一般入試の準備がAO入試にも有効に機能

11月	1月	2月	3月
AOⅡ期	センター試験	AOⅢ期 前期日程	後期日程

一般入試までを視野に入れた計画的な勉強

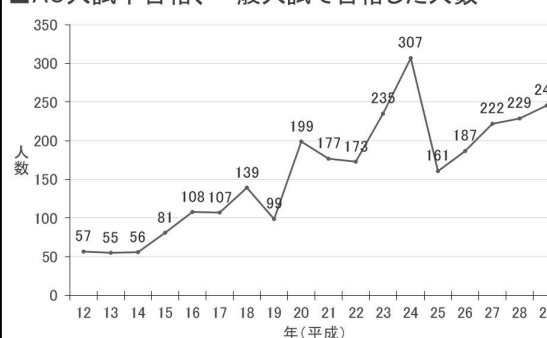
現 状④

■AOⅡにおける評価の実際(H30年度入試)

	一次		二次		
	筆記試験	出願書類	筆記試験	出願書類	面接試験
文学部	200	100	400	面接参考	200
理学部		○	200	面接点含	100
医学部医学科	600	150	300		150
医学部保健学科	400	150	200		200
歯学部	400		800	面接点含	200
工学部		○	240	210	150
農学部		○	400	300	300

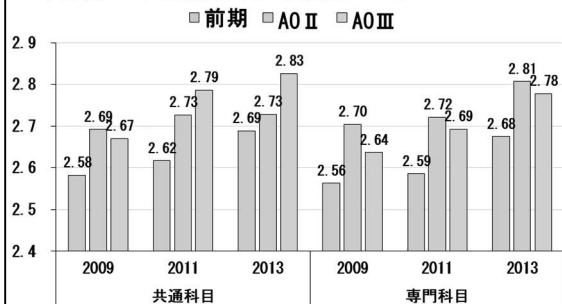
現 状⑦

■AO入試不合格、一般入試で合格した人数



現 状⑧

■卒業までの成績(入学年度別GPA)



資料提供: 東北大学教育評価分析センター

課 題②

■波及効果

- 学習行動の方向づけのネガティブな側面
評価に行動を合わせすぎてしまい行動が形骸化
「主体的である」という行動をする
⇒ 評価の妥当性が低下
- 「おぜん立て」しすぎることの弊害
“疑似内発的動機づけ”(速水, 1998)
教師の「おぜん立て」によって意欲的にやる
⇒ 一見「主体的」だが、実は「他律的」

現 状⑨

■「主体性」をどう評価してきたか？

- コンセプト(第1志望, 学力重視)
そもそもアイデンティティを問うている
キャリア展望
学力には、主体的な学習行動が反映
- 道具立て
筆記試験, センター試験, 出願書類, 面接
⇒ 多面的・総合的評価
- 成果
入学後の学修にも主体的に取り組んでいる

まとめ

- 「主体性」の定義, 測定, 評価はそもそも容易ではない
⇒ 不合格者が納得できるか
- 東北大学が求める学生像(研究者志向)には「主体性」の要素は含まれている
⇒ この意味での「主体性」は、これまでのAO入試で評価されてきた
- AO入試募集人員の拡大方針は堅持
⇒ 研究大学としてのアドミッションポリシーの基本は変わらない

課 題①

■出願書類の評価

- そもそも「主体性」が、どの程度反映されているのか
成果か, プロセスか
評定者の信頼性
- ポートフォリオはうまくいくのか
高校ではポートフォリオ評価はうまくいかない(?)
資料を蓄積できない, 全教員の共通理解
⇒ 電子化で解決する(?)
- 高校側の負担
できるだけ高校側の負担をかけないようにしてきたが。

ご清聴ありがとうございました



討議—パネルディスカッション—



倉元直樹教授(討議司会) :

質問票が非常に多数寄せられています。ありがとうございます。おそらく最終的に全て触れることはできないと思いますが、まだちょっと整理に時間がかかっておりますので、55分から始めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

もうしばらくお待ちください。

樫田豪利特任教授(司会) :

ご連絡します。基調講演の西郡先生と、現状報告されました4名の先生方は壇上へお上がりください。

樫田豪利特任教授(司会) :

皆様、お待たせいたしました。それではこれより討議に入らせていただきます。ここからは担当の者にマイクをお渡しいたしますので、以後運営をよろしくお願いいたします。

倉元直樹教授(討議司会) :

こんにちは。討議の司会を担当いたします、東北大学の倉元と申します。よろしくお願いいたします

します。

秦野進一特任教授(討議司会) :

同じく司会を担当いたします、秦野と申します。よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授(討議司会) :

進め方ですが、最初にまずご登壇いただいた先生方に、ご講演の補足、言い足りなかったことがあれば、お願いをしようと思います。その間に非常に、本当にありがたいことに、たくさんの質問をいただいておりますので、若干整理をして、…残念ながら全てのご質問を取り上げるわけにはいかない状況ではございますが、…ディスカッションのきっかけになるようなご質問から、いくつか取り上げさせていただいて、基本的に壇上の先生方にご討議いただくというような形で進めたいと思います。

最初に、5名の先生方の基調講演、それから現情報、どうもありがとうございました。

私自身は一応主催者の一人として、この企画の狙いがございました。その狙いと申しますのは、いわゆる高大接続改革の中で、「主体性」と

ということばの解釈が色々であるという状況があるわけですが、それを「評価する」という方向になっています。しかし、そもそも『主体性』って何なんだろう」という議論をしてきた記憶がないわけです。

何となく、伝統的な入試における「選抜尺度の多元化」…すなわち、「学力試験以外の方法を取り入れなさい」というのは、文部科学省の本当に伝統的な政策でして、…その流れの中で、今、「主体性の評価」という課題が起きている。例えば、調査書というものを取り上げますと、「調査書を評価しなさい」という政策は、少なくとも昭和46年の「四六答申」ではかなり強く言われていましたし、戦後すぐ、GHQ 主導の教育改革では、選抜方法の三本柱の一つと位置付けられていました。ただ、調査書の活用がなかなか実現してこなかったのには理由があります。それは、例えば、ポートフォリオにすれば可能だとかそういうことではなくて、もっと根本的な原因があります。その議論は抜きにして、「とりあえず『主体性』を評価しましょう」となった時に、このまま突っ走っていいのかな、という疑問が浮かんできました。一度、「主体性」というものについて、入試という視点から問い直してみよう、というのが、このフォーラムのきっかけでした。そういう意味では、非常に貴重な材料をいただいたんじゃないかなと思います。

私自身の理解が正しいかどうかは別にして、まず、西郡先生は大学の立場として、まず「主体性」というものに対する考え方が様々ある中で、基本的には「行動を評価するか」「プロセスを評価するか」という視点を提示されました。さらに、入試で「主体性」を評価する時に、高校教育に与える影響を考慮されて、可否のボーダー層に対して、重点的にいわゆる「主体性の評価」を行うというような仕組みを考えておられる。そういうようなお話がございました。

次の千葉先生は、極めて環境的には恵まれていない中の学校…おそらくその地における大学進学を考えられる唯一の高校…という条件の中

で、様々な取り組みをしながら、先生方を育て、さらに子どもたちの活動を様々な形で「自主性の実績」につなげていく努力をしながら、進学実績も上げてきたというようなお話だったかと思います。

石井先生は、私ども仙台から見て遠い地ですが、四国の方でやはり地方の学校という位置づけの中で行われている様々な活動のうち、何が「主体性」に結びついているのかというのを、もう一度先生方の中で整理をしていただいた。

それから有山先生は、非常に対照的に東京の有名私立進学校のお話です。子どもたちは指示待ち勉強の連続の中で入ってくるんだけど、高校に入ってから極めて生き生きと「主体的な活動」をしている。その中で「主体性の評価」というものをどうするのか、というようなお話だったかと思います。

東北大学の立場として、宮本先生は心理学の議論から始まって、自我同一性の理論の中で、「主体性」を考えた時に、第一志望であるということの意味合いを、自我同一性の中の「キャリア展望」に位置付けると、実は、現在の入試の仕組みの中ですでに「主体性」が測られているのだというようなご立場での議論だったかと思います。

話が長くなってしまいましたが、それぞれの先生方、一言ずつ何か付け加えることがあればお願いしたいと思います。手前の西郡先生から、順番をお願いします。

西郡大教授：

私の講演が終わった後に、各高校の先生方、それから宮本先生からのお話を聞きながら、本当は主体性って評価しない方がいいんじゃないかなというふうに何となく感じるところがあります。本当に評価したいものは、すべきではないというふうに言った方もいますけれども、そういったことが個人的にはこうやっぱりそうなのかという、その主体性というものの自体が本当に育成することができるのかということも含めて難しい課題であるだろうなと感じたところです。

とは言っても、政策的に進められているところで、どこを着地点というか妥協点、妥協点という語弊があるかもしれませんが、どこに落としどころを見つけるのかって言うのは、本当にこういうところで皆様の知恵も出し合いながら、建設的な議論が必要になってくるのかなと思います。この主体性というところの評価っていうのは、各個人がそれぞれの思いを持っているので、どこですり合わせをして、それを評価するっていった時に、どうすべきなのかっていうところを、この後の議論を通して少し考えて帰りたいと思います。

倉元直樹教授(討議司会)：

千葉先生、お願いします。

千葉栄美教諭：

では、1点だけ補足をさせてください。私が発表した田名部高校の事例を見て、ザ・プロフェッショナルとかすごいなって思われた方がいるかもしれませんが、青森県の高校はどこでも同じように、もしくはもっとすごいことをやっています。地方の高校は恐らく、圧倒的な少子化の中で学校再編と、そして教育改革の波にもまれながら、でも、誰も取りこぼさないっていう教育を必死でやっているのだと思います。特別な事例ではないということだけ、申し添えたいと思います。以上です。

倉元直樹教授(討議司会)：

有山先生、お願いします。

有山智雄教諭：

主体性の評価ということは、なかなか難しいのではないかとすることは私の話の中でも述べたのですが、その何かを評価するということは、やはり基準を持ち込むということになるわけです。「A 君が主体的だ」ということになったら、一方で「主体的だ」と言ってもらえなかった子がいるわけで、そういう子が何かちょっとしょげ

ちゃうようなことがあったらつまらないなという気がします。やはり、評価を持ち込むということで、今みんな割と生き生きやっているところに、何か枠をはめてしまうようなことがあっては、これは本末転倒になりかねないなと。きちっと評価をしてあげるっていうことは必要かもしれないけれども、それがマイナスに働かないようにきちっと気を付けることが必要なのかなということ、皆さんのお話を聞いていて少し思ったりしたので、補足させていただきます。

倉元直樹教授(討議司会)：

石井先生、お願いします。

石井裕基教諭：

はい。特に補足をするようなことはないんですけど、結論から言って評価すべき、つまり内面のことですので、それを評価することっていうのは非常に難しいということしか言えませんねということが結論です。やはり、みんなが納得できる方法、これをみんなで考えられたらなというふうに思っています。以上です。

倉元直樹教授(討議司会)：

それでは宮本先生、お願いいたします。

宮本友弘准教授：

はい。AO 入試の中では、ある程度主体性っていうことについては、うまく東北大の場合は評価できていたのかなという気はします。しかし、じゃあ主体性ってなんですかっていうふうに言われた時に明確に定義ができるかというと、なかなか難しいものがあります。いろいろな指標を通していきますので、分析的に捉えるというよりは、全体像で捉えているイメージがあると思います。アメリカだったらそこはホリスティックレビューという方法を用いているわけですね。分析的にいろいろな要素の得点を出すんじゃなくて、全体像で捉えるというようなやり方です。もちろんそれがいいとは限りません。ただ、

そういうような感じで AO ではきめ細かくまだ見られることができたんですけれども、これを一般入試という規模まで広げた時に、同じようなきめ細かい評価ができるのか。コスト的、あるいは技術的なハードルがかなりあるのではないかというふうに、個人的には思っております。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございました。それでは、準備が整いましたので、質問表の中から質問を拾って行きたいと思います。

秦野進一特任教授(討議司会)：

本日、高等学校から3名の先生方に現状報告をしていただきました。お三方とも触れられていたのが主体性を評価するとなった段階で、生徒の行動が影響を受ける。あるいは、意味合いが変わったものになってしまうというご指摘でした。そこで大学の先生お二人に会場からの質問ですが、例えば AO 入試に有利だから、生徒会とか部活動の部長をするとか、そのような動機というのは他律的であると考えられるかもしれませんが、受験合格のために必要であると、自ら価値付けをして行動するとしたら、それは自律的であると言えないでしょうかというのが1点目のご質問。それから同じようにその評価に行動を合わせてしまうということについて、そのようなことを回避するための手立て。あるいは本質的な学びを追求する、生徒を育てていくためのヒント。そういったものはないでしょうかというのが2点目のご質問です。宮本先生と、西郡先生、よろしくお願いいたします。

宮本友弘准教授：

最初のご質問ですが、何かの目的を達成するための手段なんですけれども、そこに自律的に取り組んでいけば、自律的と言えるんじゃないかということなんですけれども、その通りです。ただ、動機づけのことを考えていった時に、内発的なものの場合は、自律、他律と同時に、それが



目的か手段なのかという見方もあるんですよね。その時に、手段ということで自律的にやって行った場合と、目的と一致して自律的にやっているということでは、大学に入った後の学習への取り組みの姿勢に違いが現れる可能性があると思います。次のご質問ですが、自律性を高めていくにはどうしたらいいのかというと、最近の研究では、動機づけは、内発的動機づけと、外発的動機づけの二項対立するものではなくて、両者には連続性があるという考え方なんです。最初は怒られるから勉強する、次は叱られるから勉強する、その次は、役に立つから勉強する、そして最後は面白いから勉強するっていうような、4水準で変化することが知られています。そこで一番決定的になるのは、これは自分にとって価値がある、役に立つっていう思いを抱かせることがすごくいいって言われています。なかなかその先にある、面白いとかそういうことになっていくんですけれども、そこまではたどり着けない。逆に、何か物事を始める時に、面白さで始まるっていうことはあるんですよね。でも、やり始める動機とやり続ける動機って違ってしまっていて、やり続ける動機を持つには、価値を見出すことが大事なんですよね。その意味では、先ほどもある手段として自律的に取り組むっていうことの根本に、そういったことに対して価値をその子が見出しているならば、それは自律的ということができます。以上が心理学的な観点からのお話です。

西郡大教授：

どれぐらいの影響力を大学入試の評価に持たせるかということと、かなり関係してくるのではないかと思います。例えば、配点が1,000点満点のうち、400点ぐらいそういった評価があるとするのであれば、それは致命的な影響力になるかもしれませんが、例えば1,000点のうち30点とか、20点っていうふうなことしか評価しませんよってなった時に、そこでそういった行動が規定されるかというのは疑問です。どの水準まで、どういったレベルまで入試で評価しますよっていうことを表せば、その行動が規定されるのかっていうのは、私自身も何か明確な根拠があるわけではありませんけれども、どれぐらいの影響力を持たせるかっていう位置付けによって、そういった手段のための行動っていうのは、少し変化があるのではないのかなというふうに考えます。

倉元直樹教授(討議司会)：

最初に『主体性』を評価するということを、直接的に明言した時にそもそもの行動の意味が変わってしまうのではないか」という問題がありました。それに関連して、「高校側で生徒の『主体性』を育てる、伸ばすということに関して、どういったことがなされているのか」というようなことに関わるとご質問があります。

私の主観的な話で申し訳ないんですけども、この主体性の評価が導入されるということに関して、高校側は相当困っているんじゃないかという前提があって、ご登壇になられた先生方にも「こういうことで困っていませんか」というような水の向け方で、ご登壇をお願いしました。…すみません、舞台裏を話してしまって申し訳ないんですけども…開成の有山先生は、「いや、特に困ったことってないよ」とおっしゃるんですね。例えば、「私立の東京の中学で、相当この『主体性の評価』」というようなことを看板にして、生徒を集めようという動きが始まっているのではないですか？開成高校も影響を受けてい

るんじゃないですか？」というようなことを言ったら、「いや、そういう話はほとんど聞いたことがない」とおっしゃるわけです。他方、田名部高校では、「主体性を育てる」ということで、10数年来、相当の労力を注いでこられたということがあります。

そういったことを前提にして、田名部の千葉先生と開成の有山先生に、具体的な話でご質問があります。田名部高校のザ・プロフェッショナルの件に関してのお話です。「生徒たちは、どの程度自分たちがやっているのか、接待や準備等は全て生徒にお任せしているのか」というようなご質問ですね。逆に言えば、先生方はどういふふうに関わられているのかということだと思います。もう一つは開成高校の運動会についてですね。「どの程度まで生徒主導なのか、係の立ち上げやメニュー決定等に先生方が関わっておられるのか。教員の仕事は何なのか」というご質問です。それぞれお答えいただければと思います。

千葉栄美教諭：

ではザ・プロフェッショナルですけども、先ほど申し上げたように、一番の問題点はそれを聞きたいっていう生徒が比較的固定化をしていることです。なので、例えば自由にその中からやりたい人が司会とかをやってというふうに言っても、3回連続同じ司会とかっていうことになってたりしています。そうなる私たちはもうほとんど手を加えませんが、新しい生徒が来た場合には、ある程度ルールを敷いてこうやって、講師のところまで迎えに行くんだよとかっていうのは、やはり言っています。それが現状です。

倉元直樹教授(討議司会)：

例えば、講師の先生方を選んで、交渉してっていうのは、生徒さんがやっておられるのか。

千葉栄美教諭：

それは、教員が今のところ行っています。ただ、生徒の中からこういう人を呼んでくださいって

いう声が出ることもあって、今年はそれを実現させます。

倉元直樹教授(討議司会)：

そこまではじゃあ、先生方がやっておられるということですね。では一方開成の運動会に関してはどうでしょう。

有山智雄教諭：

開成の運動会は、生徒は完全に自分たちがやっているというふうに思っています。競技の種目を決めるということに関しても、運動会審議会というものを作って、半年ぐらい前から議論を始める。そういう会議をいつスタートするかというのも、毎年先輩がやっているのを見えますから、いつ頃から始めなくちゃいけないという形で生徒の方でやっていく。それから、やはり結構棒倒しとか騎馬戦とかやっていると、怪我対策ということは非常に大きなテーマになります。このことに関しては、教員の方も色々対策をしてくれ、ということは生徒には話すわけですが、具体的にルールをどういうふうに変えていくかということは、彼らに任されています。もちろん最終的な OK っていうのは教員の側が出すわけですが、彼らはやはり、それが任されているというふうに思っています。そして、そういうものののだということは、先輩たちがやる姿を見て、この次は自分だっていうふうに思っている。そういう形で回っているのかなというふうに思っています。以上です。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございました。石井先生、どうでしょう。観音寺第一では学校が何らかの形で行事を立ち上げて、生徒に任せるといったスタイルのことをやっておられますでしょうか。あるいは、逆に「主体性の評価」というようなことが入ってきたために、そういうことをやらなきゃいけない、というような話にはなっていますか？

石井裕基教諭：

どういう場面があるかということですか。

倉元直樹教授(討議司会)：

それは、おそらく色々だと思いますけれども、思いつくようなことがあれば。

石井裕基教諭：

そうですね、部活動、生徒会活動色々ありますね。生徒会活動についても、生徒が自分たちで考えてやっている場面はあります。

倉元直樹教授(討議司会)：

どの程度、生徒が企画をしているのか、やはり、お膳立てのところは、先生が相当手を加えているのでしょうか、ということを知りたいのですが。

石井裕基教諭：

ちょっと僕は直接関わっていないので、よくは分かっていないんですが。

倉元直樹教授(討議司会)：

ご発表になった「データ解析」のプロジェクトでも結構なのですが。

石井裕基教諭：

例えば和歌山の件でいえば、あれは私が指導したんですけども、最初のきっかけはあれは優勝すれば 20 万円貰えるんですね。

倉元直樹教授(討議司会)：

すみません、もう少し近付けてお話をしてください。

石井裕基教諭：

和歌山の件については、優勝すると 20 万円貰えるので、掃除の時間の時に 20 万円貰いに行こうよというふうに声をかけました。そうして集まったのが 5 人です。ただし、そのテーマが与え

られて、テーマが確か観光客を増やすということだったかな。その観光客を増やすために、観光客を増やして街の活性化だったかな。そのために自分たちが街の中に入って、色々と活動していく中で、あるいはデータを集めて分析をしていく中で、最初のきっかけは確かに賞金を貰おうということだったんですけども、そのうち自分たちで自発的に、主体的に動いて街の地域活性化をしているグループと、何かいつの間にか相談をして、自分たちの考えたアイディアを実現しようというふうに動いています。それはもう主体的に動いているので、きっかけは与えましたが、生徒はそのきっかけをもとに取り組んでいく中で、面白さを感じ、やりがいを感じ、主体的に行動をしていると。7月のお祭りの一角で、いりこグランプリっていう創作料理コンテストを考えたんですけども、それを実現するために漁師さんに話を聞きに行ったり、漁師さんからその材料となるいりこを提供してくれというふうに頼みに行ったりして、実現しようと今生徒たちが自分で動いています。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございました。学校全体というよりも、一部の生徒さんたちの取り組みということですね。その例は。

石井裕基教諭：

それは一部の生徒ですけども、それとよく似た活動というのは、それぞれの場所でやっています。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございます。

秦野進一特任教授(討議司会)：

それでは、もう一度高等学校の先生方に質問ですが、ご発表の中で触れられた点について、もう少し詳しくお聞きになりたいというご要望が来ておりますのでご紹介いたします。千葉先生

には、積極性と主体性はイコールではないというお話がありましたが、具体例を挙げてご説明いただけないでしょうかという点。石井先生は、学びの課程、プロセスを入試で測るというのはどのような評価方法を念頭に置いていらっしゃるのでしょうかという点。それから有山先生には、同じ内容のご質問が何名からか来ていますが、指示待ち型の勉強からの卒業ということについて、もう少し具体的にその指導内容を教えていただきたいということと、宿題をこなす勉強から、自分で学ぶ勉強へと転換させるためにどのような工夫をされていますでしょうかということです。それでは、順番にお願いできますでしょうか。

千葉栄美教諭：

積極性は、まるっきりイコール主体性ではないと思っています。ただ、積極性の中から主体性が出てくることはもちろんありますし、主体的な生徒が積極的であることもあると思います。ただ、それが全くイコールではないということをお伝えしたかったのですが、積極的に例えば何かをやりますかとかって言った時に、恐らくこれをやることは自分は求められているんだろうなと思って、いつも手を挙げる生徒がいます。でも、何回手を挙げて、やっぱり自分で考えてやっていないっていう場面が学校生活で見られる。具体的にと言われると、多分うちの学校でやっているザ・プロフェッショナルであったりとか、係活動であったりとか、文化祭とかの時に見られるのではないかなというお話でした。

石井裕基教諭：

学びのプロセス、過程をどう評価するかということですね。具体的にどういうふうに評価するかということは、正直言って私は分かりません。ただ、例えば定期テストがあったとします。その定期テストが帰ってきた時に、その定期テストを通して私は間違いノートというふうに呼んでいますけれども、そこに何が間違っている

のか。そのテストでどういう部分で間違っているのか。それをきちんと分析させて、それをじゃあ次のテストに活かす、あるいは日々の授業、取り組みにどういうふうに、どういう点を改善して行けばさらに点数は上がっていくのかということを考えさせるということをしています。そういう記録を残しておくことは、必要だというふうに考えています。ただ、一種のポートフォリオというふうに考えられると思うんですけども、ただそれをどう評価するかっていうのは、もし入試でそういう学びのポートフォリオを出すと言われた場合に、私は数学ですが、生徒にその間違いノートを大学に提出しなさいと。評価は大学に任せるというふうに考えます。

有山智雄教諭：

指示待ち型の勉強から、どう脱却するかということ。これは、まるでうちの学校ではみんなが達成できているかのように聞こえたかもしれませんが、これはやはりすごく大変です。大多数の生徒が小学校時代、あるいは高校から入ってくる子は中学時代。何年間も塾に通う。塾ではものすごい量の宿題を出されてそれをこなす形で勉強をする。合格する。こういう経験をしてきています。うちの学校は宿題はあまり出しません。そうすると、普通に授業を受けて、それが何か評価されるというのは定期考査までない場合もあります。日ごろの勉強って、一体何をすればいいんですか。試験前って一体何をすればいいんですか。そういうことを質問してくる子もいます。あとは保護者にも、うちの子は勉強しないので先生宿題出してくださいというようなことを言うてくる人がいます。その時に学校全体としてそうしようとしているわけではないですが、私は、「とにかく授業を受けていれば、何が試験に出るかは分かるでしょう」と。それをきちっと準備していくっていうことが大事だという話をします。とにかく自分で勉強の計画を立てるっていうことが大事なんだということを繰り返します。「成績が落ちたから塾に行こうかと思

います」という子も時々いるんですけども、そうやって塾に行って何とかなったというケースは、経験的に少ないということも伝えます。塾を否定するわけではありませんが、塾に頼った子というのは大抵うまく行っていないですね。ですから、そういう話をただひたすら繰り返してするということです。「自分でちゃんと勉強する」そういう空気感というのをどうやって醸成していけるのか。そういうことが大事かなと思っています。あとはやはり、自分でしっかり勉強をする。先ほど紹介した事例で、「勉強の仕方が分かった」そういうことを言っていた子がいました。そういう子を間近に見るということは、勉強の仕方ってどういうものなのかということ、学ばいいきっかけになっていると思っています。そうは言っても、やっぱり大学受験でもそうやって手取り足取りやってくれる塾はあったりするわけなので、それに頼っちゃう子も残念ながらいるのが実情かもしれません。以上です。

秦野進一特任教授(討議司会)：

それでは、大学の先生お二人におうかがいしたいと思います。大学入試の主体性の評価にあたり、主体性の評価ではなく、主体性を自己PRできるかどうかという表現力の評価になってしまわないだろうかというご質問です。そうならないために、大学側で気を付けるべきこととかはありますでしょうか。

西郡大教授：

例えば書類審査とかで、主体性を本人がアピールするとなると、その文章の表現力とか、そのうまい下手っていうのは、やはり評価する側の印象としては影響するのかもしれませんが、先ほど発表の中でも言いましたけれども、じゃあその根拠はなんですかと。きれいな、ものすごく整った文章でアピールしていて、ものすごくメッセージとしては伝わってくるけれども、じゃあその成果物とかそのプロセスで得られたものも、一緒に合わせて出してくださいと。それを見

て、やっぱり言っていることとしっかりと整合しているとなれば、ある程度評価はできると思いますし、そういったその根拠資料であるとか、参考資料というものの、幅も今後大きくその情報量としては広がるというふうに考えております。確かに、文章のうまい下手、アピール力のあるかないかっていうのは影響するかもしれませんが、ただ紙でやるっていう時と比べて、少しやりようというものが今後出てくるのではないかと思います。特に大学関係者だと経験的にも分かるのかもしれませんが、大学の法人評価とか、色んな入試の評価があると思いますけれども、いいことを書いて、きれいなことを文章で書いても根拠資料がしっかりとしていなければ評価されません。そういったことも考えますと、最初のうちはうまく行かないかもしれませんが、ある程度経験を積むことによって、そういったものの整備というのがなされるのではないかと期待しています。

宮本友弘准教授：

表現力になってしまうのかということなのですが、AO入試でいくつか私も評価の現場を参観させていただいた経験から申し上げますと、すごくうまい文章で書いてあるからって、じゃあそれがそのまま評価されるかっていうと、大学の先生はそこまではバカではないんですね。仮にすごい名文で書いたとしても、求める事実が全然書いていないねとか、こちら側に評価する一定の基準がございます。それを明かすことはできませんけれども、ですので、表現力で勝負になるということはないです。

倉元直樹教授(討議司会)：

また観点を変える形になるかと思いますが、大学が欲しい学生像、それから、高校側がどういった生徒を評価してほしいのか、というようなことに関連した質問をご紹介します。

これは西郡先生に対してですが、「アドミッションポリシーとのマッチングを見る時に、ボー

ダーの学生だけでいいのか、成績は良いが、マッチングしない学生も多いように思うが」ということなのですが、要は、基本的に学業成績ではなくて、いわゆる入試の成績ですね、その合否ぎりぎりのところを見るという考え方では、アドミッションポリシーに合致した学生が取れない可能性があるのではないか、というようなご質問なのかなと思います。

あとは宮本先生に対しては、アドミッションポリシーを示すだけで、主体性がある学生が受験するという理由を示して欲しいというか、メカニズムをもう一度説明して欲しい、ということになります。同時に、AO入試が30%になった時に、…今の入試で「主体性」の評価が担保されているという前提ですが…本当に「主体性」を担保できるのだろうか、というご質問がありました。

この辺、それぞれの先生方はどういうふうにお考えでしょうか。

西郡大教授：

成績は良いが、主体性がない学生が合格する可能性があるんじゃないのかというのは、まさにその通りで、そういうふうな構造にその制度がなっているから、それは入ってきます。ですが、その主体性を優先して評価をした際に、今度は学力が不足した学生も入ってくると。この問題についてはどっちを優先するかということを考えた際に、やはり確実に安定した技術で評価できるものを前提にして、しっかりと学習についていける、ミニマムのところをしっかりと評価する際に、まずは共通テストであるとか、個別学力検査。その部分をしっかりと担保して、そして受験生にとっても納得性のあるものを優先させることが重要だと思います。その上で主体性を評価した際に、どうしても入試制度のその配点とかの構造上、ボーダー層だけにしか影響力が生じないということになります。もし、主体性のところまでしっかり見るというふうにするのであれば、主体性評価が持つ、先ほど申しました

影響力というものが、格段に上がります。そうすると、先ほどから問題になっています公平性の問題とか、本当に主体性を測っているのかどうかなど、そういったところを確実に乗り越えなければいけないと思います。それができない段階では、優先順位というもの、共通テストや個別学力検査の方を優先にして、それにプラスして配点としてはそんなに大きくないですけども、主体性評価の加点分を加えれば、結果的にその対象層がボーダー層になります。もうひとつ付け加えて申しますと、この考え方としては、全ての受験生を書類審査した際に、影響を及ぼさないところを評価対象から外しますということにしていますので、何か任意の得点ラインを決めて、これから上は評価しませんと言っているのではなくて、全員評価した際に合否に影響が出ない層を外したボーダー層を評価しているという点について付け加えたいと思います。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございました。宮本先生、いかがでしょうか。

宮本友弘准教授：

1点目の質問は、アドミッションポリシーを示すだけでいいのかというようなことだったと思うんですけども、先ほどお示ししたアドミッションポリシーは、大学全体としてのものでして、選抜要項の1ページ目、2ページ目に載っているものなんですね。各学部のアドミッションポリシーを、じっくり読んでいただきたいんです。その中に、こういう人が欲しい。その人を評価するためにこんな方法を取りますとありますが、そのことを先生方はご存知かと思うんですが、その中に、かなりメッセージが込められています。それと、これは詳しくは言えないんですけども、このアドミッションポリシーというのは、実際に選考する時にもやっぱりすごく重要なんです。色々なものを判定、評価していく時に、アドミッションポリシーに照らす行為は



あると思っていただきたいんですね。ですので、そこにどんなメッセージが込められているのかっていうのを、読み取っていただければなという思う次第です。もうひとつの質問ですが、AOを30%に拡大した時に、主体性を担保できるのかということなんですが、現状のようなきめ細かさというのはだんだん薄れていくというか、難しくなっていくというのは、大いに予想できます。ただ、主体性があるということがどういうものに反映されているのかっていうのがひとつあると思います。先ほど申し上げたように、東北大のAO入試の場合は、ひとつの軸として学力の中には主体的な学習行動が反映されているっていう仮定と言いますか、想定は当然しております。なので、今後も30%まで拡大したからといっても、研究大学として求める学生像の基本は変わらないです。となれば、まずはぜひ学力を頑張っつけていただきたいというのが、率直な今の段階で言えることです。主体性が何に反映されているのか、その他の書類等々については、今後検討していくという段階です。お答えになっているかどうかは分からないんですけども、あまりはつきり言えないこともありますので、これでお許しください。

倉元直樹教授(討議司会)：

実は、この空間では「学力の中にも『主体性』は反映されているのだ」という前提で話をしていることになるかと思います。したがって、いわゆる学力検査で測られる成績というものが、「主体性」も含み込んだ形で評価をしている。その上

で…という話になっています。それに対して、これはこの質問をされた方が「総合的多面的評価により知識偏重入試からの脱却を図る中、…これは確かに答申に書かれていることですが、それが事実かどうかは別にして、…高校の先生方には大学にどういった力を評価してほしいとお考えですか」と。これは質問された方の意図がそういう意図かどうかは分からないのですが、「どういった力」ということばの中に、おそらく今、選抜の主体になっている学力検査も含まれているのだと思います。それと今、迫られている「主体性」そのものを何らかの指標で直接評価するというような試みも含めて、「どういう力をどういう方法で評価してほしいとお考えですか」というご質問ですね。

それぞれ、3人の先生方にお答えいただければと思います。そうですね、順番は千葉先生からお願いします。

千葉栄美教諭：

今のままじゃ駄目なんですか。主体性を評価することが駄目だと思っているわけでは全然なく、今推薦とかAOで、色んな活動を一生懸命やり、意欲のある生徒が手を挙げて受験し、自分のやったことを伝えて評価をしてもらっています。一般入試ではそういうことはちょっと苦手だけれども、でも主体的に一生懸命勉強を頑張って、色んなことを考えて、そのうち大きく花開く生徒が、学力試験で選ばれていく。それで、私はいいような気がします。なので、大学に新たに何かを求めることはありません。高校側は、1,000点のうちの30点だからいい、では私はないような気がします。割合の問題ではなくて、一般入試で全てその主体的な活動を点数化するよと言った時点で、不器用な生徒や、そして不器用な私たちは、やっぱりそれが大事だ、となって、今でさえどんどん学習時間が低下しているのに、それが変なふうに伝わると、生徒たちは、じゃあボランティア5回出ればいいんだとか、そんなふうになってしまわないかということが心配

ですし、それを止めるのは多分高校教育の責任なんじゃないかなと思っています。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございます。じゃあ座っている順番で、有山先生お願いいたします。

有山智雄教諭：

この新しい基準を持ち込むことによって、果たして合格する生徒が変わるのかどうかということを、我々教員同士で話すことがあるんですけども、結局受かる子というのは適応力がある子です。学ぶ力というのは、多分適応力なのかなと思います。そうすると、これは高校生を送り出す側としては、大学入試の選抜に求めたいこととしては、やはり客観性ということはきちっと担保されているものでないと困ると思います。

入学試験って、大学がどういう能力を求めているのかというメッセージとしての性格が強いのかなと思います。ですから、主体性というものを求めているんだというメッセージが出されることで、そうすると多分自分はそういう点は弱いなって思う子は、もしかしたら他の大学を受けるかもしれない。

うちは私立の学校なので、入学試験を自分たちで作ります。一体どういう観点で、どういう試験をやって選抜するかということを考えるわけですが、高校入試だったら、英数国理社。あとは調査書がありますが、とにかくその試験でしっかり点を取ってくれるということは大前提です。それで合格させてとんでもない子が入ってきちゃうかという、そういう子もいないわけじゃないですけども、だいたい頑張れる。それなりに色々なことを面白がってくれる。そういう子が入ってきてくれていると私は感じています。

ですから、私としては、その大学に特にこういう点を見てほしいという特段のリクエストはないというのが、とりあえず質問へのお答えになるかと思います。

石井裕基教諭：

学力は当然計ってほしいし、勉強を一生懸命頑張っている子。そしてその結果を出した子。これは当然とってほしいです。ただ、頑張っているんだけど、その試験時間内で答えを見出せない子。書ききれない子もいます。そういう生徒をどういうふうに助けられるのか、救うのか。それを考えていただきたい。それを考えるひとつの手がかりとして、もしかしたら主体性、要はその大学で何を学びたいと思っているのか。その思い。それを、そういう強い思いを持って、そして高校時代に色々な活動に取り組んできたこと。それを評価してほしいというふうには思っています。なので、一概には言いませんが、学力は当然なんですが、学力だけ、学力が十分発揮できない生徒をどういうふうに救うのか。それを、それ以外の活動で、評価するということなんでしょうか。評価してほしいということなんでしょうか。

倉元直樹教授(討議司会)：

すみません、質問票から離れてしまいます。まずは私の感想で申し訳ないんですが、極めて対照的な青森の田名部高校と、それから東京の開成の先生が全く同じことを言われたということが印象的です。「今の入試のやり方を変えてほしい」とは、高校の方では思っていないと受け取りました。あとは石井先生のお話なんですけれども、西郡先生のご講演の中であった、行動主義から見たような成果の評価と、プロセスの評価の話がまた出てきたな、という印象で受け取りました。最終的にいわゆる成績を伸ばすという形で評価。そこまで行って、初めて評価されるのが今の入試システム。できればそこには現れないプロセスも見てほしいという話ですね。これは多分、いわゆる今の「主体性評価」の様々な行動指標に関しても、全く同じことが起こってくるのだらうと思いました。すなわち、評価の方法という意味では、結果の評価というのが、比較的客観的で、明白で、手間の意味でもさほどでは

ない。それに対して、プロセスの評価というのは、非常に主観が入ってくるし、ものすごく手間がかかる。しかし、その結果得られるものが満足する水準に達するのはなかなか難しい。

今の議論の中で、気が付いたところです。

秦野進一特任教授(討議司会)：

今の点に少し関連がありますが、エビデンスについてのご質問を大学の先生方にしたいと思います。千葉先生のスライドにも目に見える成果のみが点数化されることへの不安があるというふうに書かれていました。目に見える成果というのはエビデンスが用意できるような生徒、例えば県大会で優勝したとか、体育祭の委員長をやったとか、そういう生徒は問題ないのですが、そういった形で書けない。例えば3年間、部の練習がしっかりできるようにずっと献身的に努めていたマネージャーがいたとします。そのマネージャーの努力もあって部は優勝した。そのマネージャーの努力を高校の先生が表記した時に、大学の先生方はそれをエビデンスのないもの、記述だけの評価とみなすことになるのでしょうか。その点についてはどのようにお考えでしょうか。

西郡大教授：

確かに、エビデンスというと、何か証明書であったり賞状であったり。そういった実績のものをイメージするんですけども、例えば野球部のマネージャーで色々選手のことを考えて、その選手の様子を見ながら日ごろノートを取っていると。そういったノート、その色んな情報をもとに、チームがより活性化するような形で支援していた。こうした場合、エビデンスっていうのはそのノートでもいいわけですし、それによって何かしらの活動、アクティビティがどんどん高まったのであれば、その活動による成果や結果と合わせてエビデンスというふうな作り方もいいわけです。これが従来通りの何かの証明書のコピーだけであつたら、当然そういったも

のは提出できませんので、先ほどの繰り返しになりますけれども、実際のノートそのものでもいいんですけれども、どういうふうに自分自身が関わったのかということを示すことができる行動事実を示したエビデンスの示し方もあるのではないかと思います。ただ、今漠然とエビデンスという言葉で語られるものは、既存で我々が知っているものでしか判断できないんですけれども、その新たな形というものを今後探っていくということもできるのではないのかと思います。やはりこの主体性っていうのは、今日この話を聞くと、評価しない方がいいんじゃないかなって思うところも多いんですけれども、じゃあみんなで主体性を評価するのはやめようって言えば、決着が付くのかって言うともそういう問題でもありませんので、どういった形が、関係者の納得を得られる形として適切なのかというところを、もうちょっと建設的に何かアイディアとか、そういったものが出てこないかなって期待しています。

宮本友弘准教授：

例えば、ボランティアを一生懸命やったということだけだと、これじゃ評価のしようがないわけですよね。そうじゃなくて事実がどの程度書いてあるかということによっても変わってきます。成果としては見えにくいかもしれませんが、事実をきちっと記述されていれば、それこそがエビデンスになる可能性は秘めていると思います。何かコンテストで1位になったとか、2位になったということじゃなくても、地道にやっている活動でも、主観的な熱意とかだけではなくて、もうちょっと事実が伝わるような要素を書いていただきたい。少し話がずれちゃうかもしれないんですけれども、学力にも主体性がどうしても重要になってきます。皆さん、知能指数と学力の相関ってどのくらいかご存知ですか。大体世界的に見ても 0.6 とか 0.7 くらいなんです。そうすると、相関係数を 2 乗すると説明率になるんですけれども、学力の半分くらい知

能で決まっちゃうみたいなのはあります。しかし、最近出た「教育の効果」っていう本によれば、何が教育に効果があるかの 1 位、一番効果があったのは何かというと、学力に対する、学習に対する自己評価なんですね。自分が非常に高い評価を持っているといいと。それは、別の言い方をすると学習に対する有能感なんですね。それは学習コンピテンスともいいます。私のやった研究でも、対象は小学生なんですけれども、知能と同じくらい僕はこの勉強ができるっていう感覚を持てるっていうことが、知能と同じくらい影響力があったりするんです。この有能感っていうのは、主体的な行動を生み出す源泉なんですね。そういった意味でも、間接的ですが、学力には主体性が反映されています。何度も学力を強調して申し訳ないんですけれども、そういった事実もあるということを、この場を借りてお話しさせていただきました。

倉元直樹教授(討議司会)：

ありがとうございました。なかなか司会の腕が付いていかなくて、もう気が付くと、終了時刻に迫って参りました。ちょっとまとめる自信がないので、この辺でフロアの方から、これは聞いてみたい。これは発言しておきたいということがあったら、お一方かお二方。短くお願いしたいのですが、どなたかいらっしゃいますか？マイク係がうかがいますが、よろしいですか？

それでは申し訳ありません。そろそろ終了の時刻になって参りました。最後にこれだけは言い残したいということがありましたら、まず西郡先生から。なければパスでも結構です。

西郡大教授：

一言だけ。主体性の評価というのが、やはり難しいというのは、このシンポジウムの参加者の皆さんの共有認識だと思います。その評価の難しさがある一方で、その評価があることによって、高校教育、高校生活にどれぐらいの波及効果をもたらすかというところを、どういうふうに

位置付けていくのかっていうところを、もう少し詰めた議論を今後できていければと思います。

千葉栄美教諭：

主体性を育成するのが最も求められているのは、実は学校教育ではなくて家庭じゃないかなと思います。今この主体性という議論が、すごく表に出たことで、実は保護者が主体性が大事なんだって思い始めているという、大きな利点はあるような気がします。本校の部活加入は自由なんですけど、加入率は大体 8 割台だったんですが、今年の 1 年生は 9 割を超えました。色んな活動をちゃんとさせようというふうに保護者が思っているということは、何か少し変わってきたのかなとは思いますが、ただ、主体性が大事だと認知されてきたことは良いことだと思いますが、それを評価すべきだということに関しては、ちょっと私の中では疑問があります。主体性が大事なことは、今も昔も、それからこれからも絶対変わりが無いので、何かこう汲々として、私たちが主体性育成をしなきゃじゃなくて、おおらかに生徒の主体性を育てていけるような学校でありたいなと思います。

有山智雄教諭：

学ぶということにおいて、主体性が大切だということに関しては、誰も異論がないと思います。大学の選抜にとって有利だからということではなくて、主体的に何かを頑張って、何かを成し遂げたということで得られる達成感というのがものすごく大きな自信になるんだということ。そういうことを我々大人が子どもたちにメッセージとして送ってあげれば、子どもたちも「自主的に何かを頑張ることはいいことなんだ」そういうふうに思ってくれるのではないかなと思います。以上です。

石井裕基教諭：

同じようなことにはなるとは思うんですけども、主体性を育てることは、誰も否定しないこと

だと思います。でもその主体性を入試で測るということは非常に難しい。でも、揺れる気持ちの中で、頑張っているけれども結果が出ない子も何とか救われてほしいなっていう気持ちも一方である。そういう子が強い思いをその大学に持っているのであれば、そういう子もってほしいなという一方で、そういう気持ちがある。だから、非常に私自身も揺れ動いています。結果が出れば一番いいんですけども、ということで、すみません。以上です。

宮本友弘准教授：

最後に、一心理学者として、発言させていただきます。主体性、あるいは自律性は、可塑性のある部分です。生まれつきで決まらずに、その後の色々な経験で育っていく部分なので、大切にすべきだと思います。また、そこにとって重要なことは、先ほどのお話にもつながるんですが、やっぱり色んな領域で、有能感を持つことが大切なんですよ。簡単に言ってしまうと自信ですね。何かに対して自分が自信を持ってやっているという感覚がやっぱり主体性を生み出すものなんです。なので、自律的になるにはどうしたらいいかといえ、生徒さんたちが自分が得意だと思っているようなところの有能感をもっと高めていってあげてほしいと思います。特に重視してほしいのは、私は、個人内評価だと思っています。その子がある時点より、未来に向かって伸びていったというような、その伸びがちゃんと分かるようにしていただけるといいかなと思います。あとは個人の中でも、その伸びを一生懸命やったとか抽象的にしないで、行動レベルで。今まで 3 回しかやっていなかったけれども、それを 10 回やるようになったというような事実としてきちっと記録していく。そういったことが自分の伸びを実感する意味でも重要です。入試で使えるという言い方はちょっと下世話になってしまうんですけども、きちっとした事実の積み重ねになって行くんじゃないかと、個人的には思っております。以上です。

倉元直樹教授(討議司会)：

それではそろそろ時間が来ました。

今回、「主体性とは何だろうか」というテーマを掲げました。具体的には、平成33年度入試というのが、我々に課されている新しい入試の期限です。それなのに、この平成30年5月でそんなことを話していいのかな、という気持ちもありながら、やはり一度立ち止まって考えるのがいいのではないかと、この会を企画しました。

宮本先生が最後おっしゃったことを私なりに拾いますと、私たち大学の立場としては、やはり高校の先生方の有能感ですね。日々取り組んでおられる努力が実を結ぶようにしたいと思っていますところ。そうした時、「どうなるかわからない」というような不安にかられて、バタバタと動くことが必要なのか、それとも、今までやってこられたこと、…色々と反省もあるだろうとは思いますが、…それを生かして、その延長線上に我々の入試を考えるのか、多分、私どもが大学の立場として、今、課されていることではないかなと思います。とりあえず、「バタバタ」をリセットできたとすれば、このフォーラムの意義があったかなと思います。

本日は長い時間、どうもありがとうございました。これにてディスカッションを終了させていただきます。

(拍手)

倉元直樹教授(討議司会)：

それでは先生方、ご降壇ください。

(拍手)

樫田豪利特任教授(司会)：

5名の先生方には、長時間に渡り大変お疲れ様でした。



閉 会 の 辞

東北大学理事

滝澤 博胤

榎田豪利特任教授(司会)：

最後に東北大学理事滝澤博胤より閉会のごあいさつを申し上げます。

滝澤博胤理事：

東北大学の滝澤でございます。今日は、午後1時から4時間にわたり非常に白熱した議論も含めてよい時間を持てたと思います。先ほどまでここに天秤が傾いたスライドが出ていたと思うんですが、もう1回出してもらっていいですか。この『主体性とは何だろうか』、結局私も今日4時間お話を聞いて、主体性そのものについては、恐らく皆さんと同じでこういうもんだらうということとはよく理解できているつもりでいます。要は、それが測れるものなのかと。それが、この傾いた天秤の絵だと思っていました。結局、色々なお考え、お話をうかがいましたけれども、やはり主体性っていうのを秤で測る、物差しで測ることはできないんじゃないのかなって。そんな印象を持ちました。ただこの絵を見ていて、天秤は傾いているけれども、本来皿は鉛直方向にあっていいんじゃないかなと、ふと気付いてしまったんですが。もしかしたら、重力に流されないっていうのが主体性なのかな。そうだとすると、今、国の方でこういう入試、主体性を測りなさい、という声がありますけれども、そのグラビティに流されることなく、私たちが高校と大学とで真に信頼性のある入学者選抜、そういうことが成し遂げられることが一番大切なのかなと改めて思った次第でございます。その意味では、この高等教育フォーラムは高校の先生方と大学人、あるいは関連の皆様方が一堂に会して諸問題を議論する、大変素晴らしい機会、場であると思っています。これからもまた、色々な企画をしていきたいと思っていますので、ぜひ引き続きこのフォーラムご参加いただいて、ご議論いた



できればと思う次第でございます。最後に本日、ご講演、また現状ご報告をいただきました5名の先生方、大変ありがとうございました。また、たくさん質問を寄せていただきました会場の皆様方にも厚く御礼を申し上げまして、閉会のごあいさつとさせていただきます。本日は大変ありがとうございました。

(拍手)

榎田豪利特任教授(司会)：

以上を持ちまして、本日のフォーラムを終了いたします。なお、アンケートの回収を行っておりますので、ご協力、よろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。



講評 1：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立弘前高等学校
教諭 葛西 史生

1. はじめに

今回のフォーラムの「主体性」とは何だろうか—大学入試における評価とその限界への挑戦—というテーマについて、私自身普段から関心の高い内容であり、当日さまざまなことを考え、勉強させていただいた。また、討議の時間の際の質疑の多さからも参加する先生方の関心の高さが伺えた。

各大学の推薦・AO 入試枠の拡大や、大学入試改革などを含めて、大学が主体性を評価する場面が多くなっていく中で、今回のフォーラムでは改めて生徒の主体性を育むことについて考える機会をいただいた。

自身の高等学校の教科指導やホームルームでの指導を通じて主体性を育むための取り組みを踏まえ、今回のフォーラムを通じて考えたことを記載することで、フォーラムの講評としたい。

2. 目に見える主体性を強要することについて

基調講演で佐賀大学アドミッションセンター教授・西郡大氏が、現状報告で東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授・宮本友弘氏が、共に主体性を評価することによって高等学校の教師が「生徒の活動する場のお膳立て」や「生徒が活動する場の強要」などの影響がでることを危惧していた。このことは普段ホームルームや授業で生徒を指導していても、非常に難しい問題だと常に思っている。ボランティア活動やクラブ活動、体験会、いわゆるアクティブラーニングなど「目に見える主体性」を極端に要求することにより、生徒がやらされている感をもってしまい、受動的に行動してしまっているのは本来の趣旨からかけ離れたものになってしまう。また、入試に有利だから行こうというのも本来の趣旨に反する。しかし、学校現場では、

このような考えが教師側にも生徒側にも多分にあるのが現状である。個人的な見解ではあるが、生徒がはじめは入試のためでも、このような活動に対して、はじめは「先生に言われたから」でも「入試のため」でも、最終的にやってよかったと感じ、その後自分からこれもやってみようと行動するようになれば、十分に本来の目標を達成できているのだと思う。青森県立田名部高等学校教諭・千葉栄美氏が現状報告で「主体性は日常にある」「自ら一步踏み出す」「失敗から学ぶ」をキャリア教育の柱としていると発表されていた。「自ら一步踏み出す」ために背中を押し、手助けするために教師がきっかけをつくり、失敗しながら生徒が挑戦していく姿勢を身につける。そして教師が生徒を支えていくことが大切であるということを千葉氏の報告を通じて考えた。また、開成中学・高等学校教諭・有山智雄氏の現状報告では、学校が「やりたいことはやった方が良い」というメッセージ・空気感を出すということを発表されていた。これも、生徒の主体性の背中を後押ししている大きなことである。

いずれにしても、教師側が「入試で必要だから」とアプローチするのではなく、活動を体験することの意味を丁寧に話して、その中で生徒が参加してみようと思うことが大切であると考えた。

3. 目に見えない主体性について～数学の授業を通じての考察～

2 では目に見える主体性を後押しすることについて述べた。しかし、主体性を評価することは非常に難しいと思う。実際に、基調講演・現状報告・討議の場で、すべての方が主体性を評価することは非常に難しいとおっしゃっていた。例えば、香川県立観音寺第一高等学校

教諭・石井裕基氏の現状報告では、生徒の主体性を評価することへの考えは、高校の教員の中でも様々なとらえ方がある。そして、「主体性」という言葉にあまりにも振り回されていないかということを書けられていた。このことを踏まえて、「目に見えない主体性」というテーマで私見を申し述べたい。例えば、授業でいわゆるアクティブラーニングを導入することについて昨今議論されている。もちろん、生徒同士が協働して考えをまとめ、発表することは大いに有意義なことである。自然と生徒同士で教え合うようになれば、生徒の学力も向上する。しかし、授業の場などで極端にそればかりに偏り過ぎてしまうことへの危惧も感じている。私は数学を担当しているが、教師の説明を聞く場面、一人でじっくりと考える場面が極めて大切であると思う。開成中学・高等学校教諭・有山智雄氏の現状報告で、「講義形式の授業ではいかに脳をアクティブにするか」ということをおっしゃっていた。私も授業で教師の説明を聞き、または一人で問題を解き、「ああでもない、こうでもない」と考え、問題解決のための手段を考え、学力を向上させようとする姿勢は、十分に主体的であると思っている。数学の授業を通じて論理的思考・水平的思考をする力をのばすことが高等学校数学の目的である。ユークリッドの原論が数学の世界で二千年以上も継承されていることこそ、純粋理論を突き詰めることが有意義であることの証明である。大学入試で主体性を評価する際、目に見える主体性の評価と同じくらい、こつこつと学習し、学力向上に邁進してきた目に見えない主体性を評価することを期待したい。

4. 主体性を評価することへの挑戦

3で、学力向上に邁進してきた目に見えない主体性を評価することを期待したいと記述したが、これは極めて難しいことである。また、目に見える主体性への評価についての評価も難しい。さらに現状報告で青森県立田名部高等学校

教諭・千葉栄美氏が少子化が進む地方の小規模校の現実を述べられていたこと（活動機会の不平等）にも注目したい。このような観点から、主体性を点数化すること自体に対する解決すべき点は数多くある。討議ではこのようなことも含め、貴重な意見を数多く聞くことができた。

私は現状では大学入試における主体性の評価には次のような意義があると考えている。

- ① 生徒が目に見える主体性を求める機会が増えること。それが、様々な体験をすることの意義を生徒自身が感じ、さらなる体験をしようとする動機になること。
- ② 学力の3要素をもれなく評価することができること。そのためには、主体性だけに依らずに、知識や思考力などとバランス良く評価されること

次に主体性の評価に対する問題点は次の部分であると考えている。

- ① 基準が明確でないため、判断が難しい
- ② 特に目に見える主体性よりも目に見えない主体性を評価することのほうが難しい

5. おわりに

大学入試において、主体性を評価することには難しい面も数多くある。しかしながら大学入試で主体性を評価することへ挑戦し続けることには大きな意義がある。今回のフォーラムでは様々な意見が出て、一つ一つの意見が大変勉強になるものであった。

現状、高校現場では、一つ一つの学校単位、一人一人の教員単位でも主体性への評価の捉え方は様々である。上記のように、答えのないテーマであるためしかたのないところではあるが、実際に受験する生徒が混乱しないような意思統一は必要であると思う。今回の主題である「主体性の評価」のみならず、高校教育のあらゆる場面が現在過渡期であり、本フォーラムの

みならず，多くの場で様々な意見が出ている．
いずれにしても，船頭多くして船山に登る状態
になって生徒が混乱するような状態にならない
様，ある程度の尺度が必要であると思う．

講評 2：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

岩手県水沢高等学校

教諭 蜂須賀 誠

1. はじめに

2022 年より年次進行での実施が決定した新学習指導要領では、新たに「学力の 3 要素」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」が定義された。混沌を極める現代社会を生き抜くためには、これまでの知識偏重の学習では不十分であり、自ら行動を起こし、他者との協働のもと社会を切り開いてゆかなくてはならない。そこで重視されたのが今回のテーマである「主体性」であると考えている。それに至った経緯は、当然頭では理解できるものの、われわれ現場の人間にとっても保護者や生徒にとっても、その実態は非常に分かりにくく、それぞれの立場によって定義が異なる曖昧なものである。

しかし、東京オリンピック、パラリンピックが開催される 2020 年には、「大学入学共通テスト」もスタートし、それに伴い個別学力検査でも、「主体性」を評価しようとする大学の増加が予想される。「分かりにくい」「定義が曖昧だ」などと言っている現状が、今春入学した現 1 年生には突きつけられている。

本フォーラムは、今後の見通しが不透明な中で、それでも一歩踏み出そうという、非常に斬新かつ意義のある試みであると考えている。

2. 基調講演

「主体性」にどのように向き合うか？ ～地方国立大学の立場から～

佐賀大学アドミッションセンター教授
西郡 大 氏

西郡先生の講演は、われわれ現場の人間や大学側が避けて通りたいと考えているであ

ろう問題に真摯に切り込もうとするものであり、非常に考えさせられる発表であった。そもそも、「主体性とは何なのか。」その定義づけから始まったが、やはり人それぞれで定義は異なり、何を「主体性」と考えるのかすら統一できない問題であると感じた。いくつかの例を用いて、「主体性」に迫ろうとするものの、私個人としては、どれも「主体性」として認識できるものであり、その時点で今回のフォーラムが複雑で本質的なテーマに取り組もうとするものであることを確認した。

定義が不確定なものを目の前にし、さらにそれを評価しようとするという試みは、四方には何も見えない砂漠の中を歩むようなものであり、いつ、どこで、誰が答えにたどり着くかなど想像もできないものである。しかし、個人的には先生の見えないものを必死に追求するという姿勢には強い感銘を受けた。

先生の解釈である「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」という考えには、賛成である。グローバル化の進展により、社会は大きな変容に迫られた。その社会を生き抜くためには、やはり自ら学ぶという姿勢は不可欠なものであり、これからの高校生にとって最も重要な資質であることは疑いの余地はない。ただ、それを評価するとなると別の問題であり、果たして大学入試の一部として評価してよいものであるのかは疑問が残る。将来において、社会で活躍するであろう優秀な学生を獲得するためには「主体性」を持った学生を獲得することは大切なことであるが、それが合否を左右してしまうかもしれないという事実は、個人的には不安に感じる点が多い。日々の学習活動の結果としての大学入試センター試験であり、個別学力試験の得点であ

ると考えるからである。

また、先生もお話しされていたように「主体性」が評価の対象となった場合、われわれ現場の人間としても、その事実を看過することはできず、現在多くの場面で議論されているポートフォリオのような、何らかの対策を取らざるを得なくなってしまう、その中で培われる「主体性」とは、いったい何なのかという問題も生じてしまうのは明らかである。

先生の結論にもあったように、現時点では生徒に対しての動機づけ支援の一環として考えることが妥当ではないだろうか。高校時代の自らの学びを振り返る手段として利用し、その後の深い学びへと誘うものとしての存在であるならば、生徒にとってもわれわれ現場の人間にとっても有意義なものとして理解されるのではないだろうか。

3. 現状報告 1

目に見える「積極性」は主体性なのか？ ～ 地方に生きる高校生の現実～

青森県立田名部高等学校 千葉 栄美氏

「目に見える積極性」とは、われわれが普段学校でよく目にする光景である。クラスの役員であったり、行事の係であったり、部活動での役職など積極的に活動する生徒は確かに存在する。だが、その生徒たちが果たして「主体性」のもとで活動しているかという、確かに疑問を感じてしまうことがある。本校は SSH に指定されており、理数科の生徒を中心に課題研究に取り組んでいる。フィールドワークなど出かけたりしながら、自らの研究を進めているがその行為が「主体性」を元とする行為なのかというと、若干の疑問は残る。

田名部高校では地域の社会人の方を招いて講演会を実施しているが、その運営母体は原則的には生徒であり、講師とのアポイントや出迎えなど全て生徒が行っているとのこ

とであった。だが、千葉先生が問題視しているのが、担当する生徒が毎回同じであり、「主体性」というよりも義務感によるものが大きいとのことであった。今後、大学入試の一場面において「主体性」というものが評価の対象となっていくとすれば、このような場面はより増えてくるであろう。これまではまだ、生徒の「積極性」として認識できた行為が、点数化を目的としたものへと変遷していくとしたら、本来の意義は確実に失われてしまうものと想像できる。

現状報告 2

「四国の進学校で生徒の『主体的』な活動を考える」

香川県立観音寺第一高等学校 石井 裕基氏

先生が学校で行った主体性に関するアンケートは非常に興味深いものであった。繰り返しになるが、何を「主体性」と考えるのかは、人それぞれで異なるものであり、それを評価するのは困難を極めるものであることは言うまでもない。例えば、何らかの受賞歴や戦績といったものを評価の対象とした場合は、客観性は確かに担保されるものの、受賞に至る経緯や過程に言及するものがなければ、その結果だけで主体的であると評価することは難しい。また、経緯や過程について文章表現があったとして、その文章表現には主観性が大いに反映されているわけであり、すべての生徒を平等に評価できるとは言えない。大学入試ほど客観性と公平性が問われるものはないはずであり、その一部分ではあるものの「主体性」といった、定義も曖昧なものを評価の対象としてしまうことには、やはり一抹の不安が残る。

現在多くの学校ではポートフォリオを用いて、高校時代に何にどのように取り組んだのかを残そうとする流れにあるが、それも先ほどの考え方では、やはり主体性を正確に評

価するということになると様々な問題点が考えられる。今後、様々な取り組みや実践を行い、検証していくことでしか、答えは見つからないものとするが、やはり難しい問題であると感じた。

現状報告 3

開成における生徒の主体性

開成中学・高等学校教諭 有山 智雄 氏

主に開成高校での実践のお話であり、参考になる点が数多く非常に有意義な内容であった。自己肯定感や自信の源泉を育むためには自主的行動、自律的行動で得た達成感が必要である。そのためには与えられたものではなく、自主的に選んだ事柄を、自分で考え、困難に遭遇しても、自律的に活動し、困難を乗り越え、成果に到達することができた経験が大切とのことであった。

運動会の事例ではルール作成や審判も生徒自身が半年以上もかけて準備を行い、教員は見守るだけであくまで生徒主体で自主的に取り組ませていた。私の前任校でも多くの行事は生徒主体で行われており、時には手を出したくなる場面があっても、じっと生徒を見守っていた経験がある。前任校はそういった姿勢が全職員に浸透しており、行事だけではなく普段の授業や進路指導にも自ら考え、判断し行動する生徒を見守るという風土があった。

いずれは高校を卒業し、別の環境に巣立っていく生徒たちに必要な能力は、自ら道を選び、その道を進むための手段を考え、実行に移していくという生きる力なのだと思う。そのような能力を支えるのは主体性や協働性であることは疑いの余地はなく、今後さらに重要視されるべき力である。

現状報告 4

東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門入試開発室准教授 宮本友弘 氏

先の報告と同様に「主体性」とは何か、という定義づけからスタートする。これまでの現状報告を受けても、やはり「主体性」の定義が自分の中で明らかにならないところに今回のテーマの難しさを改めて実感する。

「主体性」を個人の意志に基づく行為と定義し、その「主体性」をもって、他者と関わり、相互作用の中でアイデンティティを確立するという先生の説明は、非常に分かりやすく、「主体性」の重要性を理解することができた。しかし、その「主体性」をどのように評価し大学入試に取り入れるのかという問題には、まだまだ課題が残ると感じる。

東北大学が AO 入試で求める研究者としての志を持ち、高水準の学力を有する学生の選抜において現在の学力重視の入試形態で十分に「主体性」のある学生を選抜できているとのことであった。「主体性」を持って日々の学習に取り組んでいるからこそその高水準の学力であり、その能力を学力重視の入試形態で客観的に評価することが現時点では最善であるのかもしれない。

4. おわりに

そもそも人によって定義が異なるであろう「主体性」といテーマについて多くの方と考える機会をいただいたことに本当に感謝したい。自分の中でははっきりとした答えは見つからず、いまだに霧の中を歩いているような感覚に襲われるが、それでも多くの方の考えを拝聴し、これからは模索し続けなければならないという使命感を持てたことは、今回の最も大きな収穫であった。

新学習指導要領に「学力の3要素」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」が示された以

上，われわれ現場の人間は，それを無視することはできない．難しい問題だからといって，避けては通ることのできない問題であり，われわれはそのことに真摯に向き合っていない．

今後もますます混沌を極めていくであろう社会を生き抜く生徒たちに，真に必要な能力とは何かということを正確に見極め，伝えていくことが我々の使命であり責務であることは明らかである．そのための一つの能力が「主体性」であることには疑いの余地はないのだから，今後もこのようなフォーラムや研究会などを通して模索しながら，今は見えていない答えにたどり着くための歩みを止めてはならないと感じている．

講評 3：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県仙台第一高等学校

教諭 永原 啓嗣

1. 基調講演（佐賀大学教授 西郡 大 氏）

「主体性がある」とする三つの評価対象がある。この三つを「主体性がある」順に並び替える課題から講演は始まった。以下は講演資料より抜粋。

- ① 自ら進んで積極的に物事に取り組み、自分の意見をはっきりと述べるができるとともに、自分に自信をもっている。
- ② 目に見える顕著な行動として確認することはできないが、自分自身で物事をしっかりと考えているような雰囲気がある。
- ③ 一見、不器用で成功に辿り着くことはなかなかできないが、失敗を反省し、地道に課題を乗り越えていく姿勢が見られる。

私は③①②の順に並べた。フロアの反応は様々であった。当然そうなることを見越して「主体性認識は多様」であるという切り口である。よって、「主体性」を求める集団の学力層を「平均よりやや上」と想定しての講演であった。

上記の①②③をどのように評価したかは、粗く言えば「行動主義的立場」の尺度によるか、「プロセス重視の立場」の尺度によるかである。どちらも一長一短あるわけだが、進学校はややもすると行動主義的立場で評価しがちである。もちろん頭では分かっている。その子なりの頑張りを評価すべきだと。しかし、目の前の大学受験をクリアさせるための学力を身につけるためには、必然、行動主義的立場になりがちだ。プロセスが満点でも、到達点が合格ラインを下回っていれば不合格という評価規準に合わせざるを得ないからだ。

西郡氏の講演を聞きながら、さて大学は、その子の主体性を評価する基準をもっているのだろうかという素朴な疑問が生じる。ある人は A、ある人は C と評価する「主体性」なるものの正体とは何なのだろうか。

最後に西郡氏は「主体性の評価は技術的に難しい」とし、大学受験の「主体性評価」は、受験生にとって「適度な動機づけ」として機能することを目指すことが重要ではないだろうかと結ばれた。

思うに、主体性が発揮されるときというのは、そこには、何としてもやり遂げたいという強い動機があるはずだ。この「何としてもやり遂げたい」ことを実現するために、何をしてきたか。今何をしているか、そしてこれからどんなことをしていきたいか。それを証明するフォーマットとしてはどんなものがあるのか。西郡氏が「技術的」と表現したのが印象的であった。

2. 現状報告 1（田名部高校教諭 千葉 栄美氏）

感銘を受けた。それは生徒を見る眼差しのあたたかさであり、生徒の行動を受け入れ受け止める包容力であり、教育の力を信じる凜とした姿勢である。全くの想像であるが、きっとそのような実践を積み上げてこられた教育実践家であろうことを感じた。

「主体性とは何か」というテーマに対しては、さまざまな考え方があろうことは当初から想像できた。テーマが大きく広すぎるのである。私の初任校はそれこそ県内でもっとも入試学力が低い高校であったが、（行動の善悪を別とすれば）「主体性」をもって行動する生徒はたくさんいた。果たして彼らは「主体的な生徒」であったのだろうか。ラ

スコリニコフは個性的な人物か、という問いに似ている。

今回のテーマは「知へ向かう」というフレーズをつけて考えることを前提にしていたようだ。つまり「知へ向かう主体性とは何か」である。なぜそうしなかったのか。東北大が想定する高校生の主体性とは、当然そのようなものであるということか。それとも、あえて広いテーマにすることで千葉教諭のような実践家からの提言を引き出そうとしたのか。いずれにせよ、地域的な制約、生徒の気質など、本当に高校現場は様々であることを今更のように感じた次第である。千葉氏の勤務校では、学年一番の生徒が就職することもあるという。進学校の感覚からすると「なぜ？」と思うだろう。「もったいない」と感じるかもしれない。でも、それが高校現場である。決して珍しいことではない。学校や担任が作り上げた型に沿って「主体的」に行動する生徒がいる一方で、様々な理由から、型に沿わずに「主体的」に行動する生徒もいる。どちらを評価するのか。後の報告でもその点は触れられるが、主体性を評価する尺度が常に一定であるということは、ない。その時々求められる、期待される主体性というものがある。その主体性には、いくつかの具体的な行動が伴う。その中から適切なものを、よりよく選び取っていくことが主体性と言えるのだろう。

3. 現状報告 2（私立開成中学高等学校教諭 有山 智雄 氏）

運動祭にかける生徒たちの熱量のすさまじさは、例えばクラス旗の写真からも十分に伝わってきた。聞けば、ほとんどの企画が生徒の手によって運営されるのだという。これが学力の高い伝統校の強さともいえよう。本校も似たような行事があるので、雰囲気は想像できる。

同時にいくつかの疑問が浮かぶ。

伝統というフォーマットに従っているという意味においてのみ、主体的とは言えないだろうか、と。枠組みとなるたたき台を最初につくるときに発揮される主体性（①）と、その枠組みを改善しようと建設的な言動をする主体性（②）と、枠組みの中においてのみ鋭刺と発揮される主体性（③）というものがあるだろう。

どの主体性が評価されるべきなのだろうか。そして大学や今回のフォーラムでは、どのレベルの主体性を議論しようとしているのだろうか。

さらに、我々教員はどのレベルの主体性をもたせようとしているのか。そして、そうあるための手立てとして、どのような指導をしているのか。報告を拝聴しながら、そう問われているような気がしてきた。学力偏差値の高い生徒は基本的な生活習慣や学習習慣が身につけていることが多い。もちろん一概には言えず、個人を見れば全くそうとは言えない生徒も少なからずいるのは当然のことだが、総じてある程度任せても安心、という生徒が多いのは事実であろう。本校の運動祭は4月下旬に行く。ほとんど生徒の手によって運営される。選手として参加し楽しむだけの生徒は主体性（③）だろう。実行委員として、あるいは審判として、当日までに議論を重ねてよりよいものにしようと働くのは主体性（②）である。では主体性（①）はどこ育まれるのであろうか。彼ら彼女らが大学生になり、あるいは社会人となったとき、発揮される主体性（①）は高校教育で育てうるのだろうか。

私は「よいモデル」を知っているかどうかポイントだと考える。「よいモデル」を知っていれば真似をすることができる。真似をしてみてもうまくいくことと、いかなことが当然出てくる。うまくいかないことの原因を考え、改善策を打ち出していく。このような考え方や具体的な行動ができたとき、主体性を発揮したといえるのではないか。我々教員

の仕事の一つは、生徒にとって「よいモデル」を多く見せること、そして生徒の行動の方向を指し示し、正しい価値観を教えていくこと、そして評価し意義づけしてやることなのだろう、と考えた次第である。問題提起のある現状報告であった。

4. 現状報告3(香川県立観音寺第一高等学校教諭 石井 裕基 氏)

石井氏もまた提案性のある報告であった。すなわち、大学の入試において評価されるのは「到達点」か「過程」か、ということである。主体性というのはあまりに尺度がありすぎて、正しい評価がしにくいのである。観音寺第一高等学校はSSH指定校となっており、石井氏は「統計教育」に力を入れ指導をしているという。「スポーツデータ解析コンペティション」への参加など、着実に実績をだしている。生徒も主体的に取り組んでいるという。ただし「大学入試に使うということがモチベーションになっている」という面はあると石井氏は述べている。私もそうだろうと思う。人間の行動は粗く言って、回避するか要求が満たされるかの二つのモチベーションによる。大学合格という欲求を満たすための合理的方法として勉強があると理解するから、勉強へ主体的に向かうのである。

ここでも、今回のフォーラムはどのような主体性を見ようとしているのか、または共有しようとしているのか、私は考える。例えば、大学合格のために必要な策を「主体的に」講じるのは、一般に打算的だと言われ否定されるような雰囲気があるような気がする。しかし、目的とそれを達成するための手段がいくつかあり、合理的判断のもと、その手段に「主体的」に取り組むことは、決して悪いことではない。

世の風潮、大学の求める主体性とは、実は合理的手段を選ぶ能力のことではないだろうかとの思いが頭をよぎった。

5. 現状報告4(東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 宮本 友弘 氏)

心理学の専門家からのアプローチで、非常に興味深かった。ここでも話題になっていたのは「評価に行動を合わせるのは主体的か否か」ということである。やはり、今回のフォーラムは、世の中で何となく言われている「主体性」を再考しよう、という意図があるのだと感じた。また教育の場では外発的動機よりは内発的動機を引き出すことに主眼を置くべきであることも再確認できた。自分はこの勉強が得意なんだと思わせる—よい意味で錯覚させる—ことによる有能感が主体性を生み出す、という理論に共感した。

進学校は、苦手意識をもたせる指導をしてはいないか。必要以上に難しい問題、必然性、合理性を無視した大量の課題などを、何の趣意説明もなく生徒に押しつけていないか。また教員自身も、この指導や課題を課すことによってどのような力がつくのか自覚しないまま、ただ評価点の一部に加えるためだけに強制してはいないだろうか。

また、興味深い話として東北大が求める主体性は、自己PR力ではないということだ。表現力は主体性を表していないという見解であり、我々高校教員も見誤らないようにしなければならない部分だ。

専門家ならではの、情緒的ではない話が最後に置かれることで、締まった印象があった。

講評 4：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立平成高等学校

教諭 三浦 史聖

1. はじめに

平成 33 年度大学入学者選抜要項によると、学力の 3 要素「知能・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を多面的・総合的に評価するものになる。それに伴う平成 33 年度以降の調査書への対応を学びたいという気持ち、「主体性」は入試でどのように評価されるのだろうか、そもそも大学入試における「主体性」とは何なのだろうかということを知りたいという思いがあり、今回のフォーラムに参加させていただいた。

2. 基調講演

「主体性評価」にどのように向き合うか ～
地方国立大学の立場から～

佐賀大学アドミッションセンター教授
西郡 大 氏

主体性と似たように感じられる言葉として、自主性という言葉がある。私としては、これらの違いは目的が他者によって決定されたものに伴うものであるか否かであると感じるが、その境界は非常に曖昧なものであると考えられる。同じ行動を評価するにしても、どちらの言葉でその行動を言い表すかは評価者によるであろう。講演冒頭の主体性の評価順の話が正にこれであると感じた。このことを考えれば、高校時代に主体的な活動をするということは重要ではあるが、大学入試においては、大学側も高校側においても主体性の評価を過大に捉えて欲しくない。しかし、その一方で全く無視してよいというものでは決していない。そのため、西郡大氏の 1 点刻みで合否が分かれるような学力層の生徒に限定して主体性を評価するということは非常に納得出来るものである。

入試制度変革期は入試に関わる全員の対応が難しいと感じる。生徒に不利益が被らないよう大学側の適切な評価方法を早い段階で確立していただければと思う。

3. 現状報告

3.1. 目に見える「積極性」は主体性なのか？
～地方に生きる高校生の現実～

青森県立田名部高等学校教諭 千葉 栄
美 氏

青森県の下北地域にある唯一の進学校であるということであるが、勉強でもキャリア教育でも主体性の育成を求め続けてきた活動が他の高校が参考になるであろう素晴らしい活動が行われていると感じた。

主体的といえ、アクティブラーニングを私は思い浮かべてしまう。次期学習指導要領においては、「主体的、対話的、かつ深い学び」という表現を用いて、更に進んだディープ・アクティブ・ラーニングという手法を用いながら、人間性、社会を生き抜く力、そして、学びに向かう姿勢を育くむことになるようである。高校段階のアクティブラーニングに対して、「活動あって学びなし」という学習方法であるという評価も聞く。そもそもアクティブラーニングは、基礎的な知識・技能が修得され、自由に使いこなせることの上に成り立つ学習である。さらに、報告の中でも、評価者の都合がよい行動がアクティビティと評価される傾向は否めないということが言われていたが、アクティブラーニングは生徒にとっても、評価する側にとっても難しいものであるであろう。そのため、実際に行われたアクティブラーニングが、時折半ば形骸化された学習方法のように捉えられてしまうのであろう。

今回、議題になった主体性の評価の対象である高校における活動もこれと同じであると感じる。

私も、積極性＝主体性とは考えてはいない。しかし、例え、活動の動機付けは主体性の無いものであったとしても、積極的に活動が続けていく内に、その積極性の深まりが主体性に変容すると捉えることが自然であると考え

3.2. 四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える

香川県立観音寺第一高等学校教諭 石井 裕基 氏

主体性の評価の難しさを伝えた報告であると共に、高校で生徒が行う活動で主体的な活動はどれなのかということを教員・生徒に選択させるようになる大学入試改革となるという指摘のある報告であったと感じる。また、評価にばかり目が行きがちではあるが、主体性の育て方が重要になることを強く感じた。そもそも教育というものは、何かを教えるというよりは、生徒が何かを学びとる場をつくるものではないだろうか。この場のつくり方は様々な方法があるであろうが、大事なことは教員も生徒と一緒に活動し、学ぶという姿を生徒に見せるということであろう。それこそが、本来の教育のあるべき姿なのではないかということを感じることができた気がする。

大学に入学してから、より学び、成長する生徒こそが望まれることを考えれば、今回の主体性の評価が盛り込まれる入試は、正に高大接続の学習の連携を問う入試になるであろう。

3.3. 開成における生徒の主体性

開成中学・高等学校教諭 有山 智雄 氏

地方公立高校に所属する自分にとって、あの有名な開成高校の報告ということで非常に興味を持って聞かせていただいた。報告の始

めの方で、「自主的行動、自立的行動で得たものが自己肯定感、自信の源泉になる。」という言葉には非常に納得をすることができた。

また、卒業生を何人か紹介していただいたが、在学中に主体性は評価されなかったであろうと言われた歯学部に進んだ卒業生の例は特に考えさせられた。これは、主体性の深まりが受験教科の理解度と比例はしないということ、そして、高校という枠においては発揮できる場がなかったということではないだろうか。

やはり、学力だけの評価、主体性のみでの評価で生徒の将来を図ることはできないのであろう。大学入試における主体性を含む学力の三要素の評価が、適切な配分でなされることを期待したい。

3.4. 東北大学AO入試における主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 宮本 友弘 氏

主体性を心理学より捉えた話から始まったが、現在の高校での推奨される教育方法の根拠を短時間で納得することができるものであった。

私の専門教科である数学の東北大学のAO入試の問題を見ると、始まった当初より大きく変化しているように感じている。始まった当初においては、大学生1年生の知識がなければ、完答は難しいのではないかという問題が出題されていたように感じていたが、近年は難解ではあるが、高校で学ぶ知識を組み合わせれば、解ける問題に変化している。これは、当初は、研究者と同じような思考を辿らせ、問題を解くことにより主体性を重点的に評価しようとしていたが、近年は出願書類、面接等に重点をおき、総合的に評価しようとしているのではないかと感じている。そうだとするならば、近年の東北大学のAO入試が、今回の大学入試改革で望む入試方法を先んじて行ってきたことを意味していると思われる。

そして、今までの AO 入試での合格者が良い結果を残していることを考えれば、高校における教育のある一つの道標として、東北大学のアドミッションポリシーを捉え、今後の一般的な大学入試に対応する高校での新たな教育方法を模索すべきであることを強く感じた。

4. 討議

主体性は内面のことであり、評価することは難しい。そして、その定義そのものすら難しいということを確認した時間であったように感じた。また、主体性を大学入試で評価する対象となってしまった段階から、生徒が意識をし、評価に合わせた行動をとってしまうという懸念も再び話されたが、私としては、正直それはそれでよいのではないかと考える。動機付けは何にしても行動し続けたことは評価すべきことであろうし、その真の成果は、将来身を結ぶかもしれない。それに、何事も新しいことを学ぶときには、真似ぶことが最良の方法であると私は考えているため、主体性を持った活動のように見える活動をするということも高校の教育の中では、評価できるものであるのではないだろうか。

しかし、大学入試改革のみならず、高大接続改革が行われている中、そのような活動ばかりで満足するわけにはいかない。授業や課外活動において、生徒が主体性を持った活動をすることが出来るか否かということは、その活動を通して、何を目的としてやるものなのか、何ができるようになるのか、何を学ぶのか、そして、どのように行うのかということを生徒が常に自分たちで意識して考えることができるということにかかっている。これらを考えることを習慣付けさせることが肝要であり、高校の教育現場において、最良の習慣付けの方法を試行錯誤し、模索していきたいと考える。

5. おわりに

このフォーラムに参加した今、各校の主体

性を育むための取り組み、そして、主体性についてのイメージを深めることはできたが、大学入試での主体性への評価については、正直未だによくわからない。学びに向かう主体性に対しての評価尺度・基準が研究され、開発されているようではあるが、何が評価の対象になるかの骨子を早く知りたい。もっともこれは、各大学のアドミッションポリシーに委ねられるとは思っているのであるが、受験生に求める力、そして入学に必要なその力の程度を明確に示していただければと思う。

今後、調査書は両面 1 枚のみという制限が撤廃され、高校時代の諸活動について、多様で具体的な内容が記載できるようになっていく。これを知ったときは、生徒のよさは伝えやすくなるが、各高校の教職員定数の削減が行われている中、教員一人一人の負担がかなり大きくなってしまっているのではないかと考えてしまった。しかし、高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」の運営が進んでおり、その労力が少しでも軽減されそうであることは喜ばしいことである。また、JAPAN e-Portfolio においては、メニューすべてに振り返りが入ることにより、生徒が過去の自分と向き合い、次のステップへ進むことができ、その変化つまり、学びに向かう力を教員が適切に評価できるというシステムになり得る可能性があることは、素晴らしいことである。

昨今の社会において、コンピュータとりわけディープ・ラーニングを取り入れた人工知能 AI の進化は目覚ましいものであり、現在の人の職業を将来、激的に変化させるであろうものとなっている。知識や計算だけならば、確実に AI が人よりも優れている。では、未来を担う生徒が獲得しなければならない力は何かといえ、ディープ・ラーニングでは獲得できない主体性ということになるのではないだろうか。だからこそ、今、主体性の評価を大学入試において評価するということであると私は考える。主体性は学校教育の場で培われなければならないものとするならば、学

校教育のよさを活かして、育まれるものでなければならぬ。学校教育のよさとは何かといえば、対話的であることに他ならない。高校における教育の基本は、授業である。その授業において、学校教育のよさである対話的であるというところに焦点を置き、日々の高校教育に尽力していきたい。

講評 5：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立山形北高等学校

教諭 井上 文

1. はじめに

平成 28 年度 12 月に中央教育審議会答申の中で、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」の活動の方向性を示して 1 年半が経過している。また、高大接続システム改革における大学入学者選抜改革の主眼は、各大学の選抜において、ディプロマ・ポリシー (DP)、カリキュラム・ポリシー (CP) をふまえたアドミッション・ポリシー (AP) に基づき、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の学力の 3 要素を多面的・総合的に評価するものへと改善することとしている。

今回の改革においては、特に共通テストの記述式導入や英語 4 技能の評価について、メディアの焦点が多く当てられているように感じる。自身も昨年度 3 学年進路を担当しながら、来るべき改革の波をひしひしと感じながら、諸研修会に参加し、自身の教育の振り返りや新入試に向けた学校としてのグランドデザインや目標とするコンピテンシーの設定に関わってきた。しかし、自身の中で明確なビジョンが出なかったのが、この「主体性の評価」である。そして今、新入試改革 1 期生となる 1 学年進路・探究活動の担当となり、その評価基準の設定やその信頼性、妥当性に悩んでいた矢先、今回のフォーラムへの参加のお話を頂いた。昨年度の個別大学の入試改革の難テーマに続き、この困難を極める「主体性評価」にあえて切り込んだ東北大学の潔さに心から敬意を示しつつ、考えたことを記したい。(論点が散らばってしまった点はお容赦いただきたい。)

2. 基調講演

「主体性とはなんだろうか ー大学入試における評価とその限界への挑戦ー」

佐賀大学アドミッションセンター 西郡 大 氏

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」は、その評価方法として面接、小論文、グループディスカッション、プレゼンテーション、調査書、推薦書、志望理由書、資格・検定試験、各種大会や表彰等の記録、4 年間の学修計画書等を活用した選抜方法が考えられている。しかし、志願者数が多数の一般入試においては、このような評価方法で選抜を実施することは人員、費用、時間の制約で難しいと考えられてきた。これまでの多くの大学の一般入試でも、多くの受験生に対して短期間で合否判定できる効率性がまずは重視されている。よって、教科・科目の学力検査の得点が主軸となり、数値で採点結果を出せる試験がフェアかつ客観的な選抜であるとされてきた。その点は個人的にも否定はしない。しかし、そのような中で今後、学力の三要素を多面的に評価することの限界に先駆けて挑戦している佐賀大学の取り組みは非常に興味深い。

私たち教員は伝統的に「主体性」という言葉を好んで使ってきたように感じる。しかし、主体的な姿とは具体的にどのようなものかについては、個々の教員間で正直しっかりと共有してきてはいない現実がある。西郡氏も個人個人の主体性認識は多様と述べており、高校と大学、企業での主体的行動の捉え方をそれぞれ定義されていた。一方で個人的解釈としてではあるが、「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」主体性の解釈として挙げられていた。ただ、その評価を行う作業には非常に多くの課題が存在すると指摘している。主体性に関わる資質が点数化される場合においても、ボーダー層への影響であり、主体性評価の影響力は限定される、また基準点以上の者を対象に主体性の評価を行う場合で

も適切な基準点を設けるのは難しいとしている。結論として、主体性の評価は技術的に難しく（評価技術の信頼性・妥当性の研究努力は必要だとしても）、限定的な層対象になる可能性があること、受験生にとって、適度な動機付けとして機能することを目指すものということだ。知識・技能・思考力・判断力・表現力を主軸として「評価」し、主体性に関しては自らの高校時代の取り組みを「振り返る機会」とするという同氏の見解は、現在主体性が過大認識されがちな現場において、冷静になる必要があることを痛感させられる。また、選抜目的そのものよりも、自身の振り返りが将来への学びへの意欲へつなげる、という点には大いに共感できる。生徒が自分の高校 3 年間の軌跡を客観的に振り返り、言語化するというプロセスの教育的効果は決して小さなものではない。今回の改革が入試方法そのものに影響するのではなく、子どもたちのその後のより良い生き方そのものに影響するとしたら、喜ばしいことではないだろうか。

今後の一般入試においては、大学はその妥当性・信頼性を示すためにそれぞれの AP を定め、選抜基準を入試要項等で明確にする必要がある。「学力の三要素」を念頭に置いて、高校在学時に「どのようなコンピテンシーを、どのようにして身につけてきた生徒」を求めているか、入学後に「どのようなコンピテンシーを、どのようにして身に付けられる学生」を求めているか等を具体的に AP に盛り込んでいくこととなる。高校ではその各大学が示す AP を十分に研究し、西郡氏のいう「欲しいと思える人材を含む集団の形成」に積極的に携わる必要がある。高校教育の中で生徒の主体性を発芽させ、大学での大きな開花に備える接続のあり方を今後もぜひ大学関係者と意見を交わしながら、高校現場でも責任を持って研究していきたい。接続への責任を伴う我々の意識改革こそが、高校現場では今求められているのではないだろうか。

3. 現状報告 1

「目に見える「積極性」は主体性なのか？ ～地方に生きる高校生の現実」

青森県立田名部高等学校教諭 千葉 栄美 氏

千葉先生のタイトルは今主体性評価に翻弄されている学校現場では大きなテーマであろう。制度の変更前に高校教育が見直すべきことがあるのではないかと、教師自身が問われているのではないかと、という点はもっとも共感できる。私自身も地方小規模校の教員であり、現在探究活動なども含めた学校のグランドデザインに携わる身として、そのゴールの在り方には非常に不安を感じる瞬間がある。課外活動の不平等性や目に見える成果（エビデンス）のみが点数化されることへの不安、目の前の積極性の妥当性（現状方向 4 でも出てくる疑似的内発動機にも関連する）である。そのような不安が取り巻くなかでも、田名部高校の進路通信を見ると、the プロフェッショナルや地域連携に関する講演やワークショップなど、いかに様々なチャンスを生徒に提供しているかがわかる。千葉先生にお伺いしたところ、県もそのような活動に対してスキルアップに対しての単位認定を行っているという。まさに県を挙げてのバックアップである。

千葉先生の進路課通信の結びの言葉にこのようなものがあつた。「よいモデルを見て、感じて、そして勇気を出して自分の言葉を語りだしませんか、大人になるために。強くなるために。自由になるために」。様々な経験を重ね、省察し、言語化する。この営みには必ずや人を育てる力がある。主体性の評価以前の非常に大事なコンセプトであり、のちの討論での千葉先生の「主体性は現状のままではいけないのか」と強く重なる。

「教育は 0 を 100 にすることではなく、100 の価値に気づかせてあげること」これは私が好きな言葉であり、千葉先生の取り組みに重なる言葉でもある。ないものを育てるの

ではなく、あるものに気づかせて外へ導き出す、そして彼らの口で未来を語らせる。そんな教育を目指したいと千葉先生の発表を見て心から感じた。

現状報告 2

「四国の進学校で生徒の『主体的』な活動を考える」

香川県立観音寺第一高等学校教諭 石井裕基 氏

石井先生の指摘の興味深い点は、生徒の主体性は多様性であり、よってそれらを一律に同等に評価は不可能であるという仮説の下、校内でアンケートを実施した結果、主体性の育成には賛成ではあるが、それを入試に利用することはふさわしくはない、もしくは参考程度にすべきだという意見が一番多かったという点である。実際、このフォーラムに本校でも複数名参加しているが、学校に戻ったのち、この議論は校内でも暫く続いた。結局、共有できる「共通の結論」は出なかった。しかし石井先生の報告の中で特に共感できたことは、実は教員側の改革が求められているのではないか、という点だ。正直、この改革で私たちはこれまでの指導を振り返り、グランドデザインやコンピテンシーの設定に向けて現在のシステムを精査し、取捨選択し、将来に向けてのビジョンを熱く論じるようになってきている。教員が変われば生徒も変わる、そんなメッセージを感じる報告であった。

現状報告 3

「開成における生徒の主体性」

開成中学・高等学校教諭 有山 智雄 氏

東大合格者日本一を誇る開成中学・高等学校の目標の一つは自主・自律である。自主性（有山先生は主体性とイコールとされていた）は昔から大切にされてきたものであること、そしてその普遍性について指摘されており、改めて原点回帰の重要性を感じた。自分で勉強することそのものが主体性を持って

学ぶ態度に直結する。有山先生の説明を聞きながら、ふと自主性と主体性の違いについて思いが及んだ。私の中での自主性とは、やるべきことを人に言われる前に率先して自ら行動することである。主体的な人とは目的をクリアにした上で、苦しい状況下であっても目的を果たすためには何をすべきかを自分で考え、責任を持って最も効果的な行動をすることが出来る人のことである。私の定義が正しいかはわからないが、少なくとも明確なのは、生徒達には生涯に渡り後者のスキルを持っていて欲しいということだ。さらに主体的な人であり続けるためには、自分で未知のものごとを解決するためのロジカルシンキングや、今の状態を批判的に見るクリティカルシンキングも重要でもある。これらの力は学力と相関性が強いことは周知の事実であり、改めて普段の授業の在り方に回帰する必要があると感じた。

現状報告 4

「東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題」

東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門入試開発室准教授 宮本友弘

東北大学の AO 入試は「研究大学として」の AP の設定が明確である。学力と同時に豊かな人間性、想像力、発想力、倫理性、主体的学習意欲と協調性、学問に対する好奇心が問われる。現状 3 の開成高校でもあった通り、学力＝主体的な学習行動が反映されているものであるし、研究者志向には主体性の要素は含まれているという東北大学の AO 入試の在り方は納得できる。AO 入試合格生のその後の学業への主体的取り組みは周知の事実であり、現在の入試方法の在り方は信憑性の高いデータの取り方と言える。

この報告の興味深い点は出願書類の評価に正直に向き合った点である。成果かプロセスか論、評定者の信頼性、e-Portfolio の展望は明るいのか、教員の書類作成の展望、主体

性の評価にはまだまだ解決の糸口が見えない課題が山積みだ。また評価に視点が行けばいくほど、評価に行動を合わせすぎてしまい行動が形骸化することが懸念されることは千葉教諭の指摘と一致する。やはり主体的評価の妥当性は現時点では弱い。宮本先生が指摘した疑似内発的動機づけについても、探究活動等が教員側が未熟なまま進行している場合、一歩間違えれば陥る可能性は多々ある。しかし同時に、教師の助けなしで振り返り、省察、言語化を十分にできるか、となると難しいだろう。

誰もが納得する主体性評価はまだ遠いが、現行の東北大学の AO 入試制度には生徒を主体性の芽を育てる力があると高校側が感じていることは事実である。今後ともぜひ明確なメッセージを発信し続けてほしい。

4. おわりに

大学時代に日本の学校教育においては主体的学びが育ちにくいのではと海外の友人に指摘されたことがある。学びとは真似るという語源から由来しており、儒教の影響も加わり、教わったことに忠実に従うことが尊重されてきた歴史がある。その結果、受動的文化が形成され、主体性が徐々に失われていった。さらに数値に偏った受験方式の影響でインプットが過剰に評価される社会が作られたことは周知の事実である。当時の私はその質問に言い返すことはできなかった。しかし今こうして振り返ると主体性は今も昔も普遍的な価値観であることに気づく。

しかしながら、大きく時代は転換期を迎えている。来たるボーダーレス社会においては、異国・異地域の方々との協働・連携が求められる。技術はさらに進化・細分化していく。全体像を俯瞰し、自分の専門分野と異なるものを結びつける能力が必要とされ、まさに自己完結が出来ない時代が到来する。ICT 化の進展等により職場環境が整備され、ツールもより便利なものに進化してきている。そのような利点と同時並行で、AI による機械化・

効率化による働き手への変化は待ったなしで進んでいる。このような急速に進化する時代の中で、これから社会を支えていく若者に求められる業務の質がより高度化していくのは当然である。自らが主体者となり、今まで以上に周囲に働きかけ、巻込んでいく行動力が求められていくだろう。社会で求められる能力も一度修得すればそれで終わりとはならず、新しい知識や環境の変化への適応力、他者との関係を調整する力、複雑化する課題に対する解決能力などは、生涯にわたって自ら学び続けることで培われる。そのような子供たちを育てている教育者の我々には、当然未来に対する大きな責任がある。

教育界も当然大きく変化している。平成 33 年度入試で学力三要素の評価に向けた改善が示されており、平成 37 年度入試では、主体的、対話的かつ深い学び等アクティブラーニングが拡大する新学習指導要領で学んだ生徒達が受験することになる。各大学で様々な課題を抱えつつも、学力三要素の評価を行うより丁寧な選抜へ移行するために多くの研究がなされてきている。我々高校の教育も当然現在の教育の質の検証を行い、接続を意識した考えのもと、継続すべき点、変化させるべき点を精査し、進んでいく必要がある。

フォーラムの最後に東北大の滝澤理事が、主体性の測定の難しさを指摘しつつも、国の方針に流されることなく、高校と大学で研究を重ね、信頼性のある入学者選抜がなされることが大切だと語っていた。先に述べたが、主体性が選抜目的のものになるのではなく、主体性を高校時代に生徒の中に芽吹かせ、大学教育で花開かせるという長期スパンでの教育接続こそが今求められているのではないだろうか。大学との連携は高校現場ではまだまだ十分には進んでいない。私自身、このフォーラムをきっかけに、教育全体像をしっかりと俯瞰した上で、大学接続へ向けて高校現場からも積極的に大学と関わっていくべきと考えている。

最後に、この原稿を書きながら、ふと手にしたアインシュタインの名言集からいくつか言葉を紹介し、この原稿を閉じたい。

○教育の目的は、「社会が直面する最重要課題の解決」に力を尽くすために、自ら考え行動できる人間を育てることでなければならない。

○過去から学び、今日のために生き、未来に対して希望をもつ。大切なことは、何も疑問を持たない状態に陥らないことである。

○他人のために尽くす人生こそ、価値ある人生だ。

講評 6：第 28 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

福島県立会津高等学校
教頭 田母神 賢一

1. はじめに

この「高大接続シリーズ」のフォーラムは、「本当に新しい大学入学者選抜が予定通り実施されるのか」「いったいどのように対応すればいいのか」という高校現場の先生方の思いと、少子化に伴う受験人口の減少と文部科学省からの改革「圧力」が進む中、明確なアドミッションポリシー等の方針のもと、「本学にマッチした学生にいかに数多く受験・入学してもらうか」という大学側の思いをつなぐ情報共有・意見交換の場として、大変有意義な機会であると考えている。

新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を促すため、学習・指導方法の抜本的改善と、学力の 3 要素をバランスよく育成・評価することなどが求めている。そして、大学入学者選抜改革では、学力の 3 要素を多面的・総合的に評価して入学者を選抜することを求めている。そこで各高校では、学力の 3 要素の育成・評価という視点からの教育活動全般の見直しが必要になる。本校でも研究部という部署を中心に準備を進めているが、とりわけ頭を悩ませているのが、今回のテーマである「主体性」の問題である。主体性をどう考え、高校現場でどう育み、それをどう評価したらよいのか、さらに大学ではそれをどう評価するのか、これらの問いについての何かヒントが得られればと思い、期待して参加した。

2. 基調講演

「主体性評価」にどのように向き合うか～
地方国立大学の立場から～

佐賀大学アドミッションセンター教授 西
郡 大 氏

開会前、周りの先生方との雑談の中でも「主体性」とは何か、それをどう評価するのかについての考えは実に様々だった。大学入試における「主体性」とは「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」だとする氏の解釈は、そんな私の心の中の“モヤモヤ”の一つをすっきりさせてくれた。これは、日頃生徒の活動の様子を見ていると納得のいくものである。また、それをどう評価するのかについては、「行動主義的立場からの評価」と「プロセス重視の立場からの評価」という二つのアプローチがあるという話であった。特に、プロセスを評価するためにはやはりポートフォリオの活用が重要であることも再認識した。本校では、県の指定事業（復興と未来を担うグローバルリーダー育成事業）を受け、東北大学高度教養教育・学生支援機構の皆様のご協力を得ながら、これまで 1・2 年生を中心に地域課題を探究する課題研究に取り組んできたが、その中で意識的に活動記録の蓄積を行ってきた。生徒は、フィールドワークなど緒活動が終わるごとに自己評価（個人内評価）を行うとともに、活動を自ら振り返り文章に書きとめてきた。このことは、活動目標・目的の理解と次の活動への意欲喚起につながっていたようである。活動の見通しを生徒自身に持たせることや自己評価の「推移」を記録させ「見える化」することは、主体的な学びに関する取組の効果的な運営や評価においても不可欠であると痛感している。

また、佐賀大学の「特色加点制度」の事例も紹介された。生徒自身が「特色加点申請書」を書くことを通して、受験する学部や大学を知るための機会となり、本当にこの大学・学部で学びたいのかを自ら考え判断することが

できると思う。選抜的目的よりも進路を見つめ直す機会と位置付けているということで、大変教育的な選抜方法だと感じた。このような申請書をじっくり作成した上で入学した生徒は、大学入学後のミスマッチも防げると思われた。

さらに、一般入試の制度設計で意識すべきこととして、主体性評価は過大にとらえず、受験生にとって「適度な動機付け」として機能することを目指すことが重要だという氏の主張は、大いに賛同するところである。主体性というものが、評価する人、分野、背景などの違いによって様々であるという現状からすれば、主体性を直接評価する際の可否への影響力は大きくはならないし、またなれないと思うからである。ただし、主体性を評価するというメッセージは高校教育に与える影響という意味でも極めて重要だと考える。

各大学は、2018年度中に、調査書や提出書類等をどのように活用するのかについて学生募集要項で予告・公表することになっている。生徒のキャリア教育と学びへの意欲喚起のためにも、求める資質・能力がどのように入試に反映されるのかといった評価の位置付けを具体的に明示した上で、主体性を評価するというメッセージをぜひ発信していただきたい。

3. 現状報告 1

目に見える「積極性」は主体性なのか？～ 地方に生きる高校生の現実～

青森県立田名部高等学校教諭 千葉 栄美氏

長らく主体性の育成に取り組み進学実績を挙げている田名部高校の取組は、大変説得力があり参考になった。学校生活における「積極性」は、必ずしも「主体性」をあらわすものではないこと、主体性の涵養には時間がかかることなど、高校現場に携わる者として共感を覚えることばかりであった。またそうで

あるならば、例えば新しい調査書等における主体性の評価としては、活動実績の「量」よりも、その記載された実績の個に応じた「ストーリー」がますます重要になってくると再認識させられた。

また、「主体性は自分のためではなく、他人や社会のための主体性こそ必要だ」という言葉は重要で、これは責任と置き換えても良いと思われる。主体性の育成に積極的に取り組むことは、報告の中にも紹介されたように、教員の疲弊や主体的であることを求め続けられる生徒の苦悩があると思われるものの、集団生活が基本である学校という場合は、主体性を育む土台があるということと、工夫次第で学校の置かれた状況に応じた「オリジナルの主体性」の涵養への可能性も感じた。そうになると、やはり氏の述べられたように、生徒に求める前に教員自身の主体性と取組への意欲がまず必要であると痛感した。

4. 現状報告 2

四国の進学校で生徒の「主体的」な活動を考える

香川県立観音寺第一高等学校教諭 石井裕基氏

主体的な活動に関する校内アンケート結果が興味深かった。主体性を評価する入試について多くの先生方が疑問や不安を抱いていることが明らかとなり参考になった。一方で、「主体性を高校で評価する必要なし。大学がすべき」という意見も見られるなど、日頃の授業や教育活動に対する教員の姿勢が自由記述に反映されているとも感じた。また、主体性の評価方法については、文章による評価が適切と考える先生が一番多かったが、このことは客観的な評価が困難であることの証左であるとともに、主体性を評価する上では、活動実績そのものよりも、活動に対する生徒一人一人の「関わり方」や「活動の結果に至るプロセス」を重視していることが示唆された。

「主体性を評価した入試は、探究活動を高校現場に根付かせたいためではないか」という氏のまとめには、全く同感である。これは、生徒を変えるためには教員（授業・カリキュラム）をまず変えなくてはならないという新学習指導要領の意図にも合致するものだからである。そう考えると、SSH や SGH 等の指定を受け積極的に課題研究に取り組む高校においては一西郡氏が講演で指摘されたように主体性が可否を決定づけるようなものではないとしても一主体性を評価するための「道具」が揃っている分、新しい大学入学者選抜においてはやはり有利ではあるというのが正直な感想である。

5. 現状報告 3

開成における生徒の主体性

開成中学・高等学校教諭 有山 智雄 氏

氏は主体性を自主性と捉えており、開成高校では、勉強はもとより運動会や部活動などでも生徒が自主的に活動しており、教員はそれを後押しする役割だということであった。自ら動き自ら決める「風土」が脈々と受け継がれていると強く感じた。このことは、開成高校には入学の段階から自主的に学ぶ姿勢が身に付いた生徒が多いことを示唆する一方、そうした学校の「風土」や主体性を育む教員の「仕掛け」等の環境によって生徒の主体性がより高められることを物語っていると思われた。よく言われることではあるが、自主性の名のもとに「放任」しては生徒は育たない。

また、達成感が自己肯定感や自信の源泉となり、自信が主体性を形成する土台となるという考え方のもとで、学校経営を考えていく必要があるという氏の指摘は大変参考になった。達成感を得られる場面は生徒によって当然異なるはずである。授業や学校行事・部活動等様々な場面において、個々の生徒に応じた達成感を得られるよう仕掛けること、そし

て小さな達成感を積み重ねていくことが今まで以上に大事であると感じた。

6. 現状報告 4

東北大学 AO 入試における主体性評価の現状と課題

東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 宮本 友弘 氏

一言でいえば、東北大学の AO 入試は、これまでも主体性を十分評価してきたこと、入学者選抜改革がどう進もうと今後もこれまでの方針を継承していくことが改めて宣言された場であったように思う。実際、明確なアドミッションポリシー（AP）のもとにこれまで学力の 3 要素が評価されてきた入試だと思う。ただ、今後の大学入学者選抜の方向性と東北大学の入試がこれほどマッチしている理由の一つは、東北大学が求める学生像（学力重視、研究者志向）そのものが、主体性や思考力・判断力等の評価軸と親和性が非常に高い内容になっているからこそであると思われた。アドミッションポリシーをどう高校生に示し、それをどう入学者選抜に反映させ、どう定着させるかが今後の大学経営にも大きく関わることは間違いないと改めて感じた。

7. 討議

ねらいは、「主体性」とは何かについて入試の視点から見直すというもので、多くの興味深い議論が行われたが、特に印象深かったのは、例えば「入試で必要・有効だから生徒会長に立候補する」など、主体性の評価が生徒の活動に影響を与える問題についてである。手段が目的化していればある意味そういえるものの、自分にとって価値を見出していればその活動は自律的ともいえるということであった。そうだとすれば、生徒の活動内容の深化と継続性への支援が、我々教員の指導上のポイントになってくると思った。

「(生徒の) 活動結果だけでなく、プロセス

も重視する」というのは、我々教職に携わる者としてなじみの深い生徒理解・評価の原点であるが、公平性が求められる入試でのプロセス評価は難しいとなれば、主体性とは何かを追い求めるよりも、主体性がどの程度の配点で評価される（と予想されるか）を踏まえることがやはり現実的であると感じた。

8. 最後に

冒頭のあいさつで大野英男総長から、「主体性をどう位置付けて評価するかは、各大学の教育の考え方と方向性を示す上で極めて大切な意味合いがある」という言葉があった。この「大学」を「高校」に置き換えればそのまま高校現場にも言えることであると思う。主体性の位置付けや評価の問題は、自校の特色化にもつながることに気付かされた。

また、新学習指導要領について、メディア等では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善がクローズアップされているが、その実現のためには、私は「生徒ファースト」の考えのもと、どのようにして学校独自のカリキュラム・マネジメントや学習評価の充実を行うのかということがより重要であると考え、そして地方の公立高校としては、今回ご発表いただいた各高校の事例を大いに参考にしながら、学校の特色化と生徒の学習評価をしっかりとリンクさせる必要があると強く感じた。新たな改革に振り回されるのではなく、自校の特色ある取組そのものが、結果として新しい大学入学者選抜にもつながっていくという形を理想としながら、今後対応について更に研究していきたい。

今回参加の機会を頂いたことを東北大学のフォーラム関係者の皆様に深く感謝いたします。

アンケート集計結果

平成30年5月21日

第 28 回東北大学高等教育フォーラムアンケート (回収数 202, 回収率 54.4%)¹

1. 御所属

(1) 高校 : 135 名 (66.8%) (2) 大学 : 49 名 (24.3%) (3) その他 : 18 名 (8.9%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 189 名 (94.5%) (2) どちらとも言えない : 10 名 (5.0%)
(3) 改善すべき : 1 名 (0.5%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 166 名 (83.4%) (2) どちらとも言えない : 33 名 (16.6%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 165 名 (84.2%) (2) どちらとも言えない : 26 名 (13.3%)
(3) 改善すべき : 5 名 (2.6%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 119 名 (66.1%) (2) どちらとも言えない : 42 名 (23.3%)
(3) 改善すべき : 19 名 (10.6%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 5 名 (2.6%) (2) ちょうど良い : 174 名 (91.1%)
(3) 長すぎた : 12 名 (6.3%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

¹ ダブルマーク、無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマはいかがでしたか.²

- 「主体性」というテーマの色々な意見を聞いた（高校，よかった）。
- 「主体性」というテーマは良かったが，「評価」にシフトする必要はなかったと思う（高校，よかった）。
- 「主体性」というとらえ方が難しいテーマでありましたが，考えるきっかけとなりました（高校，よかった）。
- 「主体性」という言葉を改めて考える機会になった（高校，よかった）。
- 「主体性」と評価する前に「主体性」とはどのようなものなのかについて考えるべき（高校，よかった）。
- 「主体性の評価」という様々な現場での大きな問題点に向き合ってもらえた（高校，よかった）。
- 「主体性の話」と「評価の話」をクロスさせることで結論が見えてしまっている（その他，どちらとも言えない）。
- あいまいで難しいテーマの取り組みがとても興味深かった（高校，よかった）。
- あいまいなものはあいまいなままだということが改めて分かった（高校，よかった）。
- アクティブラーニング等の言葉のみが一人歩きして欲しい。日頃から指導に漠然とした不安を抱えていたため（高校，よかった）。
- エビデンス化しにくい「主体性」というテーマについて多角的に理解を深められたから（高校，よかった）。
- タイムリーでよい様々な観点から話が聞けた（高校，よかった）。
- タイムリーなテーマだと思います（大学，よかった）。
- タイムリーな話題だったと思います（高校，よかった）。
- 課題について再認識した（高校，よかった）。
- 改めて東北大学 AO 入試の狙いが分かった（その他，よかった）。
- 概論でなく具体的な話でよかった（大学，よかった）。
- 観念的概念的なものに対して議論する機会を持てた（高校，よかった）。
- 教員として，一個人（親）として大変関心あるテーマである（高校，よかった）。
- 現在，一番の悩みどころだったから（高校，よかった）。
- 絞り込まれたテーマを掘り下げられた（高校，よかった）。
- 高校，大学とか，手探りであることがわかりました（高校，よかった）。
- 高校の教員として考えていくべき事について，新テストになる学年が入ってきたタイミングで実施していただき，よい機会となった（大学，よかった）。
- 高校現場でも話題，検討されている内容だから（高校，よかった）。
- 今の改革に係わる大きなテーマであり，高校側，大学側の意見を伺えたので（高校，よかった）。
- 主体性という評価について様々な立場から考えることができたから（高校，よかった）。
- 主体性とその評価は非常にタイムリーな内容であるから（高校，よかった）。

² 末尾の括弧内は所属，選択された御意見。

- 主体性について、ぼやっとしていたが、色々な話を用いて、もう一度整理してみたいと感じました（高校、よかった）。
- 主体性の育成に向けて、今年度から始めたことが多いが（高校、よかった）。
- 主体性を測ることの難しさをあらかじめ実感考える機会になった（大学、よかった）。
- 主体性を改めて考える機会になりました（その他、よかった）。
- 主体的、主体性のとらえ方について考えが深まった（高校、よかった）。
- 先生方の本音の声が聞けました（高校、よかった）。
- 多くの高校教員が悩んでいるテーマだから（高校、よかった）。
- 大学側の評価の考え方、高校現場の不安（その他、よかった）。
- 大学入試に焦点が絞られていたから（高校、よかった）。
- 大学入試改革の中で、もっとも問題をはらんだ部分だと考えています（高校、よかった）。
- 難しいテーマだが重要（高校、よかった）。
- 難しいテーマだと思っていたが、少し整理できた（高校、よかった）。
- 難しかった（高校、よかった）。
- 入試改革に沿ったテーマだったから（その他、よかった）。
- 入試改革に取り込む上で最も難しいテーマであると考えているため（大学、よかった）。
- 悩んでいた内容だったから（高校、よかった）。
- 評価できないという共通意見を知ることができた（その他、よかった）。
- 評価について、悩むところがあったので、難しさを共有できた（高校、よかった）。
- 普段曖昧にしているテーマに触れてよかった（その他、よかった）。
- 平成 33 年度入試に向けてとてもよいテーマだったので（高校、よかった）。
- 本学の関心の高いテーマがありました。講演者の方々が様々なポジションで「主体性」を語っていただき、大変勉強になりました（大学、よかった）。
- 問題の構造や深さがよくわかりました（大学、よかった）。
- 「主体性」という漠然としたテーマゆえに、明確な方向性が見えにくかった（高校、どちらとも言えない）。
- 「主体性」の評価について悩んでいるところでした（高校、よかった）。
- 「主体性」の評価に対して本音が聞けた（大学、よかった）。
- 「主体性」の評価の「限界」は明確化したが「挑戦」が見えなかった（高校、どちらとも言えない）。
- 「主体性」を通して高校と大学双方の考え方を知ることが出来た。また、入試に向けてのイメージについても触れられていたため（高校、よかった）。
- 「主体性の評価」が今一番気になる話題であったため（高校、よかった）。
- しかし、大学の先生の話ももう少し聞いて見たかった（上位、中堅の大学の先生）。（高校、よかった）。
- そもそも何かということを考えさせていたと思う（高校、よかった）。
- タイムリー（高校、よかった）。
- タイムリーである（新入試）。（高校、よかった）。
- タイムリーであることこの上ない（高校、よかった）。

- テーマは知りたいことだが、その問いになかなか答えてもらえない（報告者が各々の解釈をするため）。（高校、どちらとも言えない）。
- テーマ自体は良い、重要である（高校、よかった）。
- テーマ設定も（高校、よかった）。
- とても評価しづらいテーマであったので（高校、よかった）。
- とらえ方に悩んでいたテーマだったから（高校、よかった）。
- ホットな話題（高校、よかった）。
- よきにしろ悪しきにしろ注目の「テーマ」である（高校、よかった）。
- よく使われているものの具体的にはイメージしづらいものをテーマとして扱ってくださったので、教育活動の中でどのように主体性というものをとらえるべきか、というヒントになりました（高校、よかった）。
- 意味はなくとも切実な問題（大学、よかった）。
- 一人で考えていても答えが出ないテーマがだから（高校、よかった）。
- 一番クローズアップされていながら評価が難しい「主体性」に切り込んだ点（高校、よかった）。
- 一連の入試制度改革の中で、最も具体性がなく測りにくいテーマについて、あえて取り上げていただいたことに感謝したい（大学、よかった）。
- 各高校の事例とともに、先生方の考えも知ることができた（大学、よかった）。
- 各大学にとって主体性の評価は大きな課題（大学、よかった）。
- 喫緊の課題である「主体性」フォーカスしていたので（高校、よかった）。
- 具体的な新たな評価方法の事例などはなかった（高校、どちらとも言えない）。
- 現在、高校現場における重要課題のひとつなので（高校、よかった）。
- 現在、多くの大学・高校の関心事であるため（大学、よかった）。
- 言葉が一人歩きしているが、その意味を様々に考える機会となった（高校、よかった）。
- 高校1年生の総学担当者として、「主体性」という語の内容をどう捉えるか迷いがあったため（高校、よかった）。
- 高校の現状が伺えた（大学、よかった）。
- 高校現場で最も気になっているテーマであった（高校、よかった）。
- 今、求められている大切なテーマであるのでよい。深めてもらいたい（高校、よかった）。
- 今、実際に検討している重要ポイントをテーマにされていてよかった（大学、よかった）。
- 今後の大学入試に向けて重要なテーマであり、具体的な取り組みに課題を感じているテーマだから（高校、よかった）。
- 佐賀大学西郡先生のお話が本質的（高校、よかった）。
- 時宜に合致し、高校現場の大きな課題であった事（高校、よかった）。
- 時流を捉えていた。現場での実践につながるものだった（高校、よかった）。
- 自分自身で考えることができた（大学、よかった）。
- 自分自身の考えと重ね合わせて理解ができた（高校、よかった）。
- 主体性がどう評価できるのかは今まさに求めている課題であるので、大変興味がある（高校、よかった）。
- 主体性が一概に評価できない事が分かった（高校、よかった）。

- 主体性とは何かと実際に考えたことがなかったから（高校，よかった）。
- 主体性と言いながら，やらされ感があったから（高校，よかった）。
- 主体性について，どのような認識かをすり合わせる良い機会となった（高校，よかった）。
- 主体性について改めて考えるきっかけとなった（高校，よかった）。
- 主体性について考えられた（高校，よかった）。
- 主体性について高校側，大学側からの視点を学べた（その他，よかった）。
- 主体性に関してイメージとしてでしかとらえたことがなかったので，良い機会となった（高校，よかった）。
- 主体性に興味があったから（高校，よかった）。
- 主体性のとらえ方について，基本的な考え方が分かった（大学，よかった）。
- 主体性の定義が曖昧であるというのが現状だということがよく分かった。結局のところ，志望動機＝主体性と考えれば現在の入試から変更する必要性を全く感じない（高校，よかった）。
- 主体性の評価を選んでいるのは適時である（その他，よかった）。
- 主体性は日本人にとっても必要！（高校，よかった）。
- 主体性をどう評価すべきか全くイメージが湧いていなかった（高校，よかった）。
- 主体性をとらえ直しつつ，教育のあり方を考えられた（高校，よかった）。
- 主体性を考えるうえでとてもよかった。共働性とはちがうなど（大学，よかった）。
- 主体性を評価するということに対し，各校がどう考えているのか参考になった（高校，よかった）。
- 旬なテーマであった（高校，よかった）。
- 焦点化しにくいテーマ設定であった（大学，どちらとも言えない）。
- 西郡先生の発表（高校，よかった）。
- 大学が「主体性」をどのように評価していくのか，知りたかったので良いテーマだと思った（高校，よかった）。
- 大学入試制度改革，学習指導要領の改定などに取り組むなか，非常にタイムリーなテーマでした（その他，よかった）。
- 抽象的で各校で苦慮していましたが，少し形が見えました（高校，よかった）。
- 定義されないものに，限界とか挑戦というサブテーマの設定は不適と思うから（大学，改善すべき）。
- 答えがない，多面的なテーマで考えさせられました（高校，よかった）。
- 入試改革で気になっていたテーマだから（高校，よかった）。
- 悩んでいるポイントが，発表者の方々の共通しておりヒントを得られた（高校，よかった）。
- 評価の難しい観点に関して，貴重な意見がきけた（高校，よかった）。
- 評価の難しさを感じているので（高校，よかった）。
- 不明だった部分がだいぶ整理されて理解できた（高校，よかった）。
- 普段あいまいになりがちになるものだけに興味をもった（高校，よかった）。
- 本校でポートフォリオや主体性評価に関する議論がちょうどスタートしたばかりだったので参考になった（高校，よかった）。

- 様々なとらえ方がある”主体性”について知ることができた（高校，よかった）。
- 立場によって異なった解釈をきくことができた（高校，よかった）。
- 論点が明確になりました（高校，よかった）。

話題になっているときでタイムリーであった（高校，よかった）。

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- 「マッチング」というワードがストンと入りました（高校，よかった）。
- 「主体性」は評価しにくなもの。入試にとってもその扱いは難しい（その他，よかった）。
- 「評価」論としても「主体性」論としても中途半端な話だった（その他，どちらとも言えない）。
- e-ポートフォリオの使用について期待が高かったため（高校，どちらとも言えない）。
- まさに感じていることという印象です（高校，どちらとも言えない）。
- 一部，講演内容が速くついていけない所があったため（高校，どちらとも言えない）。
- 課題が明確に伝わった（高校，よかった）。
- 学術的観点からの内容に納得できた（高校，よかった）。
- 具体的なお話しがとてもよかったです（高校，よかった）。
- 具体的な話が聞けた（高校，よかった）。
- 具体例を通して現状考えられていることがわかった（高校，よかった）。
- 結論が出るようなものではないものの，方向性がみえて有意義だった（高校，よかった）。
- 考えるべきテーマお整理されており，その後の報告につながっていた（高校，よかった）。
- 細かく話していただけた（高校，よかった）。
- 主に，一般入試における「主体性」評価について考えることができた。大変参考になりました（大学，よかった）。
- 主体性の評価について論理的に分かりやすくお伝えいただいた（大学，よかった）。
- 主体性の評価の困難さ，課題等わかりやすい講演だったから。せっかくの機会なので，もう少し詳しい（時間をとって）。話を伺いたかった（高校，よかった）。
- 主体性の評価は難しいと思いながらも，挑戦している事例だと思いました（高校，よかった）。
- 主体性の理論背景がよくわかりました（高校，よかった）。
- 主体性評価が限定的である面も知ることができた（高校，よかった）。
- 主体性評価の課題とその解決策の見通しが非常に分かりやすく話われた（大学，よかった）。
- 主体性評価の難しさといいつつも，それを前向きに検討していく姿勢に勇気づけられました（大学，よかった）。
- 主体的評価は，「適度な動機付け」として機能することを目指すことに共感するが，具体的にどうすればよいのかが分からなかったから（高校，どちらとも言えない）。
- 先進的に取り組んでいる大学が何を求めているか聞けたから（高校，よかった）。
- 千葉栄美先生の話し，現状がとくに（その他，よかった）。
- 総バナ的で響かない，基本的方向性の確認としては妥当だが（高校，どちらとも言えない）。
- 多面的に分析をされていた（高校，よかった）。

- 大学と高校の捉え方の違いが明確になった（その他、よかった）。
- 大学の「主体性」をどう評価しようとしているのかの一例を知ることができた（高校、よかった）。
- 大学の実践に基づいた本音が聞けた（高校、よかった）。
- 大学の立場の方の具体的な考えが聞けた（高校、よかった）。
- 大学側の課題方向性が見えた（高校、よかった）。
- 大学入試における評価の考え方、課題、具体的事例（高校、よかった）。
- 大変具体的かつ合理的な話でとてもよかった（高校、よかった）。
- 地方、首都圏、公、私立、様々な学校を比較するのはよい（高校、よかった）。
- 地方の国立大学においては受験者集団をいかに理想のものに近かせるかということを書いた（高校、よかった）。
- 地方国立の現状がわかった（その他、よかった）。
- 入試制度を検討する上で考慮すべき点が聞けた（大学、よかった）。
- 認識の共有ができた（その他、よかった）。
- 評価についてあらためて考えることができた（高校、よかった）。
- 評価へのアプローチ、具体例（その他、よかった）。
- 分かりやすく事例発表がありよかった（大学、よかった）。
- 目新しい話ではありませんでした（大学、どちらとも言えない）。
- 「結局、主体性は測れない」という結論で終わってはこまる（高校、どちらとも言えない）。
- 「主体性」の評価の「限界」は明確化したが「挑戦」が見えなかった（高校、どちらとも言えない）。
- 「主体性」をどのようにとらえ、どのように評価するか of 具体的内容を発表していただくため（高校、よかった）。
- 「主体性の評価」の課題がある程度理解できました（高校、よかった）。
- 「進路を見つめ直す機会」としての位置付け（高校、よかった）。
- アカデミックな論点が高校の現場の教員にも分かりやすく整理されていた（高校、よかった）。
- いずれもです（高校、よかった）。
- これから各学校でやっていかなければならない評価について考えさせられた（高校、よかった）。
- ただ具体的な主体性の評価は難しいという結論で基調講演としてはもやもやしている点もある（高校、よかった）。
- テーマに沿った分かりやすい発表であった（高校、よかった）。
- とても参考になった。まだ佐賀大学の評価方法もよくわかった（高校、よかった）。
- もう少し具体的に話を期待していた。一般論として我々が認識している以上の話は少なかった（大学、どちらとも言えない）。
- もう少し具体的事例があるとよかった（高校、どちらとも言えない）。
- やや抽象的だった主体性の評価について、迷うところは一緒だと感じた（高校、どちらとも言えない）。

- わかりやすい (大学, よかった).
- わかり易かった (その他, よかった).
- 一般的 (高校, どちらとも言えない).
- 一般論であった (高校, どちらとも言えない).
- 課題がわかりやすくまとめられ明確になった (高校, よかった).
- 共感できた (悩みどころは同じ) (大学, よかった).
- 筋が通っており, 大いに参考になる (大学, よかった).
- 具体的な考え方, 入試への導入方法の示さが得られた (大学, よかった).
- 結局どうしたらいいのかを知りたかった (高校, どちらとも言えない).
- 現場の考え, 意見を偏りなく聞けた (高校, よかった).
- 考え方の方針が明確になりました (論点も) (高校, よかった).
- 高大接続改革における「主体性」の評価について具体的な問題点を明らかにしていたので (高校, よかった).
- 今後の指導につながる主体性の考え方が少しだが分かった (高校, よかった).
- 佐賀大学としての立場が良くわかった (高校, よかった).
- 佐賀大学の自己推薦書は主体性の入試の評価としてひとつの到達点と感じられた (大学, よかった).
- 佐賀大学の先生の話は, 評価する側の視点でためになりました (高校, よかった).
- 昨年度の報告と重複 (高校, どちらとも言えない).
- 自大学の事例を参考にいただいたので (大学, よかった).
- 実際の例が多ければよかった (高校, どちらとも言えない).
- 主体性とは何か, その評価の難しさを改めて認識できた (大学, よかった).
- 主体性についての大学としての評価法の実例を知ることができたので (高校, よかった).
- 主体性に対してわかりやすく良かった. 様々な学校の実情とまじえて, 参考になった (高校, よかった).
- 主体性のとらえ方の難しさを理解した上で佐賀大学において工夫されている点を知り参考になりました (高校, よかった).
- 主体性の評価が難しいことを共有できた (高校, よかった).
- 主体性の評価について, 手さぐり段階であることが分かった (大学, よかった).
- 主体性の評価に大学がどのように取り組んでいるのかがよく分かりました (その他, よかった).
- 主体性の評価の現状, 課題について, よく理解できました (高校, よかった).
- 主体性の評価の分類や, S 大の評価手法を理解できた (高校, よかった).
- 主体性の評価はやはり難しいと思った. 今後もっと踏み込んだ話しが聞きたい (高校, よかった).
- 主体性の評価方法をポートフォリオ (高校, よかった).
- 主体性を発揮する場面が不平等な状態で入試に活用できるのか疑問に思った. また主体性を評価するのは, 大学側でも困っているのではないかと思う. 特に学力+ α 型の入試をしている中堅大学の方が入試を多様化, 複雑化するのではないかと懸念を抱いている (高校, よかった).

- 主体性評価の難しさ（高校，よかった）。
- 主体性評価の論点が明らかになった（高校，よかった）。
- 少し抽象的（高校，どちらとも言えない）。
- 新しい提案や発信がほしかった（高校，どちらとも言えない）。
- 新入方式の方向性が見えてきました（高校，よかった）。
- 先進のケーススタディーが参考をなった（高校，よかった）。
- 測定評価論で，できることでもないことがはっきり示していたこと（高校，よかった）。
- 大学，高校のどちら側からの意見がきけるため（大学，よかった）。
- 大学に合致した学生に入学希望者になったもらうことが大切（大学，よかった）。
- 大学の考え，取り組みが具体的に理解できた（高校，よかった）。
- 大学の考える主体性について実践的内容の話であった（高校，よかった）。
- 大学の立場での考えを聞くことができ．高校の立場として大変参考になった（大学，よかった）。
- 大学も評価に関して入試制度を重視していることが理解できた（高校，よかった）。
- 大学側の考えを知れた（高校，よかった）。
- 大学側の立場での話を聞くことができたから（高校，よかった）。
- 大学側はどの層に対して，評価を用いるか参考になった（高校，よかった）。
- 大学入試における主体的評価についてのここまでの踏み込んだ話はなかなか聴けない（高校，よかった）。
- 地方の具体例が示された（大学，よかった）。
- 適切でまとめられていた．分かりやすい（大学，よかった）。
- 途中参加のため聞いていません（その他）。
- 当たり前のことを話していた（高校，どちらとも言えない）。
- 内容な簡潔に整理されて，とてもわかりやすい（高校，よかった）。
- 難しい主体性の評価に対し，どう取り組んでいるか具体的なお話しがあると有難かった（高校，よかった）。
- 入試における「主体性」に対する視点が具体的であった（高校，よかった）。
- 入試の制度設計について（高校，よかった）。
- 漠然と持っていた不安や不満に論理性を与えて頂いた（高校，よかった）。
- 評価が難しいということはよくわかった（高校，どちらとも言えない）。
- 評価の問題点が分かりやすく示していた（高校，よかった）。
- 評価は公表すべきなので公表される生徒はその評価される行動を先回りして行う．これは昔からかわっていないし，大人がやっていること．主体性のある生徒は誰にも評価されないことをやっている主体性が評価されることは永遠にない（高校，よかった）。
- 不安な高校現場への安心感（高校，よかった）。
- 本校，多くの生徒がターゲットになる大学の現状を聞くことができたから（高校，よかった）。
- 問題の本質を解り易く指摘して戴いた（高校，よかった）。

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- (1) 開成。(2) 田名部。(3) 観音寺第一 → 伝えたいことが明白でない（高校）。

- (1) 観音寺の先生はよかった。東北大の先生もよかった。学校内のアクティブの「ダブルスタンダード」は、全くその通り。大人好みの生徒のみが有利な国です。(2) 主体性の評価に対する考えが知りたい。国公立大の数は安全策をとるから(入りやすくなっている)。→ 学力が上がると国公立の数はとまる(意欲をもってチャレンジするので)。国公立の数を結果とすると主体性の評価につながらない(高校)。
- (1) 田名部高校の千葉栄美先生。(3) 2は現状報告ではない(高校)。
- 千葉栄美先生素晴らしい(その他、よかった)。
- 「主体性」と言葉に対して、様々な考え方が聴けた(その他、よかった)。
- 3校の選択が面白い(高校、よかった)。
- いつものことが、現場の先生方のお話しはとても参考になる。都市部の私立高校と地方の公立高の対比も面白かった(高校、よかった)。
- スライドの見せ方に工夫を(高校、改善すべき)。
- それぞれのアプローチからの主体性、それで評価することの難しさについて、検証、報告して頂き、自分の考えがまとめられる。充実した時間だった(高校、よかった)。
- つかみにくくテーマに迫る様々な事例は参考になりました(高校、よかった)。
- 各々の現場でもなやみながら生徒を育てるという観点で「主体性」と向き合っていた(その他、よかった)。
- 各校の側からの考えが聞けてよかった(高校、よかった)。
- 各高校に今回のテーマの主旨が伝わっていないのでは？(高校、改善すべき)。
- 各高校の取り組み、現状が分かった(その他、よかった)。
- 関心によるため(大学、どちらとも言えない)。
- 求めているテーマが適格に伝わるようにするとともによかった(大学、よかった)。
- 求められる「主体性」とこれまで行ってきた「主体性の育成」の違いが分かった(高校、どちらとも言えない)。
- 教員側の主体性への自信を持つ必要性を感じられた(高校、よかった)。
- 具体的な事例が少ないように感じた(高校、どちらとも言えない)。
- 現場の実情、共感できる部分が多かったから、全体的に主体性を育む教育は肯定的であるが、その評価には否定的であるという流れだったと思うが、積極的に評価(数値化)に取り組む事例があると、対比出来て良かったと思う(いなかったのかもしれないが)(高校、よかった)。
- 現場の声をきくことができた(高校、よかった)。
- 高校の事例は地域のカラーが分かった(その他、よかった)。
- 高校教育現場の「主体性」の捉え方を知ることができた。高校と大学の捉え方の違いがあっただけでいいと感じた。また、そのリスクを考えると入試の利用よりも、高大の教育接続への活用というのがベターと感じた(大学、よかった)。
- 高校現場のとりくみと聞く機会が会って良かった(大学、よかった)。
- 高校現場の考えはよく山かるが、どうとらえるかもっと前向きな発想で発表して欲しかった。東北大学の発表はとても参考になった(大学、改善すべき)。
- 質の差が激しかった(高校、どちらとも言えない)。
- 主体性に関しての問題提起をはっきり明示して欲しかった(学校紹介的な分量が多いよ

りに思う) (高校, どちらとも言えない).

- 主体性の育成, 目に見えない成果をどうするか, 東北大 AO 入試の現状 (その他, よかった).
- 主体性を育くんでいる実践が知れました (高校, よかった).
- 主体性を評価することが難しいと感じているのが全国で共通の認識. これを無理やり入試にとりいれても, うまくいかないことが多いと感じた (高校, よかった).
- 取り組みが共有できてよかった (その他, よかった).
- 千葉栄美先生, 石井祐基先生, 有山先生, 宮本先生 (その他, よかった).
- 千葉先生, 石井先生の取組事例 (その他, よかった).
- 千葉先生のお話しが印象に残りました (高校, よかった).
- 千葉先生の報告, 熱かったです. とても良かった (高校, よかった).
- 多様な多面的な報告があって良かった (高校, よかった).
- 大学の現状を理解できた, それぞれの観点からの話があってよかった (高校, よかった).
- 地方の現状, 日本一の進学校の現状, 状況が違えて, 主体性に対する考えは共通していることが感じられて, 安心した (大学, よかった).
- 地方の高校にスポットを当てていただきありがたかった. 東北大学の入試における主体性のとらえ方は一方なものではないかと思った (大学, よかった).
- 田名部高校の先生の評価が子供たちを逃走させるという発言は重かった. 評価することか評価の妥当性を失わせると考える. そして, 全人的教育を考える高校側と大学側の感性とのかい離が際立った気がした. 教育と研究の軸足の違いがかみ合わない (高校, よかった).
- 田名部高校の発表では, 自ら学校事情が同じで, いいアイディアを頂けた (高校, よかった).
- 東北大学の AO 入試については説明会等にも参加しているため, 内容が重なっている. すでに理解されている先生方も多かったのではないかと. 高校の先生方 3 名の発表は大変参考になった (高校, どちらとも言えない).
- 東北大学の求める人物像が具体化した. 内発的動機を大切に, 自律のある生徒を育てみたい. 開成の「任せる」が中々出来ないんですよ. 特に最近生徒の個性がないようで. そんなことを言ってもらえませんね (高校, よかった).
- 特に, 石井先生のアンケート結果分析, 宮本先生の心理学からみた主体性 (高校, よかった).
- 特に高校の状況がよくわかりました (大学, よかった).
- 日本の様々な立ち位置の学校の先生の話しを聞いたから (高校, よかった).
- 評価の難しさについて様々な視点から話を聞いた (大学, よかった).
- 報告のみならず, 「主体性」そのものについての考察や, 評価をどうすべきについて, アンケート等多様な考え方ができた (高校, よかった).
- 報告者に差がある (高校, どちらとも言えない).
- 様々な学校の事例が伺えてよかったです (高校, よかった).
- 様々な取り組みについて具体例を共に聞いた (高校, よかった).
- 「結局, 主体性は測れない」という結論で終わってはこまる (高校, どちらとも言えない).

い).

- 「主体性」の評価の「限界」は明確化したが「挑戦」が見えなかった（高校、どちらも言えない）.
- 「主体性」をどのようにとらえ、どのように評価するかの内容を公表していただくため（高校、よかった）.
- 2と3の主体性の考え方は参考になった（高校、よかった）.
- 4つの報告を総合的に考えることで主体性評価についての論点が明確になってきた（高校、よかった）.
- いずれもです（高校、よかった）.
- お話自体はすごく勉強になったし、興味深かったが、入試に主体性評価を導入することについて、お三方とも同一のご意見であったように聞こえた。私個人も意見としては「その方向」ではあるが、「逆方向」の話も聞く必要があると感じた。もっとも、深く考えれば考えるほど、主体性の数値的評価は…という結論に至るという面もあるのでしょうか…（高校、どちらも言えない）.
- それぞれの学校の特色が出ていてよかった（高校、よかった）.
- それぞれの発表者が異なる視点で「主体性」をどう見ていくかについて発表があり良かった（高校、よかった）.
- それぞれの立場からのメッセージがあった（高校、よかった）.
- どこでも同じような課題があり、それぞれのアプローチをしていることがわかった（高校、よかった）.
- どの学校も特別なものではなく、極めて日常的な取り組みの中で成果を求めておられることが分かった（高校、よかった）.
- パワポは配布すべきでは？高校側の理解、解釈をもっと聞きたかったが、むずかしいという答えでは話が展開しない（大学、改善すべき）.
- リアルの現場の声が理解出来た（その他、よかった）.
- 安易な主体性評価の危険性を認識できた（高校、よかった）.
- 異なった状況にある学校の話が聞けた（大学、よかった）.
- 一部の報告者に「主体性」の評価 → 困難 → ”逃げたい”を主張しているように思われた（大学、どちらも言えない）.
- 開成、東北大の先生のお話がよかった（高校、よかった）.
- 各学校により目指すところは似ていても、そのアプローチは異なるところ（高校、よかった）.
- 各学校の主体性評価に関する話を聞くことができて良かった（高校、よかった）.
- 各学校の取り組み事例など大変参考になりました（高校、よかった）.
- 各校の取り組みや考え方をお聞きし、全くその通りであると感じました（高校、よかった）.
- 各校の取り組みを知れた（高校、よかった）.
- 各校の特色が聞けて、参考になった（高校、よかった）.
- 各高校が難しい「主体性」の評価に向きあっていることがわかりました（その他、よかった）.

- 各高校での様々な取り組みに刺激を受けた（高校，よかった）。
- 各高校における「主体性」の把握について知られたので（高校，よかった）。
- 各高校の実態がわかり，自校と比較する中で，考えを深めることができた（高校，よかった）。
- 学力や地域差など，コントラストがはっきりしていて良かったです（高校，よかった）。
- 感想文になっている演者がいる．ポイントを分かりやすく，高校の教員作成のスライドには工夫が必要．予行演習不足，時間内に終わらせる，我が校自慢？大学も…どれも内容がうすい（大学）。
- 簡潔で分かりやすかったです（高校，よかった）。
- 共通理解を深める効果（高校，よかった）。
- 具体的で（高校，よかった）。
- 具体的及び，各立場の意見を聞いた（大学，よかった）。
- 結論ありき，だったのか（大学，どちらとも言えない）。
- 結論としては主体性を評価するのは難しいということか（高校，どちらとも言えない）。
- 現実的に地域間の差は大きいだろう（大学，よかった）。
- 現場（高校）のケースを聞くのは勉強になった（高校，よかった）。
- 現場における考え方が参考になりました（高校，よかった）。
- 現場の考え，意見を偏りなく聞いた（高校，よかった）。
- 現状報告 2 以外は興味深いと思います（高校，よかった）。
- 高校の見解について，主体性のとらえ方が分かった．東北大学の AO 入試における主体性の位置づけが分かった（大学，よかった）。
- 高校の生徒の様子や教員の考えを複数きくことができた（大学，よかった）。
- 高校の先生の具体的取り組み事例を聞いて，他の学校に有益な情報だと感じた（その他，よかった）。
- 高校の先生方ととてもいろいろ考えて実践されている点に感銘を受けた．東北大 AO は実情はわからないが，報告をきく限り，少し”浅い”ような気がした．入学後も評価の平均値で比較してもあまりおもしろい結果ではない感じがした．妥当性はあるかもしれませんが（大学，よかった）。
- 高校現場では主体性をどのようにとらえているかに加え，大学入試における主体性の評価をどのようにするべきか，現場教員として一歩踏み込んだ提案がほしかった（高校，改善すべき）。
- 高校事例報告①，③田名部，開成両校（高校，よかった）。
- 高等学校の主体性への取り組みの現状を知りえた（大学，よかった）。
- 参考になる発表や同感できる発表があった（高校，よかった）。
- 自分の学校の活動・取り組みと比べながら考えることができた（高校，よかった）。
- 実戦での成果・課題に対して共感できたし，勉強になった（高校，よかった）。
- 主体性について，どのような認識かをすり合わせる良い機会となった（高校，よかった）。
- 主体性について高校の苦しみがわかった（大学，よかった）。
- 主体性に対してわかりやすく良かった．様々な学校の実情とまじえて，参考になった（高校，よかった）。

- 主体性の定義・測定は容易ではない（高校，よかった）。
- 主体性の本質との評価の難しさ（高校，よかった）。
- 主体性の理解の程度に差があった（高校，どちらとも言えない）。
- 主体性への具体的取り組みがあいまいであった。また評価も（高校，どちらとも言えない）。
- 主体性をどうとらえているか（大学，よかった）。
- 主体性を手段にされては，というのは納得です（その他，よかった）。
- 主体的活動を実践している学校の取組みが非常に参考になった（開成）。また主体性評価の限界を再認識させられた（観音寺）（高校，よかった）。
- 生徒の体験が主体的行動を生むのだと感じました（高校，よかった）。
- 石井先生のアンケート報告は考えさせられた（高校，よかった）。
- 千葉栄美先生等，主体性涵養の取り組みの事例は参考になった（高校，よかった）。
- 千葉先生，有山先生はよかった（高校，どちらとも言えない）。
- 千葉先生の「積極性」≠「主体性」の話し（自分も同意）（大学，よかった）。
- 千葉先生の取り組み，開成高校の学習への考えを知れた（高校，よかった）。
- 多様な高校現場における主体性の位置付けが参考になった（高校，よかった）。
- 多様な立場からの報告があり，今後の参考になりました（高校，よかった）。
- 多様性の中で学ぶことが主体的につながっていることと改めて実感した（高校，よかった）。
- 大変参考になったものもあった（大学，どちらとも言えない）。
- 地方の中核となる進学校と有名私学の主体性のとらえ方，生徒の主体性の質を感じることができたから（高校，よかった）。
- 地方も都市も，実践していることや大事にしていることが同じで，共感できた。青森と開成の先生の話がよかった（高校，よかった）。
- 田名部の実践例が興味深かった（高校，よかった）。
- 田名部高校の報告が有意義でした（高校，よかった）。
- 田名部高校の報告が良かった（その他，よかった）。
- 特に高校の現場の声が聞けた点（大学，よかった）。
- 特に田名部高，千葉 T（大学，よかった）。
- 発表者の切り口がオーバーラップしていなかったもので，多面的に考える事が出来たので良かったです（高校，よかった）。
- 批判的論点の表示（高校，よかった）。
- 明確さに欠ける内容もあり，議論にあがらない内容もあったのではないかと（高校，どちらとも言えない）。
- 有山先生と宮本先生のお話がとてもわかりやすかった（大学，よかった）。
- 有山先生の話 → 学びの定義，自分の能力を高める。 宮本先生の話 → 不合格者が納得できる入方式 ナルホド（高校，よかった）。
- 様々な見解が聞けたことは良かったと思う（高校，どちらとも言えない）。
- 様々な立場からの意見が聞けよかった（大学，よかった）。
- 様々な立場でも現状が聞けて良かった（高校，よかった）。

5. ディスカッションは如何でしたか.

- +α踏み込んだ話が聞けた (高校, よかった).
- (まとまらないことが覚悟の上ですが) → あえてモルガン・スタンレー等人事 (評価) の方等, パネラーにおむかえして議論を横に広げるのもありと考えます (高校, どちらとも言えない).
- 「主体性」というのがみんな難しいということを共有できてよかった (高校, よかった).
- アカデミックな心理学の観点が加っていたから (高校, よかった).
- あまり, まとまらず, 盛り上がりには欠けたと思うから, 主体性は難しい (高校, どちらとも言えない).
- とても有意義なものでした (高校, よかった).
- どの方の発言も, それぞれのお立場の責任感が感じられて, お聞きできたことが収穫でした (大学, よかった).
- もう少し整理された質疑ができるとうい (高校, どちらとも言えない).
- 意見がまとまらないところがよかったと思います (高校, よかった).
- 学力に主体性は含まれるということならば, ペーパーでも主体性ははかれると思います. でも, ペーパーの点数がいいから, 必ずしもリーダーシップをとり他者のために行動できる人物とは限りません. よって, 主体性をはかるというのは, これまで評価されなかった部分を評価するという事ではないのでしょうか? (高校, よかった).
- 議論の目先の事だけになっている気がする (大学, どちらとも言えない).
- 具体的なエビデンスのない事柄の取扱い (その他, よかった).
- 参考になりました (高校, よかった).
- 司会の方が分かりやすくしようと考えてだとは思いますが, そこに時間を取られすぎのではないかと思います (大学, 改善すべき).
- 司会の方の解釈にかたよりがある (高校, どちらとも言えない).
- 質問に答えるだけでなく, ディスカッションかもってあるとよかった (高校, よかった).
- 質問等が会の本質から外れるものが多かった印象 (高校, どちらとも言えない).
- 主体性とは入試の力のためではなく, 生徒の力を伸ばすためのものと感じた (高校, よかった).
- 主体性についての確認ができた (高校, よかった).
- 主体性の育成と評価について, 再認識する良いディスカッションだった. 学校により, 「主体性」の位置づけは認識に違いがあることは分かったが, 根本に共通した流れをばくぜんのめではあるが感じる事ができた (高校, よかった).
- 主体性は計れないのではないかと皆さん思っているようです (高校, よかった).
- 主体性を測ることを深く考えられた (高校, よかった).
- 主体性評価をぜひやって欲しいと考えている高校の先生がいたら, そちら側の意見も聞いてみたかったです (大学, どちらとも言えない).
- 声が聞こえにくい (高校).
- 西郡先生に (なんか皆が納得できそうないい方法) についての答えが出なかったな (その他, どちらとも言えない).

- 先生の考えを聴くことができた（その他，よかった）。
- 先生方お一人お一人のお話が聞けて，大変参考になった（高校，よかった）。
- 全体としての方向性が見えた（高校，よかった）。
- 難しさということの共通認識を確認できた（高校，よかった）。
- 発表内容をより深く理解できました（大学，よかった）。
- 報告の話をさらに聞くことができたから（高校，よかった）。
- 本校の抱えている課題と照らし合わせて聞くことができた（高校，よかった）。
- 問題を解決できた（高校，よかった）。
- 有本先生の「(新しい基準を持ち込んでも)．結局，適応力のある子が合格する」という発言に非常に共感した（高校，よかった）。
- 良く整理されていた（大学，よかった）。
- 「限界への挑戦」にしては後ろ向き感が強かったですが…（高校，よかった）。
- 「主体性を評価する」とは，どういうことなのでしょう。悩みが増えましたが，良い会でした（大学，よかった）。
- アンケート以外にも質問時間がほしかった（高校，改善すべき）。
- アンケへの回答よりも今回の話の中からテーマをみつけ確認をしてほしかった（大学，改善すべき）。
- いろいろ聞けてよかった（高校，よかった）。
- この部では東北大の先生の深さが少しわかった．・内発的，外発的動機づけの関係性．・表現力だけで見極める力は大学の先生にある．司会の方のメッセージ（企画しゅし，問題ていき）．がきけたのもよかった（大学，よかった）。
- さらに質問を掘り下げたことにより，本音がきけたと思う（大学，よかった）。
- すいません聞くことができませんでした（高校）。
- テーマについて議論が深まらなかったため，質問にこだわりすぎたと思われます（高校，改善すべき）。
- トートロジーになってしまっている．”主体性”とはという問いを深く掘り下げて欲しい．問いが焦点化されていないと思う（高校，改善すべき）。
- パネラーが同質的でつまらない．ディスカッションは予定調和的である必要はない（高校，改善すべき）。
- ポイント毎に貴重な意見を伺うことができました（高校，よかった）。
- マイクがききづらい（高校，改善すべき）。
- 課題が明らかになった（高校，よかった）。
- 活発でよかった（高校，よかった）。
- 議論が深まって良かった．一般選抜については，アドミッションポリシーに合致しない生徒も受験するのが現状．現実問題として不本意入学も認めつつ，大学入試改革を進めて欲しい（高校，よかった）。
- 具体的で（高校，よかった）。
- 具体的なお話がきけてよかった（高校，よかった）。
- 具体的な主体的である事例を確認できた（高校，よかった）。
- 結論ありき，だったのか（大学，どちらとも言えない）。

- 結論は変わらないと思います（大学，よかった）。
- 講演，報告の内容の再確認が多かった（高校，どちらとも言えない）。
- 講演・報告で受けた印象よりも深く広く個々の方々のお考えをうかがえた．一部，誤解していた部分にも気づくことができた（高校，よかった）。
- 講演の内容の理解を深めることができた（高校，よかった）。
- 講演者の話を振り返る必要性を感じなかった（高校，どちらとも言えない）。
- 今回のディスカッションが新共通テストに反映されることを望む（大学，よかった）。
- 参加できず，申し訳ございません（高校）。
- 司会がまどろっこしい．冒頭のまとめが長い．論点が整理されていない（大学，改善すべき）。
- 司会が話をまとめすぎでは（高校，どちらとも言えない）。
- 司会の質問とまとめが（高校，よかった）。
- 司会の先生のまとめ方をもう少し丁寧にお願したかった（高校，どちらとも言えない）。
- 司会の方の感想が長すぎる．もっと発表者の方や質問した方の見解を深めてほしかった（高校，改善すべき）。
- 司会の話が長かった（高校，よかった）。
- 司会者（倉元先生）がしゃべりすぎ，イライラしすぎ，会場の質問回答を優先していただきたかった（大学，改善すべき）。
- 司会進行がスムーズではなかった．主観が入っておりプレゼンターの話をもっと引き出せておらず，聞きづらかった（高校，改善すべき）。
- 事例であったり，主張の方向性であったり，ポイントがあわないものがあり，討議の高まりに欠けた（高校，どちらとも言えない）。
- 時間が少ないのでは？（高校，どちらとも言えない）。
- 時間が短かったかもしれない（高校，改善すべき）。
- 質問がモニターにうつるとよかった（高校，どちらとも言えない）。
- 主催側の主導ではなく，質問を中心に行ってほしかった（大学，改善すべき）。
- 主体性についての多面的見方がわかった．現在の状況がわかった（大学，よかった）。
- 主体性の評価どうなるのか楽しみです（高校，よかった）。
- 主体性の評価についてさらに考えを深めることができた（高校，よかった）。
- 主体性を切り口に高校での教育についての考えも深めることができたから（高校，よかった）。
- 進行役の進め方に問題あり，ディスカッションがグダグダになっている（高校，改善すべき）。
- 政策として推し進めている立場の方の参加がほしかった．質疑応答メインの時間にするのはもったいない．みなさん？の主体性の評価についてディスカッションして深めてほしかった（高校，改善すべき）。
- 千葉先生の言葉に誠意と力を感じた．西郡先生のご対応も誠実さを感じた（高校，よかった）。
- 短い時間の中で進行が難しいと感じた（その他）。
- 抽象的議論にとどまっている（高校，どちらとも言えない）。

- 柱がはっきりしなかった（高校，どちらとも言えない）。
 - 直接本音の話を拝聴できた所です（高校，よかった）。
 - 東北大学の入試は先進的である（高校，よかった）。
 - 入試改革の必要性については企業側からの要求も大きく関与しているはずだが，その辺の話が無かった（高校，どちらとも言えない）。
 - 発表の内容が深まった．各校の様子がわかった．だけど今回のテーマ「主体性」の評価は今後どうなる見通しなのか → ここでの意見，考え方は一般的だと明らか，そういう声は反映された制度設計はなされるのか（高校，よかった）。
 - 発表後の踏み込んだ話が聞けてよかった（高校，よかった）。
 - 発表者それぞれ，テーマに対する理解のズレ（高校，改善すべき）。
 - 評価に関する内容は深まった．具体的事例が出てきてよかった（高校，よかった）。
 - 問題点が明確化されず，議論が散逸してしまった（大学，改善すべき）。
 - 様々な意見を聞くことができた（高校，よかった）。
 - 論点がはっきりしない場面もあった（高校，どちらとも言えない）。
 - 話が様々な方向に行き，良くわからなかった（高校，改善すべき）。
6. 時間は如何でしたか。
- 各講演はちょうど良い。ディスカッションは長すぎた（高校）。
 - 高校からの現状報告は2本あるいは精選した1本でよいのではないか(高校, 長すぎた)。
 - 多少長い気がします（高校，長すぎた）。
7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば，どのような形式，テーマを望まれますか。
- APに合致する志望者集団を形成するための高大接続のあり方について（大学）。
 - ごく最近のニュースにありました。「情報について，入試科目とする以前の教員の養成など多くの課題が山積しています。高校現場の混乱が予想されます（高校）。
 - このような新しい内容を論議できる内容が良いです（高校）。
 - この形式でよい（高校）。
 - シンポジウム形式でOKです（高校）。
 - パネルディスカッション形式を望みます（その他）。
 - もう一度，主体性でも良いと思う。具体的な評価方法などの論議を深める（高校）。
 - もう少し情報が多く出てきた時点で同じテーマで講演を聞きたいと思います（高校）。
 - 英語4技能，倫理的な文章の書き方，読み方（その他）。
 - 記入者は本テーマにかかわって間もない人間なので，議論の前提背景となる tutorial のような話も欲しかった。主体性の位置づけ等（大学）。
 - 共通テストのみならず，大学独自の入試はどう変わるのか？思考力の育成をどうして行けばいいのか，扱ってほしい（高校）。
 - 教育現場における「インクルーシブ(教育)」の必要性（その他）。
 - 興味，関心の引き出し方，個性の引き出し方（高校）。
 - 高校と大学の現場の状況がよくわかるスタイル（高校）。
 - 高大接続にかんするテーマがよい（高校）。

- 高大連携，接続の方法について（大学）.
- 高大連携改革に関するテーマがタイムリーだと考える（高校）.
- 高等学校教育に関するものでも良いのではないのでしょうか（大学）.
- 今回のように高校側の解釈と大学側へ乖離しているテーマ（高校）.
- 参加者の情報交換や交流する場があってもいいと思います（大学）.
- 自分は英語教員なので，大学入試の 4 技能化にはとても興味があります（高校）.
- 主体性の続き（その他）.
- 振り返るとメタ認知について（高校）.
- 制度の改革，適正な運用に繋がるテーマを設定してください（高校）.
- 大学，高校の立場の意見交換が出来る場がある現状でとても良いが，文科省の立場の方もいるとよりよいと感じた（高校）.
- 探求，探索する態度技能を養う教育（テーマ）（高校）.
- 調査書のあり方について（大学）.
- 日本人ではない，第三者（他国の情姿について含む）話を直接ききたい（高校）.
- 来年の今頃，どうなっているか分からないので，ちょっとタイムリーなテーマを（高校）.
- ” ディスカッション ” ではないと感じる（高校）.
- 「主体性とは何だろうか，第 2 弾」 高校教員，大学関係者，政策関係者，芸能・経済・国際 etc. 各界関係者の中から主体性が高いと思われる方々を招き，フリートークしてもらおう（高校）.
- ・AL 全般について ・参加型の討論会など（高校）.
- 33 年新入試までは，継続して入試改革をテーマにして欲しい（高校）.
- このテーマでもう一度やって欲しい（高校）.
- これからの日本を担う人材に対して高大でどのような能力を育てていくのか（高校）.
- これから大学，社会ではどのような人材が求められているのか，そのために高校時代にできること，取り組み（高校）.
- ディスカッションをするならテーマを整理やしぼるなど目的を明確化した方が良い（高校）.
- 引き続き，教育改革の新しい潮流をとりあげて頂きたいと考えています（高校）.
- 引き続き「大学入試」をテーマに（高校）.
- 教育改革とその背景の文脈に注目した内容（高校）.
- 教科横断型・合教科型問題の行方，可能性（高校）.
- 結論はまだ出ないと思うので，引き続き同じようなテーマを希望します（高校）.
- 現在のような形式でよい（高校）.
- 現状で可（その他）.
- 高校で，どのような教育実践を期待しているのか，という大学からの視点でのメッセージを知りたいです（高校）.
- 高大転換教育の重要性（大学）.
- 高大連携，接続に関する内容は今後も継続してほしい（高校）.
- 今回「主体性」という捉えにくいテーマですが，とても良かったです．あえて企業やコンサル等のコンピテンシーの捉え方が教育をとりまく外部としてあってよいと思います

→あまりの違いに、教育の立場からの視点が鮮明になるかも知れません。継続すべきテーマと思います（高校）。

- 今回のように、東北地区を含め先進的、実践的な取り組みしている高校教員に登壇してもらいたい（高校）。
 - 今回のように現場の声、現状、成功例を提示する形式が良い。具体的に方法を報告して下さり、翌日から教育現場で生かせるフォーラムを希望します（高校）。
 - 今回のように重要事項を討議していただきたいと思います（高校）。
 - 今後の教育課題、AI との関連について（高校）。
 - 次期学習指導要領と大学入試／高大接続改革と portfolio の利用（高校）。
 - 主体性を評価させようとしている反対の立場の方を呼べばディスカッションが深まると思う（高校）。
 - 主体的な学びの姿勢をどう進めていくか（高校）。
 - 新テストの活用方法（特に英語 4 技能）（大学）。
 - 新学習指導要領と入試の在り様（高校）。
 - 新共通テストについて（大学）。
 - 大学が学生に教育を行っていく中での活動等、高校でも生かせそうなものがあれば紹介してほしい（高校）。
 - 大学にとって、高校に要求する「生徒の資質・能力」（高校）。
 - 大学の新入試、英語の 4 技能（高校）。
 - 大学改革に関する諸テーマ（大学）。
 - 大学全体の流れを知りたい（大学）。
 - 大学入試改革と、今後の高校教育のかかわりについて私達は何を教え育むべきか、皆で話し合い考えていきたい（高校）。
 - 地域連携（高校）。
 - 調査書をいかに活用しうるか（電子化されることが前提になってしまいますが…）（大学）。
 - 当面、落ち着くまでは高大接続改革をテーマとして扱っていただければ幸いです（高校）。
 - 同形式、新指導要領と大学入試について（高校）。
 - 入試 IR（大学）。
 - 入試における面接とは、効果的な行い方、具体例も（大学）。
 - 入試改革（教育改革）が直面している課題を（文科省の対応に沿って）その度取り挙げて戴きたい（高校）。
 - 部活動の縮小を求める世の中の風潮。主体性の点などからの高大接続との関連（高校）。
 - 文科省の役人も呼び、主体的かつ批判的建設的議論を求める（高校）。
 - 文部科学省への提言（大学）。
8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。
- 「主体性」は多様な行動に現れるですから、相対評価は無理です。大学が絶対評価をするための工夫をしなければならないのだと思います（大学）。
 - 「主体性」をめぐって、4 時間、大変かんがえさせられました。ありがとうございました。また、前回参加させていただいたときも、そうでしたが最後の理事の方のお言葉に、大変感銘を受けました（高校）。

- 「主体性の評価」といことばに踊らされることなく、主体性を持つ子供たちを育てていく手立ってを考え続けていきたいものです（高校）。
- 「主体的」に学ぶチャンスが地方と都市部、家庭の経済状況に左右されてはいけない。ただ、新テストの導入に向けて、これらの格差が大きな影響を与えるのではないかと懸念している（高校）。
- ありがとうございました（高校）。
- ここでの意見はぜひ文科省、そして国大協へと反映させていただきたい（高校）。
- このように全国から人を呼んで話を聞くことができ、大変有意義な時間だったと思います（高校）。
- これまでどおりの高校教育では東北大のような難関大学に入れない課題があります。「学力」の定義も含め、高校が変わる必要をメッセージとして感じました。ありがとうございました（高校）。
- とても参考になりました。特に宮本先生の AO 入試の話が参考になりました（高校）。
- 課題に対する具体的な提案があると良かった（高校）。
- 講演者、報告者の皆さんが「主体性の評価は難しい」と。事前のすり合わせは無いのですかね。不要と思います（高校）。
- 高大連携の結果の検証もお願いしたい（大学）。
- 今年のテーマそのものが抽象的で定義づけから始めなければならなかったところが難しかったですね（高校）。
- 主体性も評価すべきことの一つでよいのでは。ものさしは多い方が良く、多様な力が評価されて欲しい。この子のこのよさを認め、伸ばして欲しいと思うことが多くあります（高校）。
- 主体性をはかるのは難しい、基準がないから、いままで通りの評価でいいということではなく、新しいやり方を探していくべきだと思いました（高校）。
- 準備、運営など、お世話になり、ありがとうございました（大学）。
- 政府も大学も、歯止めなく改革を行い、高校の混乱が置き去りにされている気がします。高校の意思決定をする 50 代の教員が採用されたのは 30 年前で、彼らの多くは未だにパソコンの操作も英会話も十分ではありません。教員養成のしくみ、研修のしくみにもメスを入れて欲しいと思います（高校）。
- 体制側（国側）の意見をもった人も登壇させて欲しい（その他）。
- 大変よいゼミナーでした（大学）。
- 大変良いフォーラムでした、ありがとうございました。次回も是非参加したいと思います（高校）。
- 田名部高校の実践と東北大の入試について、大変参考になりました（高校）。
- 討議で、千葉先生も話していたが、「主体性」は本来、幼少期より家庭や地域で育むものであると考える。教育界だけではなく、社会全体、日本の問題である（高校）。
- 入試でとった生徒をどのように大学で育てているか（大学）。
- 非常に勉強になりました。ありがとうございました（大学）。
- 勉強になりました（高校）。
- 「学力の高い生徒は主体性を持っている」まさしくその通りだと思う。が、であるので今回の改革の題目はともかく、入試方式としては、そんなにいじる必要があるのか、とも思う。今回の改革の何割かの部分はあまり長続きしないような気がする（高校）。
- 「主体性」って入試で評価すべきか。私はそうは思っていない。多分、高大で育むものではないかと、最近思っていました。そのためのポートフォリオの導入が必要かと考える。とは言え、評価しないといけないので悩ましいです（大学）。
- 「主体性」という概念に対して、主体的ではなかった。このテーマであれば、文科省の役人、哲学者、科学者も巻き込み、根本的な議論をすべきだった（高校）。
- 「主体性」の他にも内面的なものを評価する入試が始まろうとしているが、高校はその対応について保護者等への説明が求められている。企業もビジネスチャンスとばかりに商品をすすめてくる。誰のための入試なのかと疑問を感じる日々を過ごしている。「主体

性は育てるもので、入試用に評価すべきものではない」に大賛成（高校）。

- ・単なるやっつけの現状報告はいかがなものかと思います（現状報告 2）。 ・現状報告 4 は心理学的側面が強く、「主体的」を考えるとときのキーコンピテンシー論の背景のドナルド・ショーンの議論を抜けてしまうと思います（高校）。
- ありがとうございます（高校）。
- ありがとうございます。勉強になりました（高校）。
- ありがとうございます、役立ちます（高校）。
- このテーマであれば社会（経済産業界）の意見も聞きたかった（大学）。
- このような、教科や部活動の枠を超えたフォーラムに初めて参加しました。とても意義でした（高校）。
- このような機会を与えて戴きありがとうございました（感謝）（高校）。
- さすが東北大！すばらしいです（大学）。
- ディスカッションは、もう少し長くしてもよいと思いました。ありがとうございました（高校）。
- テーマは面白かったが、結論の出にくいものの確認で終わった感がする。「挑戦」とあったので、私案・試案でも良いので「挑戦」が聞きたかった（高校）。
- とても貴重な意見ばかりでした。ありがとうございました（大学）。
- とても参考になるお話を聞くことができて良かったです（高校）。
- ホール内が暑かった（大学）。
- もっと、東北大学の取り組みや東北大学の先生方のお話を聞きたいと思います（高校）。
- 遠くを見て将来の自分を考えられるようになれば、主体性が自然に生じてくると思われま。本日のご指導に感謝申し上げます（高校）。
- 課題、批判的論点の提示がなされ興味深かった。勤務校が生徒へ与える教育を主にして、いることもあり、傾聴に値する内容であった（高校）。
- 学力の要素としての主体性とその評価が問題なので、部活や行事に主体的に取り組むという話にすりかわっているのではないだろうか（その他）。
- 観音寺第一や開成の事例は説得的であるが、卓抜した進学校ならでは、でしょうね（大学）。
- 教育現場で求められる力が変化する中、生徒を変えるためには、教員を変えなくては行けないが、関東と比べ、東北の教育者へのサポートは少ない。教員の教科力、指導力向上に関する手立て、提案が土台にあるべき。国際アカデミアのような取り組みを期待します！（高校）。
- 現状報告者はどのような観点で選んだのか気になりました（高校）。
- 今回のような「そもそも論」みたいなことを考えるのはいいことだと思いました（大学）。
- 参加して良かったと思えるフォーラムできた（高校）。
- 質問を記入する時間を少し取ってもらえると良い（大学）。
- 主体性という用語は使わずに、3 つ目の能力は「積極的に多様な人々と共同して学ぶ態度」とすべきではなかろうか、この方も高校側もよいのではないか（大学）。
- 主体性について考えるきっかけをいただきました（高校）。
- 主体性に限らず、英語 4 技能など決まったことから迅速な発表をお願いします（その他）。
- 主体性の評価に各関係者が戸惑い苦労していることがわかった。ただ、その中でそれぞれの学校で様々な取り組みをしていることも改めて認識した（高校）。
- 主体性の評価のむずかしさがわかった。評価に主体性が入ったことで高校生の行動が変わるということが共有できた（大学）。
- 主体性は評価が難しいという主旨の内容は当然のことで、その前提の発表は意味がない。どう計量化するのか、どう大学側がこれから選抜に生かすのかも具体的に示してほしい（高校）。
- 主体性は評価できないという結論であったような気がするが、それではどう対応すべきかの議論が少なかったような気がする。大学入試で一番大事なのは公平な評価であろうと思う。だから努力できる、それが主体性を生む（大学）。

- 主体性は評価困難だが、教育を変える言葉となりつつある (大学).
- 7 に記載のように全員が同じような意見を述べるのではなく、反対意見の人も必要と感じた (高校).
- 西郡先生の御発言は勉強になりました (高校).
- 大学に入って、学び続けてほしい生徒は、やはり主体性ある生徒です. そのような生徒を正当に評価するシステムは必要なハズであり、今後とも開発して行して下さい. が私の落とし所でした (高校).
- 大学入試は公平性が一番. 不合格者が納得できるかどうかは極めて大事. 結局は学力の高い生徒, 実践のある生徒＝主体性のある生徒と評価するのではないかと思います (高校).
- 大変よいフォーラムであったと思います (高校).
- 大変勉強になりました (高校).
- 抽象的なテーマに正面から取り組んでいただきましたが、なかなか難しいことでした. これからも考え続けたいといけなかったと感じました (高校).
- 東北大の宮本先生の資料について「AO 推薦の生徒は入ってから成績がよい。」これは本当によいのか. センター重視の AO は「合格しそう」な安全性がわかる → もっと難しいところにチャレンジしない層 (予備校の判定や教員のいうことをきく人たち). → 安全策と言われないように「第一志望」とエクスキューズする. 一般入試を受ける生徒は他大学に安全に入れることがわかっている → あえて東北大にチャレンジ層 (主体的に動く人たち). そして意欲を最大限に出して、自己ベストが出て、入学後の講義に耐えられるレベルの人たちが合格する. 入試はそもそも入ってからやっていける学力を測るものなので、いくら主体性、意欲が高くても合格させてはいけない → 主体性の評価は入試とは別なところで発動すべき (高校).
- 特になし (大学).
- 入試に関し、もう少し掘り下げた話が聞ければと思います (その他).
- 発言者のマイクが聞きにくかった. せっかく遠くから、時間とお金を掛けたのに残念です (高校).
- 非常にためになる会でした. また次回も期待しています (高校).
- 非常に有意義な時間でした. 機会があれば、また参加したいです. 有難うございました (高校).
- 本日は期待通りのお話が聞けました. ありがとうございます (大学).
- 理想は大切だが検証をもっとしっかりしていくべき (大学).

参加者統計

1. 参加者総数: 403 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 94 名, 高校: 225 名, スタッフ等: 18 名, その他: 52 名)

2. 参加者地域別

宮城県内: 143 名

宮城県以外の東北地方: 123 名

(青森県: 17 名, 岩手県: 24 名, 秋田県: 13 名, 山形県: 32 名, 福島県: 37 名)

東北地方以外: 137 名

(北海道: 11 名, 茨城県: 9 名, 栃木県: 4 名, 群馬県: 3 名, 埼玉県: 3 名, 千葉県: 2 名, 東京都: 37 名, 神奈川県: 5 名, 新潟県: 7 名, 富山県: 1 名, 石川県: 2 名, 山梨県: 1 名, 長野県: 5 名, 静岡県: 4 名, 愛知県: 3 名, 三重県: 1 名, 滋賀県: 1 名,

京都府: 3 名, 大阪府: 11 名, 兵庫県: 1 名, 和歌山県: 1 名, 鳥取県: 1 名, 島根県: 1 名, 岡山県: 5 名, 広島県: 3 名, 香川県: 2 名, 愛媛県: 2 名, 高知県: 2 名, 福岡県: 3 名, 佐賀県: 1 名, 宮崎県: 2 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 28 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	石井光夫	
企画責任者	倉元直樹	
事務局	宮本友弘	泉毅

当日スタッフ

石上正敏	檜田豪利	川面きよ
鎌田裕子	熊井弘子	古瑞
庄司強	田中秀樹	野田文香
秦野進一	羊薺	林如玉

IEHE TOHOKU Report 76

第 28 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [15]

「主体性」とは何だろうか

— 大学入試における評価とその限界への挑戦 —

発行：2018 年 10 月

編集：石井 光夫，倉元 直樹，宮本 友弘，泉 毅

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所：株式会社 ホクトコーポレーション